

国立大学法人豊橋技術科学大学  
グローバル工学教育推進機構 (IGNITE)

国際協力センター (ICCEED)

国際交流センター (CIR)

国際教育センター (CIE)

2014年度（平成26年度）活動報告書

Annual Report - Fiscal Year 2014



Institute for Global Network Innovation in Technology Education (IGNITE)

Toyohashi University of Technology

International Cooperation Center for Engineering Education Development (ICCEED)

Center for International Relations (CIR)

Center for International Education (CIE)



# 目 次

■ グローバル工学教育推進機構長 挨拶 .....	1
---------------------------	---

## 国際協力センター (ICCEED)

■ 国際協力センター長 挨拶 .....	5
----------------------	---

1. 国際協力センターの概要 .....	6
----------------------	---

2. 国際協力センターの平成26年度活動概要（全般） .....	7
----------------------------------	---

(1) 国際協力センターを取り巻く事業環境の変化

(2) 国際協力センターの実施体制

(3) 国際協力センターの事業戦略・活動方針

3. 国際協力センターの平成26年度活動内容（個別）	
----------------------------	--

3.1 政府開発援助（ODA）事業の実施（受託）を通じた活動 .....	11
--------------------------------------	----

(1) 産学官連携による知的クラスター振興（JICA 課題別研修）

(2-1) ASEAN 工学系高等教育ネットワーク（AUN/SEED-Net）留学生受入、教員派遣

(2-2) ASEAN 工学系高等教育ネットワーク（AUN/SEED-Net）「産学連携手法習得研修」

(3) マレーシア日本国際工学院（MJIIT）

(4) ハサヌディン大学工学部 研究・連携基盤強化

(5) モンゴル工学系高等教育支援

(6) アフガニスタン未来への架け橋・中核人材育成（PEACE）

(7) アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ

（ABE イニシアティブ）

(8) インドネシア・ソロク市浄水技術改善事業

（JICA 草の根技術協力）

(9) JICA中部短期インターンシップ

(10) 産学官連携によるインドネシア産業人材構想

3.2 本学独自の事業 - ODA事業を通じて構築した海外教育機関・研究所との連携事業 - .....	23
---	----

(1) インドネシア・スラバヤ電子工学ポリテクニク（EEPIS）

教育高度化支援

3.3 実施体制・基盤整備 .....	24
---------------------	----

(1) 『国際戦略 2015』策定

(2) 海外奨学金調査

(3) 大学間交流協定（連携活動の促進、交流協定管理）

(4) 海外事務所運営・管理

(5) スーパーグローバル大学創生事業

4. 国際協力センターの平成27(2015)年度活動計画・方針概要（全般）	30
(1) 全体方針	
(2) 個別活動	
5. ICCEED運営協議会	31
6. ICCEEDスタッフ一覧	32

## 国際交流センター（CIR）

■ 国際交流センター長 挨拶	35
1. 教育活動	36
(1) セミナー	
(2) 集中講座	
(3) 日本語研修コース・研修コースⅠ	
(4) 初中級コース・研修コースⅡ	
(5) 日本語補講・Basic Japanese	
2. 留学生相談・支援	39
(1) 留学生相談	
(2) 履修相談会	
(3) 学業相談会	
(4) 留学生のための就職支援	
(5) 留学生のための日本語能力試験等説明会	
(6) 安全講習会（自動車等の運転）	
3. 留学生交流	41
(1) センター主催行事一覧	
(2) 国際交流デー	
(3) 留学生学外研修	
(4) 地域交流	
4. 国際研修	44
(1) 特別推薦入学者等の海外研修（派遣）（ペナン校・マレーシア科学大学）	
(2) 国際研修プログラム（受入）	
（バンドン工科大学、タドラコ大学、マレーシア工科大学、マレーシア科学大学、 ホーチミン市工科大学、中国東北大学）	
5. 資料	46
－在学留学生状況	

- (1) 外国人留学生受入状況
- (2) 外国人留学生宿舎状況
- (3) 奨学金受給状況
- －国際交流センター状況
- (1) CALL 教室および自習室利用状況
- (2) 平成26年度に導入した主な設備及び教材
- (3) 行事一覧
- (4) スタッフ出張報告一覧

6. CIR スタッフ一覧 .....	52
---------------------	----

## 国際教育センター (CIE)

■ 国際教育センター長 挨拶 .....	55
1. プログラム .....	56
(1) 海外実務訓練 (グローバル人材教育システム)	
(2) 教員グローバル人材育成力強化プログラム (長期FD)	
(3) 職員グローバル人材育成力強化プログラム (短期SD)	
(4) 海外同窓生交流会	
(5) 海外教育拠点を活用した教育プログラムの検討	
2. 国内会議 .....	71
(1) 国際教育センター (CIE) 会議	
(2) 三機関連携・教育改革推進室会議	
(3) 三機関連携・海外キャンパス共同設置準備室・FD 等検討部会・ 海外展開検討部会 (グローバル部会) 合同会議	
(4) 国際教育センター運営協議会	
3. マレーシア教育拠点 (ペナン校) の活動 .....	72
(1) 所在地	
(2) TUT-USM協議会	
(3) IGNITE2014 国際会議	
(4) ペナンだより	
4. その他 .....	89
(1) マレーシア研究大学フェア (RU Carnival @ USM)	
5. CIE スタッフ一覧 .....	90

## IGNITE の取り組み

1. IGNITE セミナー ..... 93
2. IGNITE オープンフォーラム ..... 96
3. IGNITE 委員会委員・IGNITE 構成員・国際課職員 ..... 99

## 挨拶

豊橋技術科学大学  
グローバル工学教育推進機構長  
井 上 光 輝

経済や情報のグローバル化が進み、技術科学の分野でも国際的に活躍できる人材が求められています。このような「グローバル技術者・研究者」の育成を目指し、大学の教育・研究も今まで以上にグローバル化することが必須となっています。

本学ではこれまでも、アセアンを中心とした各国との連携を通して国際化を推進して参りました。開学間もない当初から、インドネシアの高等教育支援を行った、HEDS プロジェクトはその最たる例です。最近では、インドネシア・スラバヤに位置する電子工学ポリテクニク（EEPIS）の教員高度化支援も進めています。

これらの国際展開を踏まえ、平成24年には文部科学省「国立大学改革強化推進事業」として、長岡技術科学大学、国立高等専門学校機構と共に、グローバルに活躍しイノベーションを起こす技術者の育成事業を開始し、その実現のため、国立大学としては稀有な海外教育拠点をマレーシア・ペナンに設置しました。現在、このペナン校を中心として、数多くの海外インターンシップや現地マレーシア科学大学との共同による教育・研究活動等を展開しています。

これらの活動を総合的に支援する学内組織として、平成25年10月にはグローバル工学教育推進機構（IGNITE: Institute for Global Network Innovation in Technology Education）を設立し、多文化共生キャンパスの実現に資する活動を積極的に進めてきました。IGNITEは、工学教育分野における国際貢献・協力活動を行う「国際協力センター」、本学の留学生や外国人研究者などの支援を行う「国際交流センター」、さらに前述のペナン校を中心とした国際的教育活動を行う「国際教育センター」を統括し、本学の国際展開とグローバル人材の育成を一元的に担っています。

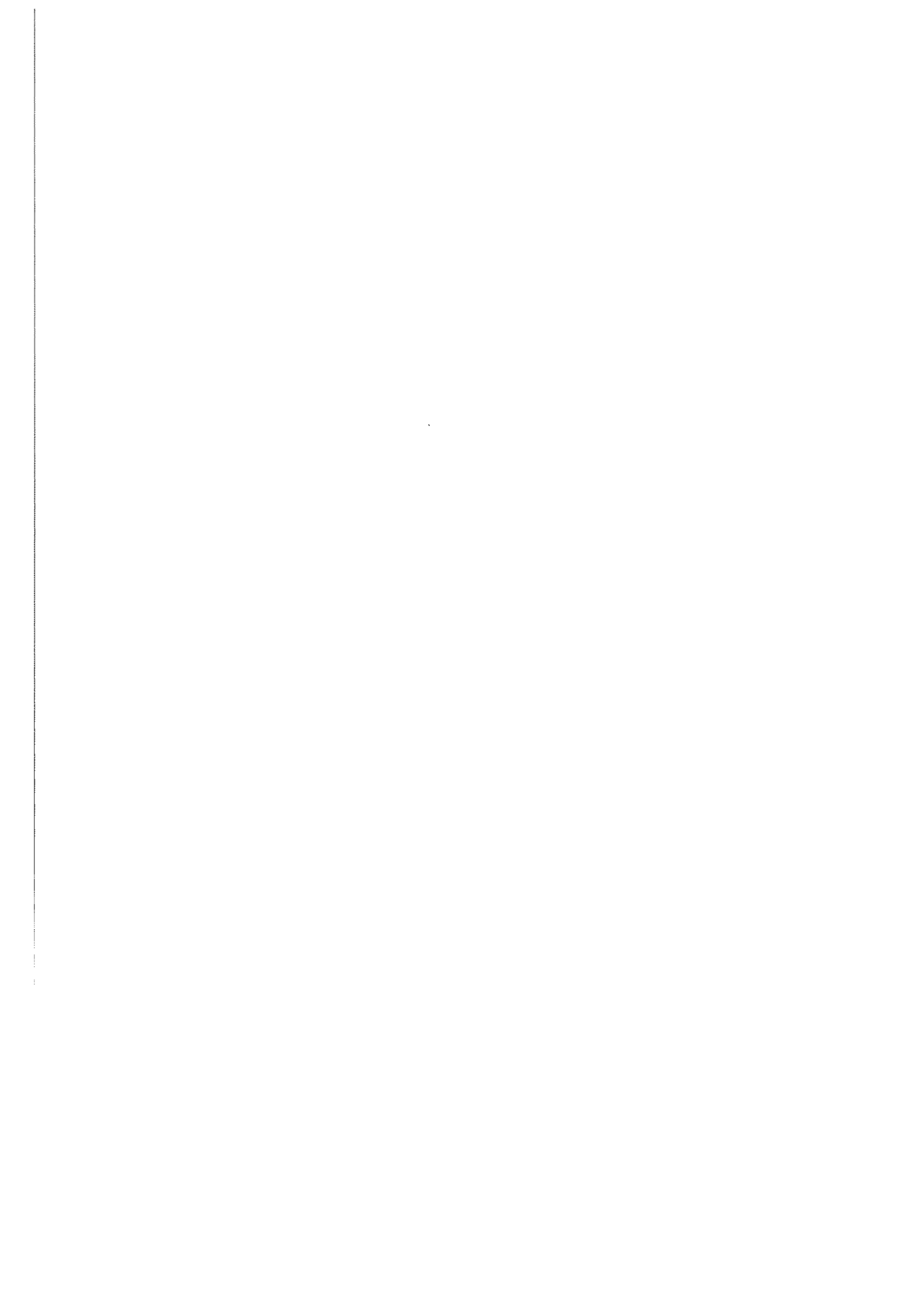
これらの活動を踏まえ、平成26年9月には文部科学省の「スーパーグローバル大学創生支援事業」に採択され、世界の技術科学を先導する高度技術者「グローバル技術科学アーキテクト」を養成する新たな取り組みが開始されています。国際通用性を高めるためのバイリンガル講義の導入や、留学生と日本人学生のシェアハウス型寄宿舎の整備など、まさに「多文化共生」のための事業が目白押しで進んでいます。このスーパーグローバル大学事業の推進もIGNITEの重要なミッションです。igniteには、「着火・発火」という意味があります。IGNITEは本学のみならず、わが国の高等教育におけるグローバルな環境づくりの着火剤になることを目指して、今後とも活動に取り組んで参ります。

.....



**国立大学法人豊橋技術科学大学**  
**グローバル工学教育推進機構 (IGNITE)**  
**国際協力センター (ICCEED)**

International Cooperation Center for Engineering Education Development (ICCEED),  
Institute for Global Network Innovation in Technology Education (IGNITE),  
Toyohashi University of Technology



## センター長 挨拶

豊橋技術科学大学  
グローバル工学教育推進機構  
国際協力センター長  
穂 積 直 裕

今日の社会の急速なグローバル化を背景に、地球規模での資本や情報、製品や労働力の移動が、従来の国と国との関係を越えて、大きな流れで起こっています。この著しい変化は、我が国の産業を牽引する先導的日本人技術者に要求される資質に大きな変革をもたらしています。

その要求に応えるグローバル技術者、すなわち、グローバル社会の多様性を理解し、異なる文化・価値観を持つ人々と共に課題を共有し、社会との接点の中で技術を捉えて課題を分析するとともに、解決策を創造し、判断と意思決定を行い、具体的なもの作りに導く、実践的創造的かつ指導的技術者を育成することが求められています。また、研究活動の面からは、融合研究を軸に世界トップレベルを目指すため、研究者の多様化・多国籍化を進め、発想の多様性を向上させる必要があると考えます。

これらの実現に向けて、例えば外国人留学生を出身国の発展に貢献する人材として教育することはもとより、互惠関係を基調として我が国産業の発展や社会の国際化にも貢献できる人材として活躍してもらうことが重要です。帰国後も関係を継続し、双方が抱える多様な課題について協働して取り組む上では、個人を超えた組織的な繋がりを深めることが不可欠になってきます。国際協力は、そのような教育・研究のグローバル化を進める上で重要な手段の一つです。本学では効果的な事業を形成し、積極的に取り組んでいます。

このような背景の下、平成26年度は、国際交流センター、国際教育センターとともに、関連部局の協力を得て、「豊橋技術科学大学国際戦略」を策定しました。ここでは10年後における本学のあるべき姿として、「多文化共生・グローバルキャンパスを有する大学」を描き、それに向けた研究・教育と国際貢献に関する取り組みを示しています。こちらは本学ホームページからご覧いただけますので、是非一度目を通していただきたいと思います。

上記国際戦略のもと、国際協力センターはその活動の柱として、

1. 国際協力諸事業の企画、獲得、実施、推進
2. 海外の教育研究機関との連携強化及び新たな連携先の開拓
3. 大学交流協定等に係る包括的業務
4. 海外の連携機関に対する高度化支援

をかかげております。その具体的な内容を、平成26年度の活動報告として取りまとめました。この先の新しいミッションの遂行にあたり、引き続き当センターへのご理解とご支援、ご協力をよろしく願い申し上げます。

## 1. 国際協力センターの概要

本学は昭和51年の開学以来、「大学の国際化」を重要なテーマの一つとし、その一環として工学教育・研究の国際協力に尽力してきた。その取り組みが評価され、文部科学省によるわが国各分野における国際教育協力センター設置構想の実現に際し、工学分野については平成13年4月に「工学教育国際協力研究センター（International Cooperation Center for Engineering Education Development: ICCEED）」が本学内に設立された。以来、工学分野・国際協力プロジェクトの開発研究、国際協力人材の育成、オープンフォーラムやセミナーによる課題検討／情報提供を通じた理解促進等、様々な活動を展開してきた。

その後、平成16年4月の大学法人化を経て、平成22年4月、ICCEEDは従来の目的に加えて、「本学の国際的な連携・交流を促進し世界に開かれた大学への展開を推進する」、との新たな目的を併せ持つこととなった。更に、平成25年10月には本学の「国際競争力の強化」と「グローバル人材の育成」を一元的に担う組織として「グローバル工学教育推進機構（IGNITE）」が設立され、ICCEEDは「国際交流センター（CIR）」、「国際教育センター（CIE）」、「マレーシア教育拠点（ペナン校）」とともにIGNITEを構成する学内組織である「国際協力センター（英文名称としてはICCEEDを継承）」へと再編された。

この際、ミッションが再定義され、本学の国際戦略目標（平成27年3月23日に「国際戦略2015」を制定）及び国際貢献の実現のため、国内外の多様なパートナーとも連携し、大きく以下の4つの活動を効果的に進めていくこととなった。

活 動 の 柱	1. 国際協力諸事業の企画、獲得、実施、推進。
	2. 海外の教育研究機関との連携強化及び新たな連携先の開拓。
	3. 大学交流協定等に係る包括的業務。
	4. 海外の連携機関に対する高度化支援。

## 2. 国際協力センターの平成26年度活動内容（全般）

### (1) 国際協力センターを取り巻く事業環境の変化

#### 【ポイント】

- ①1990年以降、活発であった本学の国際協力・貢献活動は、2000年に入り、大学を取り巻く環境・社会状況の変化を受けて質的・量的に変化。教員個人の関心・熱意に基づく参画から、大学の組織的な取り組みへの転換期にあると考えられる。
- ②国際協力・貢献活動の担い手である教員の理解、インセンティブにも変化。自らの教育・研究活動との関わりにおいてメリットを判断し、教育・研究活動の延長上に捉えられることが参画の前提となる。
- ③ICCEEDでは、啓蒙的な活動や協力スキームの紹介等を積極的に行うことにより、教員の理解・関心を促進。事業の成果発現と大学・教員のメリットが同時に成立する取り組みへの転換を念頭に活動。

上記 1. の ICCEED の組織的な変遷は、特に1990年代後半から2000年代初頭に生じた、大学に求められる役割の変化（グローバル化の進展に伴う世界市場の競争環境変化に対応するための「知識創造・蓄積の場」としての大学への期待）、及びわが国高等教育政策の変化（規制緩和、市場原理の導入～国立大学法人化、等）に連動している。この間、大学による「国際協力・貢献」は、「教育」と「研究」に次ぐ第三の使命としての「社会貢献活動」の一側面として認識されるようになってきた。また、政府開発援助（ODA）政策における平成15年8月の改訂版「ODA 大綱」の中でも、国民参加型援助を推進する主要な主体の一つとして大学が位置付けられた。

本学は、1990年以降、インドネシアの高等教育開発計画事業（HEDS プロジェクト）を皮切りに、他大学に先駆けて活発な国際協力・貢献活動を行ってきた。これらの取り組みは、協力対象国・大学・人材（特に教育行政関係者、教員など）との関係強化を促し、そのような人的関係・ネットワークを基に更なる留学生の受け入れ、共同研究の立ち上げに繋がっていった。そして、受け入れた留学生は本学の国際化を牽引する存在となった。国際協力・貢献活動のポジティブなインパクトがあったと言える。当時は、国際協力に強い関心を有する教員グループが存在し、教員の裁量で積極的な貢献が実現出来た側面があった。

一方、その後、大学の国際協力・貢献活動を取り巻く環境は大きく変化している。運営費交付金が段階的に削減される一方、競争的資金を継続的に獲得する必要が生じ、更に、大学・教員の評価も「研究」、「教育」における活動・成果を軸にシステムチックに行われている。教員個人が国際協力への関与を判断することは従前に比して難しい環境・状況となっている。どの（ような）事業に取り組むべきか、どの程度の資源を投入すべきか、といった都度の判断は、大学としての方針・戦略に基づき、経営的・中長期的視点に照らして組織的に行うことが不可欠となっている。

そのような観点からすれば、平成26年度現在、本学の国際協力・貢献活動は、全学的に理解を得た、戦略に基づく最適化された取り組みに進化する途上にある。組織的に十分なメリットを享受出来るような効率的な実施体制の構築には多くの場合、長い時間と多様な調整を要する。一部を除き、学内の多くの教員・職員は、大学の国際協力・貢献活動の必要性と、本学もしくは教員自身へのメリットを十分には認識していないか、もしくは ICCEED による専門的・限定的な活動であり無関係と考えているケースが散見される。

その背景としては、①教員にとって研究テーマが（当該）開発途上国に無いこと（先端研究のフィールドは常に先進国にあるとの認識も含め）、②国際協力・貢献活動に従事することへの評価が確立していないこと（研究・教育活動への評価とは異なる）、③時間的負担への懸念があること（本来業務としての研究・教育活動等への影響、派遣される場合の講義や会議等への影響等も含め）等が挙げられる（但し、実際には、国際協力の事業スキームや活用可能な制度への理解不足が要因になっている面も否定できず、このようなケースでは ICCEED によるタイムリーな説明・広報の不足も課題であると考えられる）。

本来、大学が国際協力事業に取り組む効用としては、①大学自身が社会貢献活動の実践を通じて社会的な役割を果たすことがアピール出来るほか、②開発途上国側のカウンターパート（教育・研究機関）とのネットワーク構築を通じた留学生受入・共同研究の促進、また、③途上国をフィールドとする研究・教育活動へのフィードバック、更に、④学生の参加が可能な場合にはグローバル人材育成の場としての活用等が期待出来る、など様々である。

ICCEEDは、上記の事業環境・学内状況を踏まえて、大学・教員双方にとって魅力的でインセンティブが働き、研究・教育活動とも両立する、もしくはそれらをより促進するような「国際協力・貢献活動(案件)」の形成・獲得・参画を推進し、海外の教育研究機関との連携も強化する等を通じて更に関係者の理解を促進するような、「好循環」への転換を念頭に取り組んでいる。

## (2) 国際協力センターの実施体制

### 【ポイント】

- ①平成26年度は前年度同様の人員体制（一部、交代等あり）。
- ②スーパーグローバル大学創成支援事業の採択を受け、関連業務を担う専門部局が設立。
- ③国際協力・貢献活動の実施に際しては必要に応じ学内ワーキンググループを形成（インドネシア・ポリテクニク高度化支援等）。
- ④重点交流対象国における大学・研究機関との教育・研究交流を促進するため、国毎の学内関係者の組織化を実施（インドネシア部会）。

ICCEEDは平成26年度、昨年度に引き続き、専任教員4名、兼務教員4名、客員教授2名、研究員1名、事務職員2名の体制で事業を実施している（関連事務主管課：国際課）。なお、「スーパーグローバル大学創成支援事業」（文部科学省）の採択（平成26年9月）に伴い、「スーパーグローバル大学創成事業推進本部」及び「同事業推進室」が設置され、ICCEED副センター長が「副本部長」および「推進室長」を兼務。関連業務は同推進室において実施することとなった。

ICCEEDの運営は、「国際戦略本部会議」における戦略、諸問題への対応に関する協議を踏まえ、「グローバル工学教育推進機構委員会（IGNITE委員会）」でその方針（予算、事業計画、事業評価）が審議・承認されるとともに、主幹／関係省庁、関係機関、大学等の外部有識者による「運営協議会」（本会）において、基本方針、その他の事業実施に係る重要事項が審議される。

本学の国際協力・貢献活動の実施に当たっては、ICCEEDの限られた専任教員・スタッフによる実施体制下で効率性・効果性を確保し、事業成果を最大化するため、規模に応じて事業毎のワーキンググループを形成し、各系及び事務部門からの参画も得て、連絡・調整を行う体制を確保することとしている。

重点交流対象国については、順次、国毎の枠組みをIGNITE内に整備し、ICCEEDが事務局的な役割を持ち、関係する教員間の連携促進・情報共有を図っている（平成26年度までにインドネシア部会を立ち上げ済み）。また、大学間交流データベースを構築、試験的な運用を開始した。

\*現在の主な重点交流対象国：インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム、メキシコ、インド、ロシア

### (3) 国際協力センターの事業戦略・活動方針

#### 【ポイント】

- ①平成26年度は前年度同様の人員体制（一部、交代等あり）。本学の行う「国際協力・貢献活動」は、事業規模の適正さ（教員人数、各教員の負荷の最小化を配慮）とインパクト（必要十分な成果発現）を確保しつつ、選択的に実施することが重要。
- ②本学の行う「国際協力・貢献活動」は、事業規模の適正さ（教員人数、各教員の負荷の最小化を配慮）とインパクト（必要十分な成果発現）を確保しつつ、選択的に実施することが重要。
- ③新規事業の獲得・実施に際しては、事業形成の上流段階から積極的に関与することで本学（教員）のメリットを十分に確保し、持続可能な事業とするよう考慮。
- ④重点交流対象国における大学・研究機関との教育・研究交流を促進するため、国毎の学内関係者の組織化を実施（インドネシア部会）。
- ⑤国際協力・貢献活動は ICCEED を学内における一元的な窓口・事務局機能として、各系（研究科・学科）・事務部門との連携により実施。学内での理解促進も考慮。

教員230名規模の工学系単科大学である本学が国際協力・貢献活動を行う上では、教員の研究・教育活動への負荷を最小限にとどめることを前提条件として、協力のインパクトが大きな事業、もしくは本学が継続的に関わっている（関わってきた）事業を発展させるような位置付けとなる活動を選択的に実施していくとの視点が不可欠である。そのため、国際協力機構（JICA）をはじめとする外部機関との連携を強化し、本学としての意思決定にとって必要十分な情報の収集を行うとともに、可能な限り事業の計画・形成段階（上流工程）から検討枠組みに参加することを通じて適切な事業への参画を果たし、ミッションの実現を図ることとしている。

学内においては、国際協力・貢献活動の事務局機能を ICCEED が一元的に担い調整機能を果たすことで学内の最適な事業実施（協力）体制を構築することを念頭に取り組んでいるところである。国際協力事業（案件）としての成果を発現させることはもとより、本学としても国際連携関係強化等の国際戦略上の目的を兼ねて実現するような活動とすることが基本的に不可欠であり、それなくして学内の理解・共感は得られず持続可能な活動とはならないものと認識している。

一方、本学が国際協力・貢献活動を行う必要性や、ICCEED の役割・活動内容について、学内関係者の多くから十分な理解・関心・共感を得られているとは必ずしも言えない状況にある。これまでに国際協力・貢献活動に関わった現職教員は全体の約1割程度に留まっている。このことは、昨今、あらたな事業・案件を立ち上げる際の学内協力体制の構築が必ずしも容易ではないことを物語っている。

●以上の問題認識に基づき、ICCEED では平成26年度、事業毎の実施体制を迅速かつ適切に構築し、学内協力を得られるよう努めるとともに、従来以上に学内広報活動を拡充させることに注力してきた。平成27年度以降も引き続き、本学／教員の理解を（どのような負担が発生すると見込まれるのか、一方で期待されるメリットについても分かりやすく提示するなどにより）促進し、教員が自らの関心・特性に照らして効果的に関与出来るような仕組みを構築していく。併せて、受入研修への関与を通じた関係の構築機会を創出し、ともすれば「片務的」になりがちな事業形態について「互恵的」な協力関係構築の

契機とする。また、学内セミナーの開催に当たっても、従来のようにアドホックなテーマ設定による国際化・国際関係知識の普及を目的とするだけでなく、大学の国際協力・貢献活動の必要性、ICCEED活動の理解促進や、本学の国際戦略の周知等も兼ねて実現出来るような仕立て方として、教員・職員・学生の関心に合致するものとして実施することを重視する。



### 3. 国際協力センターの平成26年度活動内容（個別）

#### 3.1 政府開発援助（ODA）事業の実施（受託）を通じた活動

－ ODA 事業の実施：国際貢献×本学国際戦略目標の実現－

##### (1) 「産学官連携による知的クラスター振興」(JICA 課題別研修)

【継続案件／対象：全世界の主に中所得国対象／内容：研修の実施】

###### 【ポイント】

平成25～平成27年度実施の JICA 課題別研修の 2 年次目。昨年度に引き続き、豊橋の食農クラスターを中心に、本学の産学連携体制・活動、中央～地方政府の政策、当地の産業振興機関（サイエンス・クリエイト）やシンクタンクの活動等を事例として、クラスターアプローチによる産業振興手法について学んだ。また、研修員は本学における学内セミナーにも講師として参加、教員・学生との交流を行った（多文化共生・グローバルキャンパス構想の一環）。

###### 【概要】

- 本学では平成19年度以降、開発途上国の産業振興を人材育成の面から促進するため、学内に蓄積してきた産学官連携に関する知見、及び豊橋・三河地域を中心としたネットワークを活用し、国際協力機構（JICA）の課題別研修を実施している。
- 本スキームは、日本側から開発途上国に研修を提案し、各国より外交ルートを通じて要請を受け実施する。日本の「知」を日本の「場」で学び、同じような課題に直面する国々の間で経験を共有し、新たな「知」を共に形成することを目的としており、年間約300研修、約1万人の研修員が参加している。
- 本学は平成24年度、途上国の産業振興を産学官連携によるクラスター開発アプローチを通じて学べる研修の実施要請を JICA を通じて受けた。平成19年度から平成24年度まで実施した JICA 課題別研修「産学官連携コーディネータ養成」により蓄積した知識、方法論、ネットワークを活用し、平成25年度（昨年度）、あらたに「産学官連携による知的クラスター振興」研修を立ち上げ、実施した。平成26年度は同研修の2年目に当たる（平成25～平成27年度までの3年間実施予定）。

###### 【平成26年度の活動】

地域産業振興をクラスターアプローチにより推進することに取り組んでいる各国からの参加者（行政官、大学関係者）が、わが国において好事例として高く評価されている豊橋市の食農クラスターをはじめとする有意な産業クラスター／産学連携活動を事例として学び、その形成過程、運営体制、活動の実態、大学の技術開発を核とした産学官連携の具体的な取り組みなどについて応用可能なものとして理解を深めた。

本学内においては、全研修員が平成26年度第2回 IGNITE セミナーの講師として参加。教員、学生に対し各国産業の現状・課題を中心に発表した。

###### ■研修目標

様々なクラスターのダイナミクスを理解することで、研修参加者の地域産業クラスター振興の基礎能力が向上し、地域に合ったアプローチを促進することができる。

## ■研修アウトプット

- (1) クラスターについての基本的概念を理解する。
- (2) 日本を中心にクラスター活動の実例を多面的に理解する。
- (3) 地域クラスター推進のための関連専門知識を理解する。
- (4) 討議や演習からクラスター開発及び運営に関する考え方が整理される。

## ■研修内容

(日本・豊橋地域の事例等を提供)

- (1) 地域クラスターの基礎理解
- (2) 地域クラスターの多面的理解
- (3) 地域クラスターの推進のための関連専門知識
- (4) 地域クラスターのダイナミクスづくり

## ■研修期間

平成26年10月1日～平成26年11月1日

## ■研修参加者

11ヶ国14名 (インド、インドネシア、エジプト、カザフスタン、ケニア、中国、マレーシア、ミャンマー、メキシコ、ブラジル、ベトナム)



〈講義の様子〉



〈研究室見学〉



〈企業訪問先での様子〉



〈閉校式〉

## (2-1) ASEAN 工学系高等教育ネットワーク (AUN/SEED-Net) 留学生受入、教員派遣 (JICA 技術協力プロジェクト)

【継続案件／対象：ASEAN (除：シンガポール、ブルネイ) ／内容：留学生・短期派遣学生の受入、教員の派遣】

### 【ポイント】

- ①平成15年度に開始された SEED-Net プロジェクトのフェーズ3。本フェーズでは、「産学連携による地域産業の高度化」をテーマとして、従来の活動を発展的に推進する形で、a. メンバー大学と産業界との連携強化、b. 地域共通課題解決に資する研究の実施、c. メンバー大学の研究・教育能力のさらなる向上、d. 関係大学間のネットワーク強化、を主目的として実施。
- ②本学は現在、本プロジェクトの国内支援大学の一つ（材料工学分野：幹事、コンピュータ情報工学分野：副幹事、機械工学分野：副幹事）として、留学生の受入、現地での指導等を実施。

### 【概要】

- 「アセアン工学系高等教育ネットワーク (AUN/SEED-Net)」は、JICAが平成15年から行っている技術協力プロジェクトで、ASEAN (東南アジア諸国連合) 各国の工学教育をリードする中核大学の教育・研究能力を向上することにより、域内の工学系人材を育成し、産業の発展を図ることを目的としている。
- 平成9年のアジア通貨危機を経て、強い産業構造を実現する上では工学人材を拡充すべきとのわが国のイニシアティブによって形成された協力プロジェクトである。
- 本プロジェクトはこれまで、第1フェーズ (平成15年3月～平成20年3月)、第2フェーズ (平成20年3月～平成25年3月) と2期の協力期間を通じて、(1) ASEAN 域内および日本での高位学位 (修士号・博士号) 取得を通じた、メンバー大学の若手教員の能力強化、(2) 域内に修士・博士レベルの国際プログラムを擁する「工学大学院コンソーシアム」の確立、(3) 域内留学や共同研究の実施等を通じた工学分野のアカデミック・ネットワークの形成、といった成果を挙げてきた。
- 第2フェーズにおいては、ASEAN 後発メンバー国である CLMV 諸国 (カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム) への協力 (教員の上位学位取得支援、大学院の新設・強化等) に重点を置き、各分野ホスト大学の地域中核大学化を進める一方、ネットワーク基盤や SEED-Net の枠組みの持続性を強化し、活動の自立発展性を高めてきた。更に、域内共通課題 (防災、環境対策、代替エネルギー等) に係る共同研究を行うことにより、地域社会への貢献も進めている。
- 平成25年3月よりさらに5年間協力を継続する第3フェーズ (現フェーズ) に入った。ここでは、(1) 継続的な高度技術人材の育成や産学連携の促進を通じた域内産業の高度化支援、(2) 域内で優先される分野課題や地域共通の地球規模課題への対応、(3) アジアにおける科学技術振興のプラットフォーム形成等の協力を進めることが計画されている。合わせて、ASEAN 側メンバー大学を26大学に、本邦支援大学を14大学に増やし、各国トップレベルの大学が連携した高度な研究・教育の更なる強化を通じて地域の発展に貢献することを目標としている。
- 本学は、第1フェーズの開始に先立つ準備段階 (平成13年から2年間) より、当時の ICCEED 教員を中心にプロジェクトの立ち上げに向けて積極的に協力してきた。その結果、プロジェクト支援大学のオリジナルメンバーとして名を連ねている。
- 具体的には、(1) ICCEED 教授 (元副学長、後に客員教授) を JICA 専門家 (プロジェクトチーフアドバイザー) として SEED-Net 事務局 (在バンコク) に派遣、(2) 本学教授が国内支援委員会に委員として参画、(3) 材料工学分野および機械・航空工学分野の分野調整幹事大学として協力計画の調整・実施監理に協力、(4) 個別案件 (JICA 調査団員・短期派遣専門家として域内会議・セミナー等への参加や

集中講義の実施、共同研究支援、JICA 研修員としてメンバー大学の若手教員・大学院生の本学での受け入れ指導等)へ多くの本学教員の参加・協力等を行ってきた。

●特に、メンバー大学若手教員の上位学位取得支援プログラムを通じて、これまでに11名が本学の博士後期課程に留学して博士号を取得したのち、各国の大学等の高等教育機関の教員として活躍している他、平成26年度3月現在、3名が学位取得を目指して在籍中である。

### 【平成26年度の活動】

#### ■教員の海外派遣

延べ4名 (前年度実績：延べ7名)

	所属	期間	用務内容
		派遣国	
1	情報・知能工学系 教授	2014. 10. 6-10. 9	ICT 分野における地域会合への参加
		インドネシア	
2	機械工学系 准教授	2014. 10. 8-10. 11	機械工学分野における地域会合への参加
		ベトナム	
3	機械工学系 教授	2014. 11. 10-11. 13	材料工学分野における地域会合への参加、同会合における基調講演
		マレーシア	
4	機械工学系 教授	2014. 11. 23-11. 28	共同研究関係者への科学的指導 (アドバイス等)、ハノイ科学技術大学学生への講義
		ベトナム	

#### ■外国人留学生の受け入れ

過年度の受入・入学者3名が在籍中 (内2名：博士後期課程、内1名：サンドイッチ博士)。

### (2-2) ASEAN 工学系高等教育ネットワーク (AUN/SEED-Net) 「産学連携手法習得研修」 (JICA 技術協力プロジェクト)

【継続案件/対象：ASEAN (除：シンガポール、ブルネイ) /内容：研修の実施、留学生・短期派遣学生の受入】

#### 【ポイント】

ASEANのうちシンガポール、ブルネイを除く8ヶ国の SEED-Net メンバー大学関係者12名を本学に受け入れ、大学の産学連携活動の活性化及び機能強化を目的とした研修プログラムを実施。今回は平成25年度に続き2回目 (2週間：2/22～3/7)、これにより SEED-Net の全メンバー大学からの受入を実現。本学の研究推進アドミニストレーションセンター (RAC) を中心とした産学連携体制と、教員の産学連携による共同研究活動を事例とし、更には関連企業訪問も行い、大学・企業の両面から多面的に学んだ。

#### 【概要】

●今次フェーズで強化される SEED-Net メンバー大学の域内産業高度化への貢献を支援する方策の一つとして、メンバー大学の産学連携促進担当教員を対象とした「産学連携促進手法研修」を本学で受託実施するもの。本学の産学連携に係る事例や促進体制の紹介や関係する教員や企業関係者等との意見交換等を通じて、メンバー大学と本学の教員、企業関係者間のネットワークを強化し、各大学における産学連携の一層の促進に寄与することが期待されている。

## 【平成26年度の活動】

ICCEEDは、メンバー大学の産学連携を推進する立場にある教員を対象に、本学及び他大学・地域の産学連携事例の紹介と関わる教員や企業関係者等との意見交換を通じて、各メンバー大学における産学連携体制の一層の強化に寄与するための研修を実施。研修を通じて、メンバー大学と本学の教員の関係構築を図り、大学間や進出する日系企業との共同研究の形成や実務訓練などの交流の機会への発展を期待している。

### ■全体目標

アセアン域内で産学連携活動が促進・強化される。

### ■案件目標

産学連携活動を効果的に促進するための手法が所属機関内で共有される。

### ■研修期間

平成27年2月22日～平成27年3月7日

### ■研修参加者

8ヶ国12名（インドネシア、カンボジア、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ラオス）

## (3) 「マレーシア日本国際工学院（MJIT）」（JICA 円借款附帯プロジェクト）

【継続案件／対象：マレーシア／内容：留学生の受入、教員の派遣、共同研究の実施】

### 【ポイント】

平成23年度より本プロジェクトのコンソーシアムメンバーとして参画。学生の短期受入に対応する一方で、小委員会への参加開始が遅れている。平成27年度には電気・電子工学小委員会への参加と具体的な活動を進めていく予定。

### 【概要】

●マハティール前首相の提唱により昭和57年から続けられてきた「東方政策」による人材育成制度を集大成するものとして日本型の工学教育を行う独立の高等教育機関を設立するプロジェクト。平成21年10月及び平成22年4月の鳩山・ナディブ首脳会談を経てマレーシア国より有償資金協力（円借款）の要請を受けるに至り、マレーシア工科大学（UTM）の機構の下に独立性の高い専門機関としてマレーシア日本国際工科院（MJIT）を設置した。

●平成23年9月より学生の受け入れを開始したMJITは平成24年6月1日に開校式を行い、本学からは副学長、ICCEEDセンター長が出席。以降、日本政府外務省主導の下、本邦主要大学が支援大学コンソーシアムを編成して協力計画の実施に当たっている。

●「先進国入りを目指すマレーシア国の更なる産業発展を牽引する高度技術人材を日本型の工学教育手法で実践的・実学的に育成する」とのMJITの構想に対して、本学は、ICCEED設置後10年に亘る国際協力実績と、高等専門学校との連携や大学院までの一貫教育により高度技術人材を輩出してきたシステム・知見を活かして貢献することが期待されており、平成22年度のオブザーバ参加を経て平成23年度から正式に同コンソーシアムに参加している。平成24年度には、MJIT学生の共同指導の一環として、第一期生1名を本学情報・知能工学系において短期受入を行った。

●平成25年度の同会議において、本学からは、精密機械または電気・電子工学小委員会のいずれかに参加する用意があることを表明している。

#### ■本邦支援大学コンソーシアム正式参加メンバー

九州大学、慶応義塾大学、埼玉大学、芝浦工業大学、拓殖大学、東海大学、東京農工大学、名古屋工業大学、長岡技術科学大学、北陸先端科学技術大学院大学、明治大学、立命館大学、立命館アジア太平洋大学、大阪大学、山口大学、近畿大学、東京工科大学、東京電機大学、東京理科大学、岡山理科大学、九州工業大学、金沢大学、豊橋技術科学大学、山形大学、筑波大学（正会員25大学）

#### ■政府関係

外務省、文部科学省、経済産業省、日本商工会議所、JICA（準会員5機関）

#### ■協力対象分野

電気・電子コンピュータ工学、機械精密工学、環境グリーン技術工学、技術経営学

#### 【平成26年度の活動】

平成26年度については、支援大学コンソーシアム会議に ICCEED より参加、プロジェクト全体の進捗確認や日本からの派遣教員候補に関する審議・承認等に関する協議が行われた。

一方、学内における協力体制構築が遅れており、現段階で小委員会への参加が正式に決定していない状況にある。一方、今後は既存の委員会会合への参加を開始し、進捗状況をタイムリーに把握することで、学内調整を進め、具体的なプロジェクト活動に繋げていく必要がある。

#### (4) ハサヌディン大学工学部 研究・連携基盤強化（JICA 技術協力プロジェクト）

【新規案件／対象：インドネシア／内容：留学生の受入、教員の派遣、共同研究の実施】

#### 【ポイント】

インドネシア国立ハサヌディン大学工学部を主体とした産学地域連携機能強化をテーマとした平成26年度開始の新規プロジェクト。本学はフェーズ1に続き国内支援委員会に参加、平成26年12月には現地調査団にも参団。今後、共同研究を念頭に置いた教員交流、工学部内に設置された COT 能力強化のための本邦研修等で協力可能性を検討していく。

#### 【概要】

●本事業はインドネシア南スラウェシ州の国立ハサヌディン大学（UNHAS）工学部を対象として、同学部の整備・拡張と、円借款により整備される同学部 Center of Technology（COT）の機能、研究力、コーディネート能力強化を通じて、工学教育の拡充、研究能力強化・活動活性化を図るもの。本学は平成26年度、プロジェクト形成段階から国内支援委員会に九州大学、愛媛大学と共に参画し活動を開始した。なお、同大学への協力事業としては、同工学部立ち上げ、機能強化をテーマとした協力プロジェクト（フェーズ1）に参画した経緯があり、その際に構築した関係を活性化し、あらたな連携を進める上でも有意義であると判断し、今次プロジェクトに参画を決定した。

●今回は COT を中心として工学部のみならず他学部を含めた全学的な産学地域連携を促進し、東部インドネシアにおける産業基盤を確立することが主な目的であり、共同研究を念頭に置いた教員交流、産学地域連携機能強化のための本邦研修等で具体的な協力が出来る可能性がある。

#### ■協力期間

平成26年8月から平成31年7月まで（計60ヶ月、事業総額約3.2億円）

## ■事業目的

平成19年から実施した円借款事業で整備した産学連携技術センター（COT）を中心として研究と産学地連携の強化を図り、以て UNHAS が東部インドネシア地域における地域産業振興の拠点となる。

## ■投入（日本側）

- ① 長期専門家：チーフアドバイザー・組織運営、アカデミックアドバイザー・産学地連携、業務調整・研究支援計画（35.6MM／年）
- ② 短期専門家：研究促進・産学地連携（4.2MM／年）
- ③ 本邦研修：産学地連携等に関する国別研修
- ④ 現地研究経費／研究用機材関連経費（円借款調達済機材のメンテ・補完機材等）

## 【平成26年度の活動】

### ■国内支援委員選出、委員会参加

本学より ICCEED センター長が委員として第1回国内支援委員会（7月31日開催）に参加。

### ■現地調査への参団（平成26年12月）

ICCEED センター長、同専任教員の計2名が12/7～12/11の5日間、九州大学、愛媛大学関係者とともに現地視察調査団に参団（JICA 予算）。UNHAS、インドネシア政府・南スラウェシ州政府関係者、日本大使館、JICA インドネシア事務所、本学客員教授 Satryo 氏他と協議・意見交換を行い、現在の UNHAS 工学部の教育・研究能力、研究内容の把握、優先度の高い開発課題やインドネシア新政権の政策確認等を行い、団内で課題等を整理した。

### ■プロジェクト活動開始と本学の協力内容

プロジェクト投入計画は策定されているが、詳細な協力内容、特に専門家派遣による研究指導の対象領域については引き続き情報収集が必要な状況。本学の関連分野の特定を急ぎ協力体制の構築に繋げる。

また、産学地域連携をテーマとした本邦研修が計画されており、早期実現のため、本学が実施する SEED-Net 対象の「産学連携手法習得」研修への招聘を検討したが、インドネシア国内手続きが間に合わず、平成26年度については断念した。平成27年度（以降）の研修実施方法については改めて、JICA 人間開発部とも相談の上、方針を策定する必要がある。

## (5) モンゴル工学系高等教育支援（JICA 有償資金協力プロジェクト）

【新規案件／対象：モンゴル／内容：カリキュラムの策定、留学生の受入、共同研究の実現に向けた学内調整】

### 【ポイント】

モンゴルにおける主要工学系高等教育機関である、モンゴル科学技術大学及び国立大学を対象として、工学研究の量・質の拡充を図る平成26年度開始の新規円借款プロジェクト（総事業費81.5億円）。ツィニングプログラムの立ち上げ、実施と、共同研究等を通じてモンゴルの高等教育を拡充し、産業人材の育成を図る。当面、ツィニングプログラムについて、モンゴル側1-2年部分の検証作業等を行う予定。

### 【概要】

●モンゴルの主要2大学（モンゴル科学技術大学、モンゴル国立大学）の工学教育・研究の質・量の拡充を通じ、モンゴル産業界が必要とする工学系人材（特に即戦力となる技術者）を育成することを目的とした円借款プロジェクト。

## ■総事業費

81.50億円（うち円借款対象額：73.35億円）

## ■モンゴル側実施体制

借入機関：経済開発省、事業実施機関：教育・科学省

## ■事業期間

平成26年3月～平成35年5月（9年間）

## ■事業コンポーネント

### A. 学部プログラムの質の向上（ツイニングプログラムの実施）

#### ●事業対象大学 \* 学生数は平成24年3月現在

モンゴル科学技術大学のみ：土木・建築学部（学生3,389人）、機械工学部（同2,039人）

#### ●日本側協力大学（予定）・・・以下の8大学でコンソーシアムを形成

長岡技大（幹事校）、本学、名工大、京都工芸繊維大、北見工大、東工大、名大、九大

#### ●プログラム開始時期

平成27年9月予定（日本側大学編入は平成30年4月予定）

#### ●日本側大学に期待される協力内容

①モンゴル側ツイニングプログラムの開発（現行カリキュラムの改定支援）

②日本側各大学による留学生の受入

#### ●留学生数（予定）

上記2学部より：各40名/年×2学部×4バッチ＝計320名

#### ●実施言語

日本語 \* 受入前にモンゴル国内で十分な日本語教育を実施

### B. 教員の教育・研究内容の強化（共同研究×教員の留学）

#### ●事業対象大学

・モンゴル科学技術大学（Mongolian University of Science and Technology）

・モンゴル国立大学（National University of Mongolia）

#### ●日本側協力大学・・・オープン（コンソーシアム形成なし）

#### ●日本側大学に期待される協力内容

①共同研究の実施

②共同研究関連教員の留学：修士100名、博士60名

③共同研究関連教員の長期・短期派遣（Non Degree プログラム）：長・短期計321回

#### ●共同研究テーマの決定プロセス

モンゴル側大学がテーマ、日本側のパートナー大学（希望）を春・秋の2回/年選定

### C. 即戦力となる産業人材（技術者）の育成

#### ●協力内容

高専4年生への受入を主とした協力コンポーネント。

## 【平成26年度の活動】

### ■学内調整

ICCEEDでは、本プロジェクトへの参画につき学内調整を実施（IGNITE 運営会議、委員会による事業説明・実施了解取付等）。



## ■コンソーシアム関連

立ち上げ準備会合（10月10日）、及び第1回コンソーシアム会合に参加。

## ■現地調査団派遣調整

学内で関連系（機械工学系、建築・都市システム学系）からの調査団参加にかかる調整を実施、結果的には調整つかず不参加。なお、同調査では、モンゴル科学技術大学での教育の現状（特に実験授業や日本語授業）を確認すると同時に、モンゴル側が作成したツイニングプログラム用カリキュラムにつき先方と調整することが目的とされていた。平成27年度4月以降、本学単体での現地調査団派遣について検討する予定。

■コンソーシアム規約・細則の学内承認手続きを進める予定。

## (6) アフガニスタン未来への架け橋・中核人材育成 (PEACE)

(JICA 技術協力プロジェクト)

【継続案件/対象：アフガニスタン/内容：留学生の受入】

### 【ポイント】

アフガニスタンの復興支援の一環として、平成23年～平成27年度の5年間にわが国全体で約500名を博士前期課程・国際コースに留学生として受け入れるプログラム。これまでに平成24年度2名、平成25年度1名、平成26年度1名の計4名を受け入れ。

### 【概要】

●アフガニスタン国の平和復興、民主的な国家建設の努力に対し、わが国は国際社会と協調した支援を行っており、平成21年11月には5年間で最大50億米ドルの支援を行う旨を表明。わが国は主としてインフラ開発と農業農村整備を中心に、アフガニスタン国のオーナーシップを尊重した支援協力を行っているが、長期の内戦の影響で人材不足や脆弱な行政機関の補強が課題となっている。こうした状況を踏まえて、わが国外務大臣は平成22年7月のカブール支援国会合においてこれら分野の施策遂行に必要な行政人材育成のため、5年間で500名程度を本邦大学院修士課程で教育訓練する支援構想を表明した。

●これを受けて、アフガニスタン政府の要請を基に JICA は技術協力プロジェクトとして実施することとなり、平成23年度から平成27年度までの5年間にわたって毎年度100名程度の技術研修員を修士課程留学生として受け入れることとしてアフガニスタン国政府と合意した（プロジェクト期間は最終年度の留学生が卒業する平成31年3月まで）。

●本学は立ち上げ時、ICCEED を中心にプロジェクトの企画準備段階から JICA の求めに応じて協力を行い、支援対象である「インフラ開発」分野での留学生受け入れに応じることとして学内調整を進め、アフガニスタン側から人材育成要望のある専攻分野に対応すべく、建築・都市システム学系を中心に、電気・電子情報工学系、情報・知能工学系、環境・生命工学系など複数の専攻系が全学を挙げて対応することとし、7 研修課題で最大4名の受け入れ枠を用意することとなった。

●なお、平成26年度現在では、一般留学生と同様に国際課（留学生係）が中心となり選考・受入手続きを実施。

## ■協力対象分野（研修課題）

●建築・都市システム学系：都市・交通計画、構造・橋梁・振動工学、土木材料工学、環境工学、鉱山・地質工学・GIS

- 電気・電子情報工学系：電気・電力工学
- 情報・知能工学系：コンピュータ科学
- 環境・生命工学系：環境工学

### 【平成26年度の活動】

第4陣となる平成26年度は、3研修課題で10名の志願者があり、書類審査とTV会議システムを利用した面接審査を経て1研修課題1名を博士前期課程正規生として受け入れることとなった(受入専攻系：建築・都市システム学系、合格者2名のうち1名は入学辞退)

### (7) アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ (ABE イニシアティブ) (JICA 技術協カプロジェクト)

【新規案件/対象：全アフリカ/内容：留学生の受入】

#### 【ポイント】

アフリカ54ヶ国を対象に平成26年度より4年間で約1,000名の留学生を国際プログラム博士前期課程に受け入れるプログラムで、課程修了後、本邦企業においてインターンを行うことを組み入れている点に特徴がある。本学への応募状況は第1バッチ2名(いずれも不採用)、第2バッチ1名(選考中)。

#### 【概要】

##### ■背景、特徴

●アフリカの民間セクターや公的部門における人材育成を支援するための方策の一つとして、第5回アフリカ開発会議(TICAD V)(平成25年6月)において安倍首相により表明されたイニシアティブ。

本邦大学での修士号取得に加え、本邦企業でのインターンシップの機会を研修員に対して提供することで、アフリカにおける産業開発に資する人材の育成及び日本企業との人脈が形成され、日本企業がアフリカにおいて経済活動を進める際の水先案内人として活躍することが期待されている。

ICCEEDでは事業スキームの把握と学内説明を国際課と協力して実施。選考にかかる担当教員との調整に関しても打合せ等を行った。平成26年度現在では、一般留学生と同様に国際課(留学生係)が中心となり選考・受入手続きを実施。

なお、本学は平成25年10月に本イニシアティブへの参画を表明。また、平成26年2月にはICCEEDセミナー(現IGNITEセミナー)を開催、アフリカの実情及びABEイニシアティブの概要紹介を実施した。

##### ■受入時期、人数

平成26年9月から平成29年9月までの受け入れで計1000人

(平成26年度150人、平成27年度350人、平成28年度300人、平成29年度100人他国費留学生等)

##### ■対象国

アフリカ全土54か国(うち初年度はケニア・タンザニア・モザンビーク・南アの4か国)

##### ■人材(分野)

民間人材6割、政府人材3割、大学教員1割(工学、農学、経済・経営学含め、すべての学術分野)

##### ■受入大学

全国58大学114研究科(うち中部地域では本学、名大、名工大、三重大の4大学7研究科)

## ■ ABE イニシアティブの受入要件

①必須科目及び日常の研究指導がすべて英語で行われ、研修員の日本語取得および日本語科目の受講が必須でないこと。

②春入学及び秋入学での受け入れが可能であること（入学時の身分は正規生または研究生／科目等履修生も可とし、後者の期間は半年間とする）。

### 【平成26年度の活動】

第1バッチ（平成26年度秋入学期受入）については2名の応募があり、担当教員への事業趣旨説明及び選考時の調整を実施。結果的に、内1名は研究テーマの不適合、内1名は筆記試験結果により採用出来ず。3月12日現在、第2バッチ1名の選考を実施中。

## (8) インドネシア・ソロク市浄水技術改善事業（JICA 草の根技術協力）

【検討中／対象：インドネシア／内容：豊橋市上下水道局との連携による草の根事業立ち上げに向けた学内調整】

### 【ポイント】

インドネシア・ソロク市（人口約6万人）の浄水上の設備能力向上、技術改善を目的として、豊橋市上下水道局が提案主体として計画中のJICA 草の根技術協力事業（地域活性化特別枠）案件。本学は水改善状況の調査・分析を科学的なアプローチにより担う立場から参画することとなり、共同提案。平成26年度募集に際しては不採択となったが、現在、平成26年度補正予算による事業募集に向けて提案書の改訂版作成中。本学の役割についても基本的なレベルで見直しを行っている。

### 【概要】

●平成25年1月にインドネシア・ソロク市長以下10名による豊橋市上下水道局の視察があり、その際に浄水場のリハビリについての支援要請があった。豊橋市はその後、現地調査を実施し、その結果を踏まえて現地水道施設の運転管理技術の向上により、「飲めない水道水」を「安全な水道水」へと変換が可能であると判断、技術職員の技術伝承も兼ねて支援・協力をを行うことを決定。（一財）自治体国際化協会の事業スキームを活用して平成25年度、豊橋での技術研修とソロクでの水道施設改善指導を開始した。この際、本学・環境・生命工学系教員が技術移転を支援したことを契機として、本・草の根技術協力事業スキームによる継続協力に際し、連携して対応することとなった。

### 【平成26年度の活動】

当初提案書作成に際し、本学関与部分を中心に作成を支援。また、JICAより担当者を招聘し、スキーム及び評価ポイントに関する説明会を設定。再提案に際し、本学の役割の見直しを行い、あらためて学内の協力体制につき調整。

## (9) JICA 中部短期インターシップ

【新規案件／対象：国内／内容：短期インターンへの学部学生選考】

### 【ポイント】

平成26年度より新たにJICA 中部での短期学部学生インターンプログラム（2週間）への参加が決定、学内で募集勧奨した結果、学部3年生1名が参加。

### 【概要】

●従前より、名古屋大学向けに JICA 中部が実施していた同所での短期インターンシップ・プログラム（2 週間、大学夏期休暇中に実施）について、平成26年度第 1 四半期の段階で本学からの参加を求めたところ、三重大学と共に参加可能となった（本学卒 2 名）。内容は主に国際協力事業の実務を経験するもので、英語を活用する機会が多いことに特徴があるプログラムとなっている。

### 【平成26年度の活動】

ICCEEDで募集勸奨を行った結果、最終的に電気・電子情報工学系の学部 3 年生 1 名の参加が決定し、対象学生への事前ブリーフィング、プログラムへの改善提案、終了後の成果ヒアリングなどを実施した。

なお、本プログラムの中で海外からの技術研修員へのインタビューを実施、その際の様子が JICA 中部のホームページ上に掲載されている。

平成27年度については学内広報の方法を改善した上で、より多くの関心ある学生の応募を確保し、配分枠を活用出来るようにする予定である。

## (10) 産学連携によるインドネシア産業人材構想（スキーム未定）

【検討中／対象：インドネシア／内容：産学官連携による日本型ものづくり人材育成のための仕組み作り】

### 【ポイント】

インドネシア部会構成教員（機械工学系）の現地活動を契機として、インドネシアの大学を「場」とした日本型モノづくり人材育成メカニズム構築（教育カリキュラムの策定等）について、民間企業（大手自動車部品メーカー）関係者との間で検討を開始、ICCEED からも教員 2 名が検討当初より参画。現在、構想を具体化すべく政府系産業人材育成関連機関等も巻き込み協議・検討中。プロジェクト化した場合、本学には教育カリキュラムの策定や教員高度化のための支援（留学生としての受入）等が期待されている。

### 【概要】

●多くの日系企業が進出する ASEAN を中心に、高度なモノづくりを実現する各国技術者の育成が急務となっている。技能者レベルの人材については企業内教育や現地教育システムで安定的に供給が可能となってきた一方、高度技術者の育成は企業のみでの努力では限界があるとされており、わが国の政府機関、大学が企業と連携して教育メカニズムを立ち上げる必要性が指摘されている。

●これに対し、インドネシアを対象として、既存の大学内にモノづくり課程を新設することを念頭としたプロジェクト形成にかかる検討を本学（インドネシア部会構成教員、ICCEED）と企業間で平成26年度に開始した。

### 【平成26年度の活動】

現在、タイにおける泰日工業大学等を参考に、プロジェクトのフレームワークを策定中。並行して、インドネシアに展開する日系企業や政府（経済産業省）、政府系機関（HIDA、JICA）等の理解促進と協力体制構築を進めている。

平成27年度にはドナー機関を含めた日尼・産学官連携によりプロジェクト設計を進め、平成28年度事業としての形成・実施を念頭に取り組んでいく予定。平成27年度早々に学内で関係者・部門への説明を行う機会を設定するとともに、本学の協力範囲について合意形成を図る。

## 3.2 本学の独自事業

### － ODA 事業を通じて構築した海外教育機関・研究所との連携事業－

#### (1) インドネシア・スラバヤ電子工学ポリテクニク (EEPIS) 教育高度化支援

【継続案件／対象：インドネシア／内容：教員＝留学生の受入】

##### 【ポイント】

1980～1990年代に政府開発援助 (ODA) によるプロジェクト活動を通じて関係を構築したインドネシア・スラバヤ電子工学ポリテクニク (EEPIS) の教員高度化支援を本学独自事業として実施するもの。同校教員が修士課程の指導を行う上で必須となる博士号取得を支援するもので、インドネシア政府の教員高度化のための奨学金を活用し本学の博士後期課程に受け入れるもの。

##### 【概要】

- 急速な経済成長と産業発展を進めるインドネシアでは、製造業を中心とする産業振興を牽引し支えるとしてポリテクニクの整備が進められてきた。
- スラバヤ電子工学ポリテクニク (EEPIS) は、中堅技術者の養成のため、学術的な専門教育を施す大学と合わせて、より実務的な高等専門教育機関として1980年代から90年代にかけて JICA を中心とするわが国の技術協力や無償資金協力による全面的な支援を受けて設立・発展してきた。
- ロボットコンテストの国際大会では強豪の常連校となるなど学生の専門技術の習得レベルは大学工学部卒業生を凌ぐのではと言われるまでになっており、またインドネシア各地の他ポリテクニクに対しても卒業生を専門教員として供給するまでに教育の質を拡充してきている。
- 一方でインドネシア政府は更なる国家発展のためには、より高度な教育訓練を受けた人材育成が求められるとして、教育機関の質と水準の一層の向上を進めており、高等教育機関教員にはより高位の学位を取得していることが法制度面でも要求されることとなった。
- このため、EEPISにおいても、修士課程を有する大学院を設置するとともに、自身の教員に対して高位学位を取得させる必要に迫られている。
- 本学には、かつて JICA の技術協力に派遣専門家として参画した教員が在籍しているという縁があり、また高等専門学校と連携した高度技術者の育成を特徴とする本学の教育ノウハウを活かした支援を提供できることから、前インドネシア国教育文化大臣より前本学学長に要請がなされ、EEPIS の教育高度化計画に可能な範囲で協力することとして、平成22年度より協力実施に必要な環境の整備を進め、平成23年度より本格的に協力活動を行っている。
- 本学における協力支援分野は、電子工学、電気工学、メカトロニクス工学、マルチメディア工学、通信工学、情報工学コンピュータ工学で、EEPIS 部会を設置し、支援体制を確立している。EEPIS 講師 (修士号保有) の学位の高度化支援しており、3年間での博士号取得のため、事前に本学指導教員とのマッチングを行い、事前研究指導を実施している。

##### 【平成26年度の活動】

平成26年度は3名のEEPIS講師の博士課程への入学への支援を行った。なお、平成24年度はEEPIS修士号保持教員5名、平成25年度は1名を受け入れている。

EEPISに設置された大学院教育高度化及び研究センターとの協働に係る協議 (カリキュラム開発や、共同研究等) を行っている。

### 3.3 実施体制・基盤整備

#### (1) 『国際戦略 2015』策定

前年度以前に検討を開始した「国際戦略」を平成26年度当初より再検討、草案として取り纏めた。「教育」、「研究」、「国際貢献」の三本柱を明記。平成27年3月23日に制定し、公表した。

##### 【概要】

●国際交流・連携を全学的に推進するための「国際戦略」の策定及びそれに基づく事業展開は第二期中期計画に設定されている。前年度までに検討されてきた「国際戦略」案を踏まえて平成26年度中に正式化するため、ICCEEDにおいて草案作りを行った。

##### 【平成26年度の活動】

草案を策定、国際戦略本部会議での検討を経て学内決裁を行った。

#### (2) 海外奨学金制度調査

ASEANのうち、インドネシアからの留学生受入に際し、同国政府奨学金の付与条件として受入大学の大学ランキングにおける順位が200位以内であることが課せられた。これに対し、同国政府奨学金窓口との間で直接協議し、本学の取り扱いを個別に規定して、奨学金の対象大学とする対応を図った。同様の動きがマレーシアでも見られるため、正確な情報把握のため状況調査を実施。平成27年度は他国についても状況把握を行う予定。

##### 【概要】

●グローバル化の進展により、知識・情報・資金・人材の流動性が高まり、高等教育においても、グローバルな競争力を有した人材の育成が必要とされている。その中で、本学は、国際性に富んだ指導的技術者を育成し、世界各国からの留学生が集う「多文化共生・グローバルキャンパス」の実現を目指している。

●国際協力センター（ICCEED）では、本学の国際協力活動の一環を通じてキャンパスのグローバル化を促進するため、各国の海外留学に対する奨学金政策等（主に東南アジア、高等教育機関対象）について、調査している。

●文部科学省によれば、平成26年5月1日現在の留学生数は、184,155人（対前年比16,010人（10.0%）増）であり、留学生数の多い国（地域）は中華人民共和国（94,399人）、ベトナム（26,439人）、韓国（15,777人）である。

●本学には、マレーシア、インドネシア、ベトナム、次いで中国の東南アジア（学生総数の約10%）を中心とした外国人留学生が、多く就学している（平成26年6月現在）。

●現在、ASEAN各国では、ごく一部のエリート層のための高等教育であったものが、経済発展により大衆化され、更なる国の発展のため高等教育における人材育成を政策として打ち出す状況にある。そのような背景から、各国政府では、海外の高等教育機関での留学を推進するための政府奨学金を供与している。

##### 【平成26年度の活動】

本学は、上述のように東南アジアからの留学生を多く受け入れている。しかし、政府奨学金を申請するための要件に変化が見られ、志願者からも問い合わせを受けるようになった。それを受けて、インドネシア、マレーシアに置ける政府奨学金の現状調査を行った。

インドネシアやマレーシアでは、海外高等教育機関への留学を支援する政府奨学金は、国の更なる発展に貢献を期待するため、留学先の大学がQS世界大学ランキングあるいはTimes Higher Education世界大学ランキングで200位以内にランキングされていることを要件の一つとしている。

そのため、両国における奨学金申請のためには、本学が留学対象校として適切であることを証明する入学許可書 (Letter of Acceptance) 2通 (大学と指導教員) の提出が求められるようになっている。

今後、他の東南アジア諸国での政府奨学金についても、調査を実施予定。

### 【インドネシア】

●インドネシア第7代大統領ジョコ・ウィドド氏 (平成26年10月20日就任) の政権下は、LPDP (Indonesia Endowment Fund for Education: Lembaga Pengelola Dana Pendidikan) が海外の高等教育機関への留学のための政府奨学金を教育文化省、財務省、宗教省が各々、運営・管理している。

●LPDPは、インドネシア第6代大統領スシロ・バンバン・ユドヨノ氏の政権下で平成24年1月に設置された。これは、教育文化省高等教育総局 (DIKTI) が供与している奨学金の支払い時期が遅延することが多く、海外での留学生活に支障があった点を改善することを目的としているとの指摘がある。

#### ユドヨノ大統領政権下でのインドネシア高等教育総局 (DIKTI) の奨学金

種別	目的	対象	備考
教員	海外学位取得	インドネシアの大学教員 (ポリテクも含む)	●留学先大学の入学許可証が必要。
教員志願者	海外学位取得	インドネシアの大学で教員として働く意思のある者	●奨学金応募時に、帰国後の就職大学先を明記・大学からの雇用証明書が必要。
サンドイッチ・プログラム	研究/研究能力向上 (3-5ヶ月、1年の場合もあり)・国際会議への参加等	インドネシアの学生	●他大学の交流協定と必要な応募書類の提出。
インドネシア博士課程在学者	海外での研究活動	インドネシアの博士後期課程に所属している者	

### 【マレーシア】

●マレーシア政府は、日本や韓国の経済発展がその労働倫理、学習・勤労意欲、道徳、経営能力等に依るとし、人材育成と経済開発を主軸に置いた「ルック・イースト政策」を推し進めてきた。平成24年には、述べ約1万5000人が日本の大学へ留学或いは日本の産業界で働いた経験を有する。

●マレーシア政府は、平成32年までに先進国入りを目指しており (ビジョン2020政策)、教育分野や経済分野で様々な取り組みを行っている。海外の高等教育機関への留学についても政府奨学金を供与している。インドネシアと同様、留学先大学がQS世界大学ランキングあるいはTimes Higher Education世界大学ランキングで200以内にランキングされていることが奨学金供与の要件としている。

●また、同国は海外への留学を推進するだけでなく、平成32年まで20万人の留学生を受け入れることを目標としており、そのための奨学金も供与している。

マレーシア政府海外留学のための奨学金

	奨学金	管轄	対象
1	Public Service Department (JPA)	人事院 Department of Public Service	高専・学士留学生
2	・ PASCA ・ Scheme for Abroad Study	MARA (MORRD)	学士、修士、博士課程留学生
3	Malaysian Japanese Higher Education Program (MJHEP)/ Japanese Associate Degree Program	マラ教育 財団 (YPM)	主に機械・電気・電子工学分野、 学部生(3年次編入)留学 希望者。

海外よりマレーシアの大学へ留学するための奨学金

1	Malaysia International Scholarship (MIS)	教育省 (KPM)	修士、博士課程、ポストク留学生	工学、化学、農業、漁業等が重点分野。
---	--	-----------	-----------------	--------------------

(3) 大学間交流協定管理（連携活動の促進、交流協定管理）

平成26年度にこれまでに本学が締結した大学間交流協定をデータベース化した。将来的には各教員が直接更新することを想定した構造としている。交流協定書の締結状況管理のみならず、交流状況の可視化を通して交流活性化、交流協定改廃判断に活用する。

【概要】

- 本学では、海外の高等教育機関及び研究機関との交流を通じて、双方の教育研究機能の向上と教職員・学生の人材交流を図るために、67の大学・研究機関との間で交流協定を締結している。

【平成26年度の活動】

国際協力センター（ICCEED）は、効率的な交流協定の運営と管理を行うため、平成26年度に国際交流協定データベースを構築、試行運用を開始した。

【ICCEED教員が主管している交流協定】

■バンドン工科大学（ITB インドネシア）

平成7年12月29日、本学とバンドン工科大学は、両者の間の交流協定を締結した。以来 ICCEED は同大学との交流協定に基づく交流・連携の推進・調整にあたっており、平成11年3月以来学生交流実施細則合意書が交わされており、現在、協定第4期（平成22年12月～平成27年12月）にある。

平成24年9月にITBにおいて、「ITB-TUT Students Collaboration to Solve Community Program」をテーマに大学生国際交流プログラムを協働開催し、両校のツイニングプログラムに関する現状の確認と今後の発展について意見交換を行っている。



#### ■タマサート大学シリントン国際工学院 (SIIT タイ)

平成12年11月、本学と SIIT は交流協定を締結し、併せて、学生交流の推進を図るため学生実施細則を締結した。

以来、ICCEED 第 9 回オープンフォーラム「開発途上国の産業発展と工学教育国際協力」(平成22年11月26日東京)に同大学 Chongrak Polprasert 院長を招聘するなどの交流を図ってきた。

平成24年度に文部科学省の国立大学改革強化推進事業として採択された「三機関(長岡技術科学大学、本学、国立高等専門学校機構)が連携・協力した教育改革」事業によるグローバル教育活動を強化するため、タマサート大学との交流協定の締結についても協議を行い、交流を促進している。

#### ■ベトナム国家大学ハノイ校工科大学 (VNU Hanoi-UET ベトナム)

平成22年 8 月 20 日に本学と VNU は大学間交流協定を締結した。

平成23年度には、ICCEED 設立10周年記念シンポジウム(11月15日豊橋)及び本学開学35周年式典(11月16日豊橋)に BINH 学長を招いて講演を実施するとともに、国際交流に関する顕著な貢献を顕彰して本学から名誉博士号(外国人としては本学初)を授与した。

両校におけるツイニングプログラム、海外実務訓練・インターンシップ学生の相互派遣・受け入れ及び共同プロジェクトの立ち上げ等について意見交換を行っており、今後も交流を図る。

#### (4) 海外事務所運営・管理

インドネシア及び中国に設置した海外事務所の運営・管理を引き続き実施。

##### 【概要】

- 本学は、海外の高等教育機関や研究機関、学生との交流を促進するため海外拠点としてインドネシアと中国に海外事務所を設置している。
- インドネシア事務所は、バンドン工科大学内に平成16年1月開設し、中国瀋陽事務所は、遼寧省瀋陽市東北大学内に平成17年11月開設した。
- インドネシア事務所はその開設以来、バンドン工科大学(ITB)と本学の間各種協力活動の推進および支援活動を実施している。海外事務所には、大学の規程により留学生の確保、留学生同窓会の運営、交流事業の推進、共同研究・研究者交流の支援、プロジェクト調査の支援等の業務が期待されている(平成16年規程第16号海外事務所規程)。
- ICCEEDはインドネシア事務所開設の準備段階から積極的に取り組みを行っており、開設後はICCEEDセンター教授・センター長が同事務所長を務め、各種活動を展開している。

##### 【主な活動】

- 本学に留学希望する学生のための支援、情報等を提供(留学説明会)。
- 学生交流のための国際研修プログラム等に係る打ち合わせ。
- 大学間交流促進のための協議。

#### (5) スーパーグローバル大学創生事業

平成26年5月に構想調書を作成して公募に申請、8月のヒアリングを経て9月に採択が決定した。学内体制を新たに構築し、今後10年間で「多文化共生・グローバルキャンパス」の実現を通じて大学の国際通用性と競争力を高める大学改革の推進を目指している。

## 【概要】

- 本学は、平成26年9月に文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援事業」グローバル化牽引型（タイプB）採択された。
- 『「グローバル技術科学アーキテクト」養成キャンパスの創成』を構想名として掲げ、国際通用性の高い「多文化共生・グローバルキャンパス」を全学的に実現するため、1) 「グローバル技術科学アーキテクト」養成コースを新設し、2) 多様な価値観の学生・教職員が共生するグローバル宿舍を新設し、3) 重層的なグローバル人材循環の強化を行うこととしている。

## ■ 「グローバル技術科学アーキテクト」養成キャンパスの創成の構想

3つの柱	特 徴
1. 「グローバル技術科学アーキテクト」養成コースの新設	英語と日本語の2か国語を併用（英日バイリンガル）した学部・博士前期課程6年一貫教育の「グローバル技術科学アーキテクト養成コース」を、全課程・専攻に設置。本学マレーシア海外教育拠点（ペナン）や国際交流協定大学を戦略的に活用した高質な教育プログラム。
2. 多様な価値観の学生・教職員が共生するグローバル宿舍の新設	日本人と外国人留学生が共生し異文化理解と多様な価値観に対する包容力を涵養する場として、 <u>英語を公用語としたシェアハウス型宿舍（200名規模）</u> をキャンパス内に新たに設置。既存の学生宿舍・国際宿泊施設とも融合して、キャンパス内に800名規模（学生総数の40%）の国際色豊かな「学・住・食」近接型の特区を形成。
3. 重層的なグローバル人材循環の強化	マレーシア海外教育拠点（ペナン）や国際交流協定大学を活用して、学生・教員・事務職員のあらゆる人材層においてグローバル循環を定常化。 <u>学生・教員・職員の言語／異文化コミュニケーション能力を向上するとともに、グローバル教務・学務システムの構築。</u>

## 【平成26年度の活動】

ICCEED 副センター長・高嶋孝明教授が「スーパーグローバル大学創成支援事業」への申請に際し中核的な役割を果たした。なお、推進室設置後は同室において具体的な業務を行っている。採択後、学長直轄の「スーパーグローバル大学創成支援事業推進本部」を設置して副本部長に就任、同本部下に推進室を設置して室長に就任し、全学的な活動推進体制を構築して活動を開始した。

本事業は特定の組織・部局が実施するこれまでの事業とは異なり、大学内全組織・全部局・全学生・教員・職員にわたる国際化の改革事業である。そのため、グローバル工学教育推進機構の3センター（国際協力センター、国際交流センター、国際教育センター）を軸として学内関連組織と密接な連携をとりながら全学的な事業展開を進める。

平成26年度の主要な活動成果の概略は以下のとおり。

- － 「グローバル技術科学アーキテクト養成コース」設置に向けた入試制度・教育制度の策定に着手。フレームワークを策定し、コース設置に伴う募集人員と選抜方法の変更概要の事前公表、また日本語英語バイリンガル講義の一部試行を開始。
- － 外国人と日本人が混住するシェアハウス型グローバル宿舍建設に向けて、資金調達、建設手法等

の検討を進め、アドバイザー業務委託先を決定。平成27年度の業者選定と具体設計に向けて準備を推進。

- ー 英語 e ラーニング教材の増強、英語学習アドバイザーの常駐により、学生・教員・職員全員のグローバルコミュニケーション能力向上の学習支援体制を構築。
- ー 教育プログラムの国際通用生と学生の流動性を高めるために、海外大学とのダブルディグリープログラムの適応学科の拡大協議、新たなプログラムの設置に向けて複数の大学と具体的に開始。
- ー ASEAN 諸国との連携を強化するために、9 カ国 (15校) の協定校・教育機関を訪問し、大学紹介・本事業の説明と優秀な留学生獲得に向けた協力体制の構築を開始。マレーシアの本学ペナン校と高速インターネットを接続、面接・会議・リモート講義などが実施できる環境を整備。

現行の組織・連携体制の下で活動を進めながら、IGNITE の 3 センター及び学内関連部局と協議を重ね、新センターの設置や再編なども視野に入れて、事業の推進に適する組織体制・運営体制を検討していく。

## 4. 国際協力センターの平成27(2015)年度活動計画・方針概要（全般）

### (1) 全体方針（案）

#### 【ポイント】

- ①平成27年度の ICCEED 活動は、平成26年度の事業を基本的に継続し実施する。新規事業については、実施負荷が高くなくインパクトの大きな事業を優先して実施する。また、外部機関との情報交換を密にし、組織的な意思決定に必要な情報をタイムリーに把握出来るようにする。
- ②学内実施体制の強化（各系との連絡調整機能強化、事業毎のワーキング・グループ形成等）、年間事業の平準化（研修、セミナー、オープンフォーラムについては特に第1四半期中に実施時期を確定し計画的な実施とする）を図る。
- ③学内外向けの広報活動を充実させる（学内目標：ICCEED 活動、国際貢献活動の認知度向上、学外目標：本学の国際貢献活動に対する認知度向上）。
- ④受託事業実施における人件費、間接経費の取り扱いについて、学内関係部局との間で早期に基本的な対応方法を協議・決定する（人件費補填の受け取り等）。
- ⑤国際協力機構（JICA）との連携協定の早期締結を目指し必要な調整を行う。

### (2) 個別活動

#### 【ポイント】

- ①平成27年度から新たに開始する事業（もしくは開始が見込まれる事業）について、早急に学内調整を行い、計画的に実施する（日墨戦略的グローバル・パートナーシップに基づくに研修、他）。
- ②オープンフォーラムのテーマ、招待講演者の案を早期に固め、第1四半期中に開催日決定、招待・後援手続き、案内を開始する。
- ③ICCEEDとしての教育活動の在り方について検討し、必要性（ニーズ）が確認されれば平成28年度に向けて講義（授業）実施も視野に入れて必要な準備を行う（ex. 技術者のための国際協力／国際開発論、ボランティア論、産業と地域開発論、等々）。
- ④平成27年度で年限を迎える課題別研修（産学官連携による知的クラスター振興）の後継案件の取り扱い方針を早急に決定し、必要な準備（豊橋地域他の講師候補者との調整等）を行う。

## 5. ICCEED 運営協議会

### 【概要】

グローバル工学教育推進機構長の諮問に応じてセンターの基本方針およびその他事業の実施に係る重要事項を審議するため「豊橋技術科学大学国際協力センター運営協議会」がおかれている。(豊橋技術科学大学センター等規則第3条)。運営協議会は、(1) 機構長及び副機構長 (2) センター長、副センター長及びセンター所属の教員、(3) 文部科学省、大学、高等専門学校及び開発援助機関等からの代表者で学長が任命するもの若干名 (4) 学外の学識経験者のうちから学長が任命するもの若干名の委員で構成される。(国際協力センター運営協議会規定)。

### ■実施内容

第2回豊橋技術科学大学グローバル工学教育推進機構国際協力センター運営協議会では、平成26(2014)年度活動報告/平成27(2015)年度活動計画・方針案について、1. 国際協力センターの概要、2. 国際協力センターの2014年度活動概要(全般)、3. 国際協力センターの2014年度活動内容(個別)、4. 国際協力センターの2015年度活動計画・方針概要(全般)について報告が行われ、意見交換会では、今後の国際協力センターの活動、課題についての質疑応答が行われた。

日時：	平成27年3月12日(木) 運営協議会 10:30～12:30 意見交換会 12:30～14:30
場所：	一橋大学一橋講堂会議室 201
出席者：	敬称略
(学外委員)	山口 茂 文部科学省大臣官房国際課国際協力室 室長補佐 (今里 譲 文部科学省大臣官房国際課長代理)  佐野 景子 国際協力機構人間開発部 次長 (戸田 隆夫 国際協力機構人間開発部長代理)  三上 喜貴 長岡技術科学大学副学長(国際交流担当)  勝平 宏 国立高等専門学校機構事務局部長・国際交流室長 (上月 正博 国立高等専門学校機構理事代理)
(学内委員)	穂積 直裕 豊橋技術科学大学グローバル工学教育推進機構 国際協力センター長・教授 澁谷 晃 豊橋技術科学大学グローバル工学教育推進機構 国際協力センター准教授
(陪席)	余語 豊彦 豊橋技術科学大学グローバル工学教育推進機構 国際協力センター特任助教

## 6. ICCEED スタッフ一覧

氏 名	所 属 等
穂 積 直 裕	ICCEED センター長、教授（電気・電子情報工学系兼務）
高 嶋 孝 明	ICCEED 教授、スーパーグローバル大学推進室長（兼任）
澁 谷 晃	ICCEED 准教授、准教授（国際教育センター兼務）
余 語 豊 彦	ICCEED 特任助教
井 上 隆 信	ICCEED 教授（兼務）、（建築・都市システム学系）
中 内 茂 樹	ICCEED 教授（兼務）、（情報・知能工学系）
井 佐 原 均	ICCEED 教授（兼務）、（情報メディア基盤センター）
関 下 信 正	ICCEED 准教授（兼務）、（機械工学系）
宇 佐 川 毅	ICCEED 客員教授（熊本大学大学院自然科学研究科教授）
Satryo Soemantri	ICCEED 客員教授（バンドン工科大学客員教授）
小 柳 寿	ICCEED 研究員

### <事務担当>

氏 名	所 属 等
中 田 尚 樹	国際課長
丸 山 憲 洋	国際課国際企画係長
城 本 美 乃 里	国際課国際企画係付 ICCEED 事務担当 事務補佐員
浦 本 咲	国際課国際企画係付 ICCEED 事務担当 事務補佐員（平成26年8月～）

国立大学法人豊橋技術科学大学  
グローバル工学教育推進機構 (IGNITE)  
国際交流センター (CIR)

Center for International Relations (CIR) ,  
Institute for Global Network Innovation in Technology Education (IGNITE) ,  
Toyohashi University of Technology

.....



## センター長 挨拶

豊橋技術科学大学  
グローバル工学教育推進機構  
国際交流センター長  
大 門 裕 之

平成26年4月1日より小生がセンター長となり、体制も大きく変わりました。平成26年3月に9年半、本学に務められセンター教員であった田村真奈美英語教員、同じく3月に4年間、本学に務められセンター教員（センター教員としては半年間）であった山本綾英語教員が他大学へ異動されました。また、34年間、本学に務められセンター教員（センター教員およびセンター長として4年間）であった浜島昭二ドイツ語教員も定年で退職されました。平成25年10月から、ユージン・ライアン英語教員、平成26年4月から、吉村弓子日本語教員、蒲原弘継専門教員が着任されました。この様に、スタッフの異動、さらには、様々な事業の採択や社会の動向から新執行部の下、体制が大きく変わりました。これに伴い、まずは、これまでセンターが企画・運営をしてきた事業の確認および見直しを一つ一つ丁寧に行いました。センターが取り纏めている留学生に対する日本語教育についても、これまでの経緯から講義内容、各教員の講義の担当数、教員の必要数等の確認と検討を行いました。センターの事業においては、それぞれの継続性を高めるべく、国際課との綿密な連携の下、役割分担とマニュアルの作成を心掛けました。これまで、多大な作業により前年度までに立ち上げられた事業を定常化させるためです。もちろん、前年度の反省を基に、その都度、改善や工夫を加えてきました。新しい事業に向けて事業の再編も行い、各事業の内容や目的の確認と共に、企画・運営の形を整えた一年となりました。

留学生に対する相談業務をより充実させるべく相談担当教員を増員しました。履修および学業相談を通じ、個別面談をする機会を多く持ちました。大学全体としても相談体制の再構築および新たな方針が示されました。国際交流センターでは、就職活動や研究に関する相談が増えました。

国際交流会館の館長は、国際交流センター長が兼務をすることになっています。入居者および入居に関する問題の際には、国際課との連携により対応をしてきました。入居者に対するオリエンテーションには出席をしておりますが、実際に、会館の運営状況や管理状況に対する認識が低いものでした。よって、新年度に向けて、抜本的な改革を進めることにしました。まずは、入居している学生の会館利用に対する意識改革です。整理整頓された国際交流会館へぜひ足を運んでみてください。

## 1. 教育活動

### (1) セミナー

留学生ワークショップ「海外・日本で活躍する技術者を目指して」

“International Student Workshop – Toward Success as Global Engineers”

日時：平成26年4月18日（金）14:00～16:00

場所：A-301

講演者：Dr. Khoirul Anwar（北陸先端科学技術大学大学院 助教）

講演タイトル：“Learn the Signs: How to Be a Great Scientist”

司会：Ms. Anjani Putri（建築・都市システム学系 博士前期課程）

パネルディスカッション：“Toward Success as Global Engineers”

モデレータ：関下 信正（機械工学系 准教授）

パネリスト：Dr. Khoirul Anwar、蒲原弘継（国際交流センター 特任助教）、Mr. Roy Reyna（建築・都市システム学系 博士後期課程）

主催：在日インドネシア留学生協会（PPI）・豊橋支部

共催：国際交流センター

内容：インドネシア人でありながら北陸先端科学技術大学の助教であり、世界的に情報通信分野（4G技術、情報理論、符号理論）において活躍している Dr. Khoirul Anwar を招き、留学生が異国の研究生生活でどのように成功できるか、どのような努力が必要か、について本学の現役学生も交えて議論した。



在駐パキスタン大使講演会「パキスタンの今、日本との関係」

“Today’s Pakistan – the Relations between Pakistan and Japan”

日時：平成26年9月17日（水）15:30～16:30

場所：A-208

講演者：Mr. Farukh Amil（在駐パキスタン大使館大使）

司会：蒲原 弘継（国際交流センター 特任助教）

主催：国際交流センター、パキスタン大使館

内容：普段、学生が知ることのないパキスタンと日本の関係についてご講演いただいた。



### (2) 集中講座

期 間	内 容	講 師	参加者数
8月18日～8月20日	英会話	Kevin Lim（英語講師）	19
8月25日～8月26日	マレー語 ～言語と文化～	Lim Pang Boey（本学准教授） Tan Wai Kian（本学特任助教） Nor Ezzani binti Shahrulzaman（本学学生） Hoong Jet Wei（本学学生）	26
3月9日～3月11日	中級者向け TOEIC 対策	河合 信江（アルク専任講師）	16

センターでは、毎年1講座12時間～15時間程度の集中講座を3回～4回開催している。講座開始当時の目的は、普段接する機会の少ない外国語に親しんでもらうことであったが、現在は講座のうち一つを、授業で開講している外国語の強化目的で開講している。今年度も毎年開講希望の多い中級 TOEIC 対策講座を開講した。もう二つの講座は英会話とマレー語を開催した。

(3) 日本語研修コース・日本語研修コースⅠ（初級）（2014年度後期より改称）

コース概要：大学院進学を目指す国費大使館推薦の研究留学生を主な対象とし、約15週間の日本語予備教育を行う。

① 4月期日本語研修コース

開講期間等：平成26年度4月期＜第19期＞ 15週間

4月14日プレースメント・オリエンテーション・授業開始・開講式、  
5月30日研修旅行（名古屋港水族館）、8月6日スピーチ発表会、  
8月6日修了式

コーディネーター：村松由起子

修了者 Mbabazi James、Daniel De Elias Vazquez、Leclere Darren John 計3名

時間割

	月 Mon.	火 Tue.	水 Wed.	木 Thu.	金 Fri.
1 8:50-10:20	日本語 (村松)	日本語 (石川)	日本語 (鈴木)	日本語 (石川)	日本語 (坂本)
2 10:30-12:00	日本語 (吉村) 日本語プレゼン テーション (桂田)	漢字 (石川)	日本語 (村松)	日本語 (石川)	日本語 (吉村)

② 10月期日本語研修コースⅠ（初級）

開講期間等：平成26年度10月期＜第20期＞ 15週間

10月10日プレースメント・オリエンテーション・開講式、  
10月14日授業開始、2月27日修了式

コーディネーター：村松由起子

修了者 Tran Thai Ha 計1名

時間割

	月 Mon.	火 Tue.	水 Wed.	木 Thu.	金 Fri.
1 8:50-10:20	日本語 (村松)	日本語 (石川)	日本語 (鈴木)	日本語 (石川)	日本語 (坂本)
2 10:30-12:00	日本語 (吉村)	漢字 (吉村)	日本語 (鈴木)	日本語 (石川)	日本語 (吉村)

(4) 日本語初中級コース・日本語研修コースⅡ（初中級）（2014年度後期より改称）

コース概要：初級を終えた学習者が、中級に向けて日本語能力の向上を図り、専門教育において日本語の使用が可能になるよう基礎的な能力を養う。

① 4月期日本語初中級コース

開講期間等：平成26年度4月期＜第3期＞ 15週間

4月15日授業開始、7月29日授業終了

コーディネーター：村松由起子

受講者 Adrian Ashari、Asri Suciati、Noor Agha Hamdard、Ullah Subhan、  
Meidwinna Vania Michiani、Takuya Niwa、Choi Tong Joon、Bae Chayoung、  
Aritra Yusfiasari Supandi 計9名

時間割

	月 Mon.	火 Tue.	水 Wed.	木 Thu.	金 Fri.
1 9:30-10:15		初中級文法 (村松)	初中級会話 (村松)		
3 13:30-14:15				初中級漢字 (村松)	

②10月期日本語研修コースⅡ（初中級）

開講期間等：平成26年度10月期＜第4期＞ 15週間

10月10日プレースメント、10月14日授業開始、

2月25日授業終了

コーディネーター：村松由起子

受講者 Mbabazi James、Nguyen Chi Linh、Meidwinna Vania Michiani、Takuya Niwa、  
Bae Chayoung、Albadr Lutan Nasution、Oh Sunghun、Fistyan Ikhsan Wibowo、  
Villagran Gutierrez Alejandra、Ullah Subhan、Chiu Chan-Yu、Leclere Darren John 計12名

時間割

	月 Mon.	火 Tue.	水 Wed.	木 Thu.	金 Fri.
1 9:30-10:15		初中級文法 (村松)	初中級会話 (村松)		
3 13:30-14:15				初中級漢字 (村松)	

(5) 日本語補講・Basic Japanese (2014年度後期より改称)

コース概要：日本語能力を有しない留学生、教員、研究者、その家族を対象とし、日本で日常生活を送る上で必要な基礎的な日本語を教える。

①日本語補講

開講期間：平成26年4月～7月

コーディネーター：村松由起子

クラス編成及び受講者数

クラス名	回数	受講者数
漢字 初歩	15	4
会話 初歩	15	4
文法 初歩	15	5

時間割

	月 Mon.	火 Tue.	水 Wed.	木 Thu.	金 Fri.
2 10:30-12:00		漢字初歩 (石川)			会話初歩 (坂本)
4 14:40-16:10			文法初歩 (吉村)		

②Basic Japanese

開講期間：平成26年10月～平成27年2月

コーディネーター：村松由起子

クラス編成及び受講者数

クラス名	回数	受講者数
Basic Kanji	15	8
Basic Grammar	15	12
Basic Conversation	15	14

時間割

	月 Mon.	火 Tue.	水 Wed.	木 Thu.	金 Fri.
2 10:30-12:00		Basic Kanji 吉村			
3 13:00-14:30					Basic Conversation 坂本
4 14:40-16:10			Basic Grammar 吉村		

## 2. 留学生相談・支援

---

### (1) 留学生相談

国際交流センターは、生活指導も含めた留学生への支援を重要な柱として、教員の留学生に対する教育研究指導を側面から援助・サポートしている。留学生の相談窓口として、次のものを用意している。

#### 1. 留学生相談担当教員による相談

留学生相談室では、相談担当教員4名の体制で相談を受け付けている。留学生が生活全般で直面する様々な困難に対応するほか、履修全般に関する相談、就職相談、進学相談など、幅広い相談を受け付けている。

#### 2. 国際課留学生係の相談窓口

ビザ、奨学金、宿舎、その他様々な手続きの書類などに関する相談を受け付けている。

#### 3. 国際交流会館における生活相談

2名のチューターが国際交流会館に居住し、国際交流会館に住む留学生の生活全般について相談を受け付けている。

留学生相談窓口の場所：

IGNITE棟-205	浜島昭二特任教授（生活相談）内線：6958
F棟-408	桂田浩一准教授（専門科目等の相談）内線：6884
B棟-309	リム パンボイ准教授（専門科目、生活相談）内線：6942
G1棟-601	蒲原弘継特任助教（専門科目、生活相談）内線：6923
国際課留学生係	B棟1階 窓口⑨番 内線：6546
国際交流会館	会館チューター（101号室～103号室）

### (2) 履修相談会

国際交流センターでは、平成23年度から学生支援室と共催で履修相談会を開催している。履修相談会では、各系および国際プログラムから選ばれたチューター2～5名が留学生を含む新入生・在学生に対して科目選択のアドバイスを行った。平成26年度は前期・後期のそれぞれ開始直後（前期：4月8日～12日、後期：10月7日～10日）に開催し、前期には111人（うち留学生17人）、後期には61人（うち留学生16人）の相談者が各系のブースを訪れた。



### (3) 学業相談会

学部留学生は日常生活に困らないレベルの日本語能力を有するものの、ネイティブレベルに達しているものは少ない。このため日本語で開講される講義の単位取得に苦労する者が多い。国際交流センターではこうした学部留学生の単位取得のサポートを行うために、平成22年度から学業相談会を実施している。学業相談会では、相談教員が学部留学生の単位取得状況と学業の進捗状況を把握した上で、学業についての適切なアドバイスを行っている。また、単位の取得に困難を伴う留学生に対しては、個々の科目の補習を行うパワーチューターを配置して、単位取得のサポートを行っている。

#### (4) 留学生のための就職支援

留学生のための進路・就職ガイダンスおよび学内企業説明会を下記のとおり実施した。日本のビジネス習慣や就職活動への理解を深めるため、留学生を対象にきめ細かな指導および支援を行っている。

第1回実施日時：10月22日（水）18：00～19：00

内容：進路確認と就職活動の進め方等

第2回実施日時：11月17日（月）18：00～20：00

内容：ASEAN 留学生向けの自己PRワークショップ  
（日本アセアンセンター協力）

第3回実施日時：1月23日（月）18：00～19：30

内容：現在企業に就職している本学OB・OG 留学生  
および内定留学生2名の講演

場所：A2棟201講義室

担当：留学生相談担当教員、国際課留学生係



#### 留学生対象学内就職説明会

実施日時：2月10日（火）14：00～15：30

内容：個人面接、グループ面接対策  
（(株) オリジネーター協力）

場所：IGNITE 棟 105 講義室、106 会議室

担当：留学生相談担当教員、国際課留学生係

#### (5) 留学生のための日本語能力試験等説明会

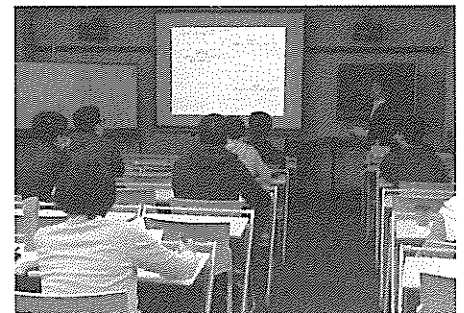
留学生の就職活動支援の一環として、日本語能力試験、ビジネス日本語能力テスト等の日本語資格試験に関する説明会を実施した。

実施日時：4月25日（金）12：15～12：50

場所：IGNITE 棟 105 教室

担当：村松由起子（国際交流センター 日本語担当教員）

参加者数：20名



#### (6) 安全講習会（自動車等の運転）

新入留学生を対象とした安全講習会を2回実施した。

本講習では豊橋警察署から講師をお招きしての講話ののち、留学生相談担当教員からの講習が行われた。

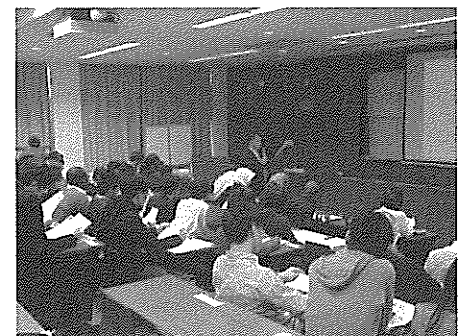
日本の交通ルール、保険、事故にあった場合の対処法などについて説明、特に日本の運転免許証の取得方法、国際運転免許証の注意点について詳細に確認を行う等、渡日間もない留学生にとって、本講習は日本での安全な留学生生活を始める上で重要なものとなっている。

第1回実施日時：4月7日（月）16：30～17：30

第2回実施日時：10月2日（木）16：45～17：05

場所：A2棟101講義室

担当：留学生相談担当教員、国際課留学生係



### 3. 留学生交流

#### (1) センター主催行事一覧

No.	行事名	内容	開催日	参加者数
1	4月期外国人留学生ガイダンス及び懇親会	新入学外国人留学生のためのオリエンテーション及び情報交換会	4月3日	110
2	チューターガイダンス・交通安全講習会	留学生をサポートする学生へのガイダンス / 留学生に日本で車を運転する場合の交通規則や保険、税、法律などをレクチャーする	4月7日	43
3	第13回国際交流デー（リサイクルデー）	留学生のための家具電化製品リサイクル活動	4月7日	100
4	第14回国際交流デー（世界のお茶会）	日本人学生と留学生が母国のお茶、お菓子、ステージパフォーマンスで国際交流	6月13日	600
5	オープンキャンパス	① TOEICに挑戦&映画を楽しもう ②世界の文化に触れてみよう	8月23日	222
6	特別推薦入学者等の海外研修(第2期)	マレーシアに滞在し異なる文化・社会に接しながら学生との交流・ホームステイを通じてグローバルな物の見方考え方を養う	8月31日～9月6日	18
7	10月期外国人留学生ガイダンス・チューターガイダンス・安全講習会・懇親会	新入学外国人留学生のためのオリエンテーション及び留学生に交通規則等日本で生活するうえでのルールをレクチャーする / 留学生をサポートする学生へのガイダンス	10月2日	150
8	第15回国際交流デー（リサイクルデー）	留学生のための家具電化製品リサイクル活動	10月3日	100
9	国際研修プログラム（受入）	文化や思考様式の異なる様々な学生とのグループディスカッションを通じて英語でのコミュニケーション能力を養う	10月16日～11月1日	50
10	第16回国際交流デー（ワールドスポーツデー）	スポーツを通じて日本人学生・教職員と留学生・外国人教員の交流を活発化させ国際交流を推進	11月22日	80
11	トヨタ工場見学ツアー	国際交流クラブ CALL の学生とトヨタ工場見学	3月9日	35
12	外国人留学生意見交換会及び懇談会	留学生支援団体等と意見交換会及び懇談会	3月10日	200
13	外国人留学生学外研修	文化体験・施設見学等（京都）	3月12日～13日	23
14	特別推薦入学者等の海外研修(第3期)	マレーシアに滞在し異なる文化・社会に接しながら学生との交流・ホームステイを通じてグローバルな物の見方考え方を養う	3月15日～23日	21
合計				2,030

#### (2) 国際交流デー

年数回テーマを変えて実施している。今年度実施したテーマは下記のとおり。

##### ○世界のお茶会

国際交流センターでは、学内関係者の積極的な国際交流を行うことを目的として、毎年「国際交流デー」を実施しており、今年度は6月13日（金）にA棟横テント下で「世界のお茶会」と題して実施した。インドネシアのエスプア、トルコのトルコティー、中国のジャスミンティーなど17カ国・地域の留学生がそれぞれ用意した各国のお茶をふるまい、日本人学生と留学生が用意したパフォーマンスを鑑賞しながら学内関係者相互の異文化交流が行われた。



### ○ワールドスポーツデー

目的：スポーツを通じた交流の活性化とキャンパスの国際化

日時：11月22日（土）

場所：体育館、運動場、野球場



### ○リサイクル活動

本学卒業生の不要となった生活品でまだ使うことができるものを学内でリサイクルする「リサイクル活動」を実施

提供（秋）：平成26年10月3日（金） 回収：平成26年9月27日（土）、9月30日（火）

提供（春）：平成27年4月7日（月） 回収：平成27年3月21日（土）～3月22日（日）

場所：国際交流会館

### (3) 留学生学外研修

3月12日（木）、13日（金）に外国人留学生学外研修を実施した。この学外研修は、当該年度に入学した留学生を対象に日本の文化、歴史における名所・旧跡、市街地等の見学、日本文化体験等を通じて日本への理解を深めてもらうことを目的として毎年実施している。

今年度は、19名（日本人チューター2名含む）の参加があり、世界文化遺産である京都市内の建造物の見学、京都市市民防災センター、友禅染伝統文化体験等留学生の意見を取り入れ、国際交流センター教員の企画で実施した。参加者からは日本への理解が深まった、地震のあまりない国から来たので地震の知識を得る貴重な機会となったなどの声が聞かれ、有意義な学外研修となった。





#### (4) 地域交流

##### ① 語学講師等派遣

No.	行事名	派遣先	内容	開催日	参加者数
1	国際交流さくら總會	国際交流さくら	各国の文化について学ぶため留学生2名を講師として派遣	6月15日	2
2	English Summer Camp	新城国際交流協会	新城市の中学生と英語を使って交流 AET講師の補助業務	8月25日	10
3	らくらく英語会話クラブ	蒲郡GIA	蒲郡国際交流協会の英語クラブの講師	8月21日	1
4	時習館高等学校英語研修①②③	時習館高等学校	高校生による英語口頭プレゼンおよびポスタープレゼンへのアドバイス等をする(英国での合同研究発表会に向けて)	10月26日 12月14日 1月31日	42
5	時習館高等学校英語研修「英語村」①②	時習館高等学校	高校2年生全員とグループ単位で英会話交流(時習館高校のSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)事業)	12月10日 12月12日	22
合計					77

##### ② まつり等

No.	行事名	派遣先	内容	開催日	参加者数
1	平成26年度第1回国際交流懇談会	一般社団法人中部経済連合会	国際交流懇談会に登録の各大学から留学生を募り母国をアジア圏とする優秀な人材と企業等の交流を図る	4月9日	3
2	留学生招待花見の会	豊橋地区日中友好協会	花見をしながらの交流	4月6日	10
3	たはらお花見会	たはら国際交流協会	たはら国際交流会の方々とポットラックでお花見	4月6日	15
4	みんなで国際交流 with ポットラック	たはら国際交流協会	手作りの料理やお菓子を持ち寄っての交流	5月25日	3
5	新城英語道場1	新城国際交流協会	本多プラスと設楽原資料館の見学	6月22日	4
6	豊橋祇園祭鑑賞会	豊橋市国際交流協会	豊橋祇園まつりにて、桝敷席から花火大会を鑑賞する	7月19日	54
7	新城英語道場2	新城国際交流協会	東海自然道のハイキング	7月19日	6
8	新城英語道場3	新城国際交流協会	旧家でのお茶会&山登り	8月9日	5
9	第27回 JAPAN TENT -いしかわ-	JAPAN TENT 開催委員会事務局	留学生を石川県に招待し、伝統文化を体験しながら国際交流を深める。ホストファミリー宅にも滞在。	8月20日~26日	4
10	豊川国際交流会	豊川国際交流協会	お月見交流イベント	9月15日	1
11	豊橋国際交流協会25周年記念行事	豊橋市国際交流協会	豊橋国際交流協会設立25周年記念式典と喜多郎氏コンサート	9月18日	31
12	新城英語道場4	新城市国際交流協会	新城中高生と巴湖にてカヌー体験	9月14日	9
13	豊橋まつり	豊橋市国際交流協会	豊橋まつりの総踊りに参加	10月18日	16
14	ベトナム留学生との交流会	新城国際交流さくら	ベトナム料理を通じての交流	11月16日	4
15	新城国際交流&国際交流さくらクリスマス会	新城国際交流さくら	カンボジア学生と家族を招き交流	12月14日	3
16	ライオンズクラブ懇談会	ライオンズクラブ豊橋	留学生による自国の紹介を交えた交流会	1月19日	3
17	節分交流会	豊川国際交流協会	節分にまつわるイベントで交流	2月1日	1
18	世界のお茶と音楽のつどい	新城市国際交流協会 国際交流さくら	新城市民を対象に音楽とお茶を通じ交流	2月15日	10
合計					182

##### ③ ホーム・ビジット等

No.	行事名	派遣先	内容	開催日	参加者数
1	ヒッポファミリークラブ1泊ホームステイ	ヒッポファミリークラブ	日本の家庭に一泊ホームステイ	6月・11月	3
2	留学生との交流会(佐久島会)	蒲郡GIA会員	蒲郡GIA会員別荘での交流会 バーベキュー、釣り、散策など	9月・11月・1月	6
合計					9

## 4. 国際研修

他国の学生やそこで暮らす人びととの交流を通じて、異なる文化や考え方、価値観を知ること、自らを見つめなおし、国際社会の一員としての視点を新たにするのが、グローバル化の進む社会を生き抜くために肝要である。本学では、こうした機会を広く学生に提供すべく国際研修プログラム（派遣・受入）を継続的に実施してきた。本年度は国際交流センターが新たにマレーシアのペナンにおいて第2期と第3期の特別推薦入学者等の海外研修（派遣）を、国際教育センターおよび交流協定校のマレーシア科学大学の協力を得て実施した。また昨年度に実施されていた国際研修プログラム（受入）は日本・アジア青少年サイエンス交流計画さくらサイエンスプランの助成を得ることができ、本学過去最大規模の6大学23名の学生を受け入れた。

### (1) 特別推薦入学者等の海外研修（派遣）（本学ペナン校・マレーシア科学大学）

本研修では、ペナン校でのマレーシア科学大学学生とのワークショップをはじめ、マレーシア科学大学（メインキャンパスおよび工学部キャンパス）での研究室等の見学、日系企業（Panasonic Automotive System 社）と海外企業（第2期：National Instruments 社、第3期：Mini-circuit 社）の見学、ジョージタウン（世界遺産）の見学、ホームステイ（第2期1泊、第3期2泊）など短期間で充実した内容となった。

訪問・研修先：ペナン校、ジョージタウン、マレーシア科学大学メインキャンパスおよび工学部キャンパス、ペナン近郊のホストファミリー宅

#### （第2期）

参加学生：平成25年度特別推薦入学者学部4年生14名

期間：平成26年8月31日～9月6日（7日間）

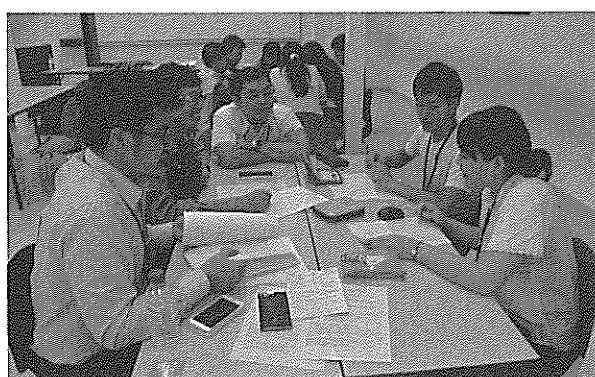
引率教職員：大門裕之、蒲原弘継、福村静、萩原孝明

#### （第3期）

参加学生：平成26年度特別推薦入学者および前期卓越した技術科学者養成プログラム選抜者  
学部3年生計18名

期間：平成27年3月15日～3月23日（9日間）

引率教職員：ライアン ユージン、蒲原弘継、萩原孝明



本学ペナン校で環境問題について議論する  
本学とマレーシア科学大学の学生たち（第2期）



Mini-circuit 社を訪問し、日系企業  
との違いを実感した本学学生（第3期）

(2) 国際研修プログラム（受入）（バンドン工科大学、タドラコ大学、マレーシア工科大学、マレーシア科学大学、ホーチミン市工科大学、中国東北大学）

趣旨：工学を学んでいる優秀なアジアの大学生を協定大学から招へいし、本学の特徴である異分野融合による価値創造型工学研究の最先端の施設を紹介するとともに、本学学生とのディスカッション・研究室体験を通して、異分野・異文化同士の交流を深め、今後アジアをリードするイノベーション人材の育成に貢献する。

参加大学：マレーシア科学大学（4名）、マレーシア工科大学（4名）、インドネシア・バンドン工科大学（3名）、インドネシア・タドラコ大学（4名）、ベトナム・ホーチミン市工科大学（4名）、中国東北大学（4名）

期間：8月31日～9月6日（7日間）

内容：1) エレクトロニクス先端融合研究所、人間・ロボット共生リサーチセンター等、本学の先端研究施設の見学、2) 日本滞在中に必要な簡単な日本語会話の講義、3) 各受入学生の専攻に分かれての研究室訪問、4) 本学学生との混成グループでのディスカッション、5) 本学の産学官連携事業であるバイオマスパークの見学、6) 学外施設見学として、トヨタ産業技術記念館の見学、7) 豊橋市国際交流協会の協力による市内文化施設（三ノ丸会館）での日本伝統文化体験



茶道体験



生け花体験



グループディスカッション



発表会

国籍や専攻の異なる学生がグループをつくり、Disaster Prevention、Future City、Industrial Development and Environmental Conservation、Technology for Human Health、Campus Lifeといったテーマを自由に議論した。発表会では非常にユニークな発表が多く、学生からも活発な質疑が行われた。

## 5. 資料

### 在学留学生情報

#### (1) 外国人留学生受入状況

区 分	在籍身分状況											合 計				
	正規生						非正規生					国費	私費		合計	
	学部			修士			博士			研究生等			政府	自費		
	国費	私費		国費	私費		国費	私費		国費	私費					
	政府	自費	国費	政府	自費	国費	政府	自費	国費	政府	自費		政府	自費		
◆アジア◆																
1 インド						1								1	1	
2 インドネシア			3	3		6		3		15	1		7	24	31	
3 ベトナム			10	1		12				3			1	25	26	
4 カンボジア						1				1				2	2	
5 スリランカ			1			1								2	2	
6 タイ								1					1		1	
7 大韓民国										2		3		5	5	
8 中華人民共和国			3	2		3				1			2	7	9	
9 ネパール												1		1	1	
10 パキスタン						1								1	1	
11 バングラデシュ				1	3				1	1			4	2	6	
12 マレーシア		34				16				8		1	34	25	59	
13 モンゴル			2			3								5	5	
14 ラオス	1		1			3							1	4	5	
◆中南米◆																
15 ブラジル												1		1	1	
16 ペルー								1					1		1	
17 メキシコ				1								1	1	1	2	
◆ヨーロッパ◆																
18 ウズベキスタン									1					1	1	
19 ボスニア・ヘルツェゴビナ				1									1		1	
◆中東◆																
20 パレスチナ									1					1	1	
21 アフガニスタン						5								5	5	
22 トルコ						1								1	1	
◆アフリカ◆																
23 エジプト										1		1	1	1	2	
24 ウガンダ			1							1			1	1	2	
25 ギニア				1									1		1	
26 アルジェリア									1					1	1	
27 タンザニア				1		1							1	1	2	
28 チュニジア								1					1		1	
小 計	1	34	22	13		54	7		34	3		8	24	34	118	176
合 計	57			67			41			11			176			

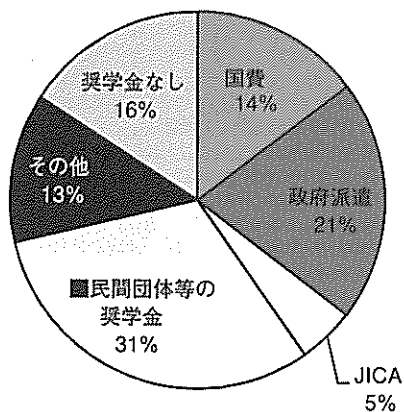
H26.5.1 現在

(2) 外国人留学生宿舍状況

区 分	宿舎状況														合 計				
	大学宿舎						大学宿舎以外								国費		私費	合計	
	国際交流会館		学生宿舎		国際棟		公営住宅		民間アパート		社員寮		国費	私費	合計				
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費							
	政府	自費	政府	自費	政府	自費	政府	自費	政府	自費	政府	自費	政府	自費					
<b>◆アジア◆</b>																			
1 インド										1					1				
2 インドネシア	2		3		1				8	5	12				7	24	31		
3 ベトナム			4		5			13		1	3				1	25	26		
4 カンボジア								1			1					2	2		
5 スリランカ					1			1							2	2	2		
6 タイ										1					1		1		
7 大韓民国			1								4					5	5		
8 中華人民共和国					1			2			4				2	7	9		
9 ネパール											1					1	1		
10 パキスタン								1								1	1		
11 バングラデシュ	1				1					3	1				4	2	6		
12 マレーシア		3	5					2			13				34	25	59		
13 モンゴル					1						4					5	5		
14 ラオス					1			2							1	3	4		
<b>◆中南米◆</b>																			
15 ブラジル			1													1	1		
16 ベルギー	1														1		1		
17 メキシコ			1							1					1	1	2		
<b>◆ヨーロッパ◆</b>																			
18 ウズベキスタン											1					1	1		
19 ボスニア・ヘルツェゴビナ										1					1		1		
<b>◆中東◆</b>																			
20 パレスチナ								1								1	1		
21 アフガニスタン			1							1			3			5	5		
22 トルコ			1													1	1		
<b>◆アフリカ◆</b>																			
23 エジプト	1										1				1	1	2		
24 ウガンダ	1				1										1	1	2		
25 ギニア											1				1		1		
26 アルジェリア			1													1	1		
27 タンザニア								1		1					1	1	2		
28 チュニジア										1					1		1		
小 計	6	3	18					23	1	15	17	31	49			24	34	117	175
合 計	27			12			23			16			97			175			

H26. 5. 1 現在（1名については休学につき帰国中）

(3) 奨学金受給状況（H27. 1. 1 現在）



■民間団体等の奨学金の内訳

日本学生支援機構私費外国人留学生学習奨励費	8
ロータリー米山記念奨学会	7
名鉄国際育英会	3
NGK留学生基金	5
愛知のものづくりを支える留学生奨学金	6
にっとくアジア留学生奨学金	2
ドコモ留学生奨学金	2
マブチ国際育英財団	1
日揮・実吉奨学会	2
市原国際奨学財団	2
ヒロセ国際奨学財団	2
オーエスジー外国人留学生奨学金	2
天野工業技術研究所	1
豊田通商留学生奨学金	2
横山国際奨学財団	3
トヨタコミュニケーションシステム奨学金	2
大幸財団	1
合計	51

# 国際交流センター状況

## (1) CALL 教室および自習室利用状況

CALL 教室の授業外開放（4月～8月、10月～2月の平日：9時から19時開放）

### CALLラボ教室 利用者数（自習及び一部授業での利用含む）

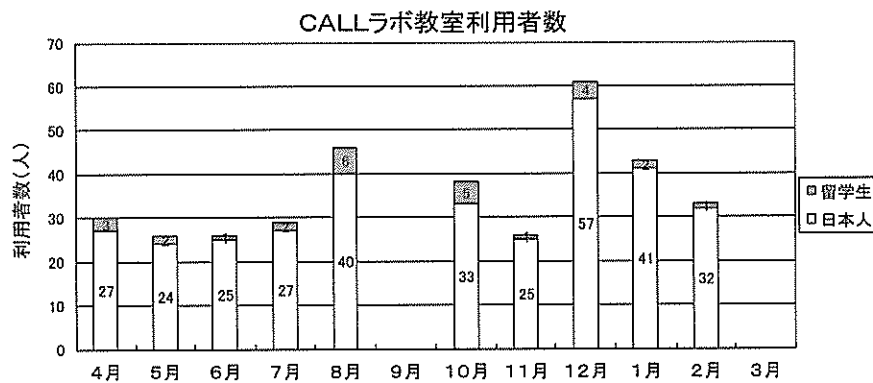
利用月	利用者数(人)	
	日本人	留学生
4月	27	3
5月	24	2
6月	25	1
7月	27	2
8月	40	6
9月		
10月	33	5
11月	25	1
12月	57	4
1月	41	2
2月	32	1
3月		

	利用者数(人)		
	日本人	留学生	合計
4月～3月	331	27	358
月平均	33	3	36
1日平均	1.7	0.1	2

※出入管理システムの入退室記録を基に算出した。

※8月は8日まで開室、9、3月は閉室。

23年度にデジタル式LLシステムへの更新、24度末にパソコン全台およびサーバを更新し、安定した動作環境にある。



「自習」利用者数  
(過去3年)  
24年度 395名  
25年度 347名  
26年度 358名

### CALLラボ教室 授業での利用状況

#### 前期

科目	教員名	コマ数	学生数	延べ人数	授業回数
英語 I Ab	笹尾	1	34	510	15
英語 III B	笹尾	1	34	102	3
英語 I Ac	笹尾	1	26	390	15
基礎英語	加藤(三)	1	25	25	1
日本語研修コース	桂田	1	5	25	5
英語 VBh	秋元	1	46	690	15
言語と文化 II	笹尾	1	20	300	15
合計		7	190	2042	69

#### 後期

科目	教員名	コマ数	学生数	延べ人数	授業回数
英語 II Aa	レヴィン	1	38	570	15
英語 II Ac	笹尾	1	25	375	15
日本の社会 II B	村松	1	2	30	15
工学基礎日本語	村松	1	6	90	15
英語 IV B	笹尾	1	35	210	6
言語と文化 IV (水)	笹尾	1	9	18	2
言語と文化 IV (金)	笹尾	1	11	33	3
英語 VI Bh	秋元	1	34	510	15
合計		8	160	1836	86

「授業」利用者数  
(過去3年)  
24年度 3,211名  
25年度 4,438名  
26年度 3,878名



総延べ人数	総実数
3878	350

自習室の利用時間（平日の午前9時から午後10時まで）

自習室利用者数

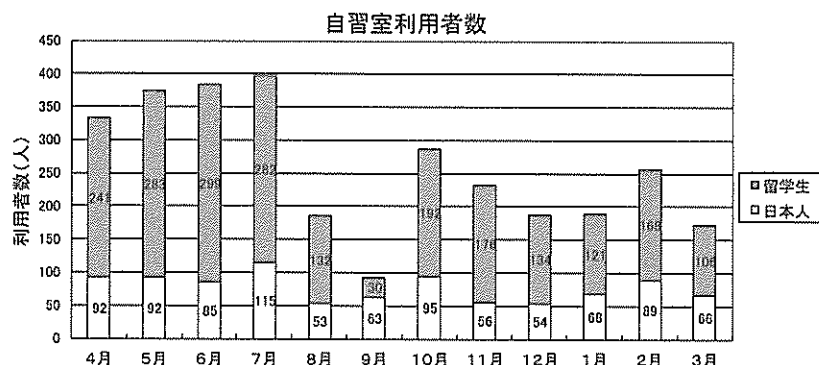
利用月	利用者数(人)	
	日本人	留学生
4月	92	241
5月	92	283
6月	85	299
7月	115	282
8月	53	132
9月	63	30
10月	95	192
11月	56	176
12月	54	134
1月	68	121
2月	89	168
3月	66	106

	利用者数(人)		
	日本人	留学生	
年間合計	928	2,164	3,092
月平均	77	180	
1日平均	3.9	9.0	

※出入管理システムの入退室記録を基に算出した。

今年度末に一部視聴覚機器およびブースの更新を行った。また学習用スペースを新たに設けた。更新により、室内の雰囲気も明るくなった。昨年度と比較すると、日本人学生、留学生の利用者ともに増加した。

3年間の利用者数  
 24年度 3,018名  
 25年度 2,770名  
 26年度 3,092名



(2) 平成26年度に導入した主な設備及び教材

<設備>

- AVブース 1式×8ブース
- 学習用ブース 1式×4ブース

<機器>

- 液晶モニター TV SHARP AQUOS LC-19K20 8台
- Blu-ray/DVDプレーヤー SONY BDP-S1200 8台
- カセットデッキ TEAC W-890R MK II 1台

<教材>

オンライン教材

- NetAcademy2 スーパースタンダードコース
- NetAcademy2 TOEIC®テスト2000コース

DVD

- 英語、その他外国語（映画）
  - 「アナと雪の女王」「アメリカン・ハッスル」
  - 「ウォルト・ディズニーの約束」
  - 「鑑定士と顔のない依頼人」「KOKOWÄÄH」
  - 「大統領の執事の涙」「タイピスト！」
  - 「Das Schloss im Himmel」「なんちゃって家族」
  - 「はじまりは5つ星ホテルから」

\*教材は全て自習室に配架してあります。

「バックコーラスの歌姫たち」「ヒッチコック」  
 「マリーゴールド・ホテルで会いましょう」

- 日本語（映画）
  - 「永遠の0」「風立ちぬ」「そして父になる」
  - 「小さいうち」

テキスト

CD

●英語教材

- 英検1級総合対策教本
- 英検準1級総合対策教本
- 英検2級総合対策教本
- 英検準2級総合対策教本
- 英検1級過去6回全問題集
- 英検準1級過去6回全問題集
- 英検2級過去6回全問題集
- 英検準2級過去6回全問題集



(3) 行事一覧

月	日付	行事
4月	3日(木)	新入留学生ガイダンス・懇談会(前期)
	7日(月)	留学生のための安全講習会、チューターガイダンス、国際交流会館ガイダンス
	7日(月)	第13回国際交流デー～リサイクルデー～
	7日(月)	中国留学生招待交流会 日中友好協会(学外招待)
	8日(火)	第1回 CIR スタッフミーティング
	8日(火)～14日(月)	前期履修相談会(学生支援室と共催)
	9日(水)	国際交流懇談会(学外招待)、中部経済連合会(学外招待)
	14日(月)	前期日本語研修コース(初級)プレイズメントテスト、授業開始、開講式
	15日(火)	前期日本語中級コース、前期日本語補講授業開始、NGK スカラシップ奨学金授与式
	18日(金)	在インドネシア研究者を迎えての国際ワークショップ
5月	22日(火)	第1回 IGNITE 運営会議
	23日(水)	会社説明会 東レ(株)・(株) MARUA
	24日(木)	日本ガイシスカラシップ授与式
	25日(金)	日本語能力試験等説明会
	13日(火)	第2回 CIR スタッフミーティング
	13日(火)～14日(水)	第1回留学生のための学業相談会
	27日(火)	第2回 IGNITE 運営会議
	30日(金)	前期日本語研修コース 研修旅行
	9日(月)～10日(火)	第2回留学生のための学業相談会
	10日(火)	第3回 CIR スタッフミーティング
6月	13日(金)	第13回国際交流デー～(世界のお茶会)～
	22日(日)	MJIEP 説明会(マレーシア)
	22日(日)	新城英語道場 新城国際交流協会(学外招待)
	24日(火)	第3回 IGNITE 運営会議
	25日(水)	会社説明会 オーエスジー(株)
	4日(金)	第4回 CIR スタッフミーティング
	7日(月)～8日(火)	第3回留学生のための学業相談会
	14日(月)	留学生対象学内就職説明会(国際交流プログラム向け)
	19日(土)	紙園花火 豊橋市国際交流協会(学外招待)、新城英語道場 新城国際交流協会(学外招待)
	22日(火)	第4回 IGNITE 運営会議
8月	5日(火)	第5回 CIR スタッフミーティング
	6日(水)	日本語研修コース(前期入学) 修了発表会、修了式
	9日(土)	新城英語道場 新城国際交流協会(学外招待)
	18日(月)～20日(水)	集中講座【英会話】
	23日(土)	オープンキャンパス
	25日(月)～26日(火)	集中講座【マレー語】
	8月31日(日)～9月6日(土)	特別推薦入学者等の海外研修(派遣:マレーシア USM)
	9日(火)	第6回 CIR スタッフミーティング
	14日(日)	新城英語道場 新城国際交流協会(学外招待)
	17日(水)	駐日パキスタン大使講演会
9月	18日(木)	豊橋市国際交流協会 設立25周年記念行事(学外招待)
	30日(火)	第5回 IGNITE 運営会議
	2日(木)	新入留学生ガイダンス、チューターガイダンス(後期)、留学生のための安全講習会
	3日(金)	第14回国際交流デー～リサイクルデー～、国際交流会館ガイダンス
	4日(土)	中国留学生招待交流会 日中友好協会(学外招待)
	6日(月)	国際交流会館ガイダンス
	7日(火)	第7回 CIR スタッフミーティング
	8日(水)～10日(金)	後期履修相談会(学生支援室と共催)
	10日(金)	後期日本語研修コースⅠ(初級)、研修コースⅡ(初中級)プレイズメントテスト
	14日(火)	後期日本語研修コースⅠ(初級)、研修コースⅡ(初中級)、Basic Japanese 授業開始
10月	16日(木)	国際研修プログラム(受入)参加学生対象 事前研修
	18日(土)	豊橋まつり「総おどり」豊橋市国際交流協会(学外招待)
	22日(水)	第1回留学生のための進路・就職ガイダンス～留学生のための進路・就職アドバイス～
	26日(日)～11月1日(土)	国際研修プログラム(受入:インドネシア ITB、クドラコ、マレーシア USM、UTM、ベトナム HCMUT、中国 東北)
	28日(火)	第6回 IGNITE 運営会議
	4日(火)	第8回 CIR スタッフミーティング
	6日(木)～7日(金)	第4回留学生のための学業相談会
	17日(月)	第2回留学生のための進路・就職ガイダンス～ASEANからの留学生向けガイダンス～
	22日(土)	第15回国際交流デー～ワールドスポーツデー～
	25日(火)	第7回 IGNITE 運営会議
12月	2日(火)	第9回 CIR スタッフミーティング
	9日(火)～10日(水)	第5回留学生のための学業相談会
	6日(火)	第8回 IGNITE 運営会議
	13日(火)	第10回 CIR スタッフミーティング
	23日(金)	第3回留学生のための進路・就職ガイダンス～先輩・卒業生からの進路・就職アドバイス～
	27日(火)	第9回 IGNITE 運営会議
	3日(火)	第11回 CIR スタッフミーティング
	4日(水)～5日(木)	第6回留学生のための学業相談会
	10日(火)	留学生対象学内就職説明会
	23日(月)	第10回 IGNITE 運営会議
3月	24日(火)	特別推薦入学者等の海外研修事前説明会
	9日(月)～11日(水)	集中講座(中級 TOEIC 対策)
	10日(火)	第12回 CIR スタッフミーティング、留学生意見交換会・留学生懇談会
	12日(木)～13日(金)	留学生学外研修(1泊2日)
	15日(日)～23日(月)	特別推薦入学者等の海外研修(派遣:マレーシア USM)
	24日(火)	第11回 IGNITE 運営会議

その他の活動: 留学生相談、同窓会、IGNITE 活動報告書発行



#### (4) スタッフ出張報告一覧

日程	用務地	用務先	出張者
4月9日(水)	名古屋市	JICA中部国際センター	大門 裕之
4月22日(火)	東京都千代田区	文部科学省	桂田 浩一
4月24日(木)	名古屋市瑞穂区	日本ガイシ株式会社	大門 裕之
5月30日(金)	名古屋市	名古屋港水族館	村松 由起子
6月20日(金)～23日(月)	マレーシア	MJHEP キャンパス・クラリアントジャパン(株)	大門 裕之
8月31日(日)～9月6日(土)	マレーシア	マレーシア海外拠点及びマレーシア科学大学他	大門 裕之 蒲原 弘継
9月6日(土)～22日(月)	マレーシア	マレーシア科学大学、ブラウバンディン、ペナン校	浜島 昭二
10月7日(火)～10日(金)	マレーシア	ペナン校、マレーシア科学大学	浜島 昭二
10月13日(月)～17日(金)	マレーシア	ペナン校	大門 裕之
10月15日(水)～18日(土)	マレーシア	マレーシア科学大学、ペナン校	浜島 昭二
10月22日(水)～27日(土)	ジャカルタ	バンドン工科大学	蒲原 弘継
10月26日(日)	常滑市	中部国際空港	大門 裕之
10月30日(木)～11月2日(日)	マレーシア	ペナン校	浜島 昭二
10月30日(木)	名古屋市	トヨタ産業技術記念館	蒲原 弘継
11月6日(木)	東京都文京区	拓殖大学文京キャンパス	大門 裕之
11月11日(火)～15日(土)	マレーシア	ペナン校	浜島 昭二
11月22日(土)～25日(火)	モンゴル ウランバートル	新モンゴル高校	桂田 浩一
11月29日(土)	名古屋市	キャッスルプラザ	大門 裕之
12月4日(木)～6日(土)	マレーシア	ペナン校	浜島 昭二
12月12日(金)～16日(火)	マレーシア	ペナン校	浜島 昭二
12月12日(金)～17日(水)	マレーシア	ペナン校	大門 裕之 蒲原 弘継
12月19日(土)	東京都千代田区	文部科学省・国土交通省	大門 裕之
12月21日(月)	兵庫県西宮市	関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス	桂田 浩一
1月13日(火)～17日(土)	マレーシア	マレーシア科学大学	蒲原 弘継
1月31日(土)～2月3日(火)	マレーシア	ペナン校	大門 裕之 浜島 昭二
2月5日(木)	大阪府吹田市	大阪大学吹田キャンパス	大門 裕之
2月6日(金)～10日(火)	インドネシア・メダン	北スマトラ大学	大門 裕之
2月19日(木)～23日(月)	マレーシア	マレーシア科学大学 本学マレーシア海外教育拠点	ライアン ユージン
2月23日(月)	東京都新宿区	新宿野村ビル	桂田 浩一
3月10日(火)～14日(土)	ニューヨーク	ニューヨーク市立大学クイーンズカレッジ	大門 裕之
3月12日(木)～13日(金)	京都市	京都市市民防災センター 他	桂田 浩一 ライアン ユージン
3月15日(日)～21日(土)	マレーシア	マレーシア海外教育拠点及びマレーシア科学大学他	ライアン ユージン
3月15日(日)～23日(月)	マレーシア	マレーシア海外教育拠点及びマレーシア科学大学他	蒲原 弘継
3月19日(木)	名古屋市	JICA中部	大門 裕之 浜島 昭二
3月20日(金)～23日(月)	中国・北京	全国農業展覧館新館	村松 由起子
3月24日(火)	東京都文京区	拓殖大学文京キャンパス	桂田 浩一

## 6. CIR スタッフ一覧

氏名	所属等
大門 裕之	CIR センター長、教授（環境・生命工学系兼務）
浜島 昭二	CIR 特任教授（国際教育センター兼務）
桂田 浩一	CIR 准教授（情報・知能工学系兼務）
村松 由起子	CIR 准教授
吉村 弓子	CIR 准教授
ライアン ユージン	CIR 講師（～平成26年9月） 准教授（平成26年10月～）（総合教育院兼務）
蒲原 弘継	CIR 特任助教
鈴木 聖子	CIR 助手

### <事務担当>

氏名	所属等
中田 尚樹	国際課長
與語 貴生	国際課留学生係長
福村 静	国際課留学生係主任
栗田 多映子	国際課留学生係主任
萩原 孝明	国際課留学生係主任（平成26年9月～）
浦川 辰也	国際課留学生係係員（～平成26年8月）
梁瀬 美紀	国際課留学生係係員
村田 もえ	国際課留学生係特命事務職員
河合 智子	国際課留学生係特命事務職員
松本 智枝	国際課留学生係特命事務職員（平成27年3月～）
田口 悠里	国際交流センター事務補佐員
村越 朱美	国際交流センター事務補佐員
高橋 佳子	国際交流センター技能補佐員

国立大学法人豊橋技術科学大学  
グローバル工学教育推進機構 (IGNITE)  
国際教育センター (CIE)

Center for International Education (CIE),  
Institute for Global Network Innovation in Technology Education (IGNITE),  
Toyohashi University of Technology



## センター長 挨拶

豊橋技術科学大学  
グローバル工学教育推進機構  
国際教育センター長  
松 田 厚 範

平成24年度に始まった大学改革強化推進事業（期間：平成24年度～平成29年度）も平成26年度で3年が経過しました。それぞれのプログラムは本格的に実施され、その中間時点での成果がそろそろ評価される時期を迎えつつあります。本学は、本事業においてグローバル教育の強化・展開を担当し、学内にグローバル工学教育推進機構を平成25年10月に設置し、同時に本国際教育センター（Center for International Education: CIE）を発足させました。

CIEは、

1. 海外教育拠点（ペナン校）の設置・運営
  2. 国際プログラムペナン校特別コースの企画・実施
  3. グローバル技術経営（Management of Technology : MOT）を含む海外実務訓練の整備・実施
  4. グローバルe-ラーニングの整備・展開支援
  5. 教職員のグローバル力を高めるためのグローバルファカルティ・ディベロップメント（FD）／スタッフ・ディベロップメント（SD）の企画・実施
- をミッションとし、これらを精力的に推進しています。

平成26年度は、様々なプログラムが本格稼働し始めました。日本人学生の海外実務訓練に加えて、高専教員と技科大教員のグローバルFDプログラム及び職員のグローバルSDプログラムが実施されました。また、三機関の海外同窓生交流会と国際会議第2回IGNITE2014がペナン校を利用して実施できたことは、画期的なことだと思います。また、マレーシア科学大学（USM）とは、定期的な協議会、サマースクールの合同実施、共同研究などを通して関係強化が一層進んでいます。これらの活動は、本学の教職員のみなさまの多大な努力と協力によって支えられており、その様子は、本活動報告書をご覧いただければ、よくご理解頂けるものと思います。

冒頭にも書きましたが、これから本事業と本センターは、そろそろ成果が見えるかたちで求められる非常に重要な時期を迎えます。グローバル工学教育推進機構ならびに国際教育センターの活動に、みなさまの一層のご理解、ご協力、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 1. プログラム

### (1) 海外実務訓練（グローバル人材教育システム）

平成27年1月及び2月にペナンで海外実務訓練を実施した。平成26年6月に参加希望学生を募集し、18名の応募者の中から英語力を中心に10名を選考した。また2名のマレーシア留学生在がペナンでの実務訓練を希望したので、合計12名の学生が参加となった。日本人学生10名は1月4日に日本を発ち、1月5日から9日までマレーシア科学大学（USM）でオリエンテーションを受けて、学生ビザを取得した後、1月12日から企業での実務訓練を開始した。

学生の派遣先企業は全部で10社であった。1社1人の原則を守って、それぞれの企業には日本人学生は一人ずつ派遣した。なお、マレーシア留学生2名は東レと Keysight Technologies であり、派遣先企業は日本人学生と重複していた。

派遣先企業と受入れ学生数は、日系企業:2社3名、多国籍企業:4社5名、地元企業:4社4名であった。日系企業は Advantest Engineering、TORAY INDUSTRIES (M)、多国籍企業は Continental Automotive Components (M)、Altera Corporation、Keysight Technologies、Ambu、地元企業は SAM Engineering & Equipments、Mini-Circuits Technologies (M)、Cerca Insight、ISO Technology であった。

学生が企業で受けた実務訓練の内容は、基礎研究から製品開発や品質管理まで幅広いものであった。この実務訓練期間中にペナン校で2月1日に中間報告会、2月22日に報告会リハーサルを実施した。グローバルFD研修に参加している高専若手教員の方々にも参加いただき、英語での活発な議論となった。3月2日には豊橋で報告会が実施され、教員と学生の前でペナンでの実務訓練の成果が報告された。



USMでのオリエンテーション（1月5日）



ペナン校での中間報告会（2月1日）

### (2) 教員グローバル人材育成力強化プログラム（長期FD）

国立大学改革強化推進事業（三機関連携事業）の一環として、グローバル指向人材育成に必要となる教員（国立高等専門学校教員を含む）の能力強化として、英語による教育指導法を習得させるとともに、異文化間コミュニケーション能力の向上を目的とした「教員グローバル人材育成力強化プログラム（長期FD）」の取り組みを実施した。

初年度となる平成26年度は、本学教員1名と高専教員10名（グローバルFD研修者）が本プログラムに参加した（表1）。本プログラム研修者は、①本学での3か月間（4月～6月）の事前英語研修を経て、②交流協定先のニューヨーク市立大学クイーンズ校（QC）において6か月間（7月～12月）の英語研修を行い、英語での教授法等について本格的に学んだ後、③本学のマレーシア教育拠点「ペナン校」（平成25年12月にマレーシア・ペナン州に設置）を拠点とし、マレーシア科学大学（USM）等の教育機関において英語による授業の実践等を行った（1月～3月）。

表1 平成26年度グローバルFD研修者およびメンター教員

高専/大学	受講教員	本プログラムのメンター教員 (上段：本学教員，下段：QC教員)	所属学科
仙台高専	小林 秀幸 助教	上原 秀幸 教授	電気・電子情報工学系
		Prof. Theodore BROWN	Computer Science
東京高専	水戸 慎一郎 講師	高木 宏幸 講師	電気・電子情報工学系
		Prof. Igor KUSKOVSKY	Physics
長岡高専	赤澤 真一 准教授	大門 裕之 教授	環境・生命工学系
		Prof. Daniel WEINSTEIN	Biology
富山高専	古山 彰一 准教授	加藤 茂 准教授	建築・都市システム学系
		Prof. Chuixiang YI	Earth and Environmental Sciences
岐阜高専	坂本 淳 講師	廣島 康裕 教授	建築・都市システム学系
		Prof. Andrew BEVERIDGE	Sociology
豊田高専	松本 嘉孝 准教授	井上 隆信 教授	建築・都市システム学系
		Prof. Gregory O'MULLAN	Earth and Environmental Sciences
明石高専	藤原 誠之 准教授	飯田 明由 教授	機械工学系
		Prof. Seogjoo JANG	Chemistry and Biochemistry
高知高専	木村 竜士 助教	松本 博 教授	建築・都市システム学系
		Prof. George HENDREY	Earth and Environmental Sciences
有明高専	岩下 勉 准教授	中澤 祥二 教授	建築・都市システム学系
		松本 幸大 准教授	
		Prof. George HENDREY	Earth and Environmental Sciences
北九州高専	大川原 徹 助教	岩佐 精二 教授	環境・生命工学系
		Prof. Sanjai KUMAR	Chemistry and Biochemistry
豊橋技科大	笹野 順司 助教	Prof. Michael Mirkin	Chemistry and Biochemistry
		加藤 三保子 教授	総合教育院
英語メンター教員		Ryan Eugene 准教授	総合教育院

1) 本学での英語事前研修（平成26年4月1日～6月20日）

本グローバルFD研修プログラムの開始に先立ち、本学における事前説明会（平成26年3月6日）を実施し、現地視察（3月11日～3月14日）として本学ペナン校及びUSM（Engineering Campus）、HOYA Electronics Malaysia（工場見学）を訪問した。

本学にて4月1日に開講式を行い、井上光輝理事・副学長の激励のもと本グローバルFD研修をスタートさせた（図1）。翌2日から英語研修がスタートし、本研修向けに特別に設計した特別英語プログラム（148コマ：90分/コマ）を受講した。また、この間、QC学生とのSkypeでの交流（Skype sessions）を行い、英会話の実践とQCでの生活等の情報収集を行った。さらに、本学での英語研修の締めくくりとして、グローバルFD研修公開授業（Showcase wrap-up、6月19日）を実施し、各人25分（内、5分は質疑応答）の英語での模擬授業を行い、本学教員及び学生へ授業を公開した。

また、高専教員は、英語研修以外にも本学のメンター教員（表1参照）の研究室に所属し、共同研究等の取り組みを通じて、研究力強化にも努めた。



図1 本学での開講式

2) QCでの英語研修（平成26年6月30日～12月24日）

グローバルFD研修者10名は、6月29日に日本を出発し、翌30日からQC学生寮（Summit）での共同生活を開始した（笹野順司助教は高専教員受入れのため6月23日に日本発）。日本から同行した柴田隆行教授及び高木宏幸講師とともにQC教授陣（Dr. Steven



図2 QCでのWrap upプレゼンテーション

Schwarz、Dr. Donna Gruber、Dr. Eva M. Fernández、Dr. William McClure、Prof. Robert R. Engel)とのキックオフ・ミーティング(7月2日)を行い、QCでの研修を本格的にスタートさせた。翌3日には、英語プレイスメントテストを受講し、7段階のレベルにクラス分けされ、English Language Institute (ELI)での「夏季英語集中コース」(6時間/日×4日/週×6週間=144時間)を受講した(7月7日～8月14日)。秋学期(8月28日～12月23日)からは、QC教員が本研修者向けに開発した「英語特別プログラム(Teaching in English)」(2時間/週×14週)を受講し、英語での教授法について本格的に学んだ。さらに、学生目線から体験的に英語での教授法を習得するために、専門科目1科目(3～4credits)の単位を修得し、さらに聴講用の専門科目1科目または複数科目を受講(3～4credits相当分)した。この間、英語スキルの向上を支援するために「英語サポートクラス」(3時間/週×8週)も同時に受講した。また、QCでの英語研修の締めくくりとして各人20分(質疑応答含む)の「Wrap upプレゼンテーション」(12月10日)を実施した(図2)。本発表会には、QC教授陣に加えて、本学からも井上光輝理事・副学長、柴田隆行教授、高木宏幸講師が出席し、プレゼンテーションスキルの評価を行い、ベストプレゼンター2名を選出した。なお、グローバルFD教員にはQCより修了証書が手渡された。

また、高専教員は、研究力強化とグローバル展開を見据えてQCメンター教員(表1参照)との共同研究等の可能性について模索した。しかし、グローバルFD研修者とQCメンター教員の専門分野のミスマッチングや、研究室をもたないQC教員がメンターになるケース等があり、共同研究等に発展させることが難しい状況が多く、次年度以降の反省点である。しかし、メンター教員の研究室の学生との交流、寮でのイベント企画、ニューヨーク市立大学(CUNY)の他のカレッジ所属の専門分野の近い教授を訪問する等、限られた状況の中でも各自が積極的に活動したことは本グローバルFD研修の一つの成果と言える。

QC研修中は、「QCだより」(全10号発行、執筆2名/号)として、QCでの英語研修の様子や共同研究の取り組み状況、さらにはニューヨークでの生活情報等を三機関に配信した(本学ホームページでも公開)。

### 3) ペナンでの英語研修(平成27年1月10日～3月9日)

本プログラムの最終段階として、高専教員10名が本学ペナン校を拠点とした約2か月間の実践的な英語研修をスタートさせた。現地では、これまでスキルアップしてきた「英語コミュニケーション能力」と「英語で授業を行う教授法」の実践として、USM等の教育機関での英語での授業を実施した。授業内容は「Engineering Technologies for the Realization of a Safe and Reliable Automobile-Oriented Society」を共通テーマとして、高専教員それぞれの専門分野のテクノロジーが、自動車及び自動車社会の実現において、どのようにかかわっているのか体系的に整理して、わかりやすく講義を行った(各人2コマ、90分/コマの授業を準備)。具体的には、USMのMain Campusで1コマ、Engineering Campusで2コマ、Politeknik Seberang Perai (PSP)で2コマの授業を実践した。さらに、一部のFD研修者は、DISTED Collegeで1コマ(1名が実施)を学生向けに、Penang Skills Development Centre (PSDC)では1～2コマ(2名が実施)を地元ペナンの技術者向けに実施した。また、授業2コマ分(3月6日)については、USM(Main Campus)からGI-netを介して三機関にリアルタイムで授業を配信する試みも実施した。受講生の評価結果を表2及び表3に示す。受講生からは概ね良好な評価が得られており、本研修の効果が現れた結果と言える。

また、本グローバル研修者は、1年間の研修の成果として、「英語で授業をするためのWeb教材」を独自に開発した。本Web教材及び授業2コマ分の動画コンテンツについては、本学教職員ならびに高専機構を通じて高専教員に公開し、英語での授業を行うためのFD活動として活用できるよう準備を進めている。



図3 ペナン校での修了式



さらに、ペナン研修中には、本学学生の海外実務訓練中間報告会（2月1日）へ参加し、積極的に英語で質問する等、英語スキルアップの効果を発揮して報告会を盛り上げていた。さらに、ペナンでの企業訪問（2月23日：SAM Meerkat Precision、2月24日：Motorola Solutions Malaysia）を行い、PSP提案のホームステイ（2月14日～15日）にも参加して現地の文化にも積極的に触れる機会を得ていた。

ペナン研修中は、「ペナンだより（グローバルFD）」（全6号発行、執筆2名/号）として、USM等の教育機関での英語授業の実践の様子やペナンでの生活情報等を三機関に配信した（本学ホームページでも公開）。最終号は「1年間を振り返って」と題して、全研修者が執筆し、本グローバルFD研修を総括した。

本グローバルFD研修の締めくくりとして、平成27年3月7日に本学ペナン校において、意見交換を行った後、「平成26年度教員グローバル人材育成力強化プログラム（長期FD）」の修了式を執り行い、1年間の本プログラムに参加した高専教員10名と、12月までの9ヵ月間研修を行った本学教員1名（笹野順司助教）、さらに、事前調査のため昨年度ニューヨーク市立大学クイーンズ校に6ヵ月間派遣された本学教員1名（高木宏幸講師）に修了証書を授与した。修了式後には、ペナン校で盛大な懇親会を行い、1年間のグローバルFD研修の成功の喜びを分かち合った。なお、当時、現地に駐在していた本学の黒田清彦国際教育支援室長のきめ細やかな対応がなければ、ペナンでの全研修を滞りなく実施することはできなかった。次年度以降については、どのようなサポート体制でペナン研修を実施していくのか検討すべき大きな課題と言える。

#### 4) グローバルFD研修の達成度評価

表4に1年間の研修を終えて本研修プログラムの内容と自己の達成度を評価した研修者のアンケート結果を示す。総じて、満足する研修内容であったと評価できる結果と言えるが、研修者の中には期待した内容ではなく、自己の達成度に満足していないという厳しい評価もある。本FDに参加した教員は多様であり、もともとの英語のスキルに幅があり、かつ教員の職階や年齢も異なるため、各自の達成目標に大きな隔たりがあり、単独の研修プログラムで全ての要求を満足させることは非常に難しいと痛感した。しかしながら、この評価を真摯に受け止め、研修者個々の要望をでき得る限り実現するよう一層の努力が必要であると言える。表5には本研修でスキルアップできた事項をまとめたものを示した。

表6に本グローバルFD研修での英語スキルアップの定量的評価結果を示す。グローバルFD研修者は、TOEICを2回（4月、翌年5月）、英語スピーキングテスト（アルク教育社 TSST）を3回（3月、6月、翌年3月）、QCでのクラス分けテスト（7月）を受験している。研修前後でのTOEICのスコア（グラフ参照）を見ると、3つのグループに分けられる。「グループ1」は、TOEICが800点前後の研修者で伸び率（グラフの傾き）はそれほど大きくはないが確実にスコアがアップしたグループである。「グループ2」は、TOEICのスコアが400～500点及び600～700点の範囲の研修者でスコアの伸び率が大きいグループである（研修前のTOEICスコアに依存せずグラフの傾きが同程度）。一方、研修前のTOEICが600～700点の範囲の研修者でスコアの伸び率（グラフの傾き）が横ばいの「グループ3」がある。同じ600～700点の範囲で伸び率が大きいグループ2に属する研修者2名の平均年齢は「29歳」、一方、スコアが横ばいであったグループ3に属する研修者4名の平均年齢は「36歳（33～42歳）」と比較的高い。しかしながら、Wrap up プレゼンテーションや英語での授業を聴講する限りでは確実に英語スキルは向上しており、TOEICでは測れない研修の効果が認められている。逆に、研修前のTOEICが400～500点の範囲でスコアの伸び率の高いグループ2に属する研修者2名の平均年齢は「41歳（38～43歳）」ではあるが、スコアが比較的低い状態から研修をスタートした場合には、年齢によらずTOEICのスコアが確実に向上している。これは、研修前のTOEICのスコアが高いグループ1の研修者（2名の平均年齢38歳）にも言える傾向である。

以上のことから、次年度以降の改善点等はあるものの、本グローバルFD研修の効果と意義はほぼ達成されたと言える。

表 2 USM での授業評価結果 (その1)

Date	USM					Number of participants in each course							Evaluation results on participants' course satisfaction (Agree:5 - Disagree:1)					
	Name	Lecture Title	Time	Campus	Total	Undergraduates	Graduate	Faculty	Company	Others	N/A	Average	Undergraduates	Graduate	Faculty	Company	Others	
1月 10 土	2025 (M1354)																	
11 日	Examinations : 12/28-1/15																	
12 月																		
13 火																		
14 水	水戸 MITO	1) Electronics and Automobiles	9:00-11:00	Engineering Campus	25	4	13	7		1		4.1	5.0	3.8	4.1		4.0	
	水戸 MITO	2) Magnetism and Automobiles	14:30-16:30	Engineering Campus	16	3	5	8				3.9	4.0	3.8	3.9			
15 木	小林 KOBAYASHI	1) ITS (Intelligent Transport System)	9:00-11:00	Engineering Campus	33	5	18	7		2		4.5	4.8	4.3	4.5		5.0	
	小林 KOBAYASHI	2) Wireless sensor network	14:30-16:30	Engineering Campus	28	3	15	4	1	2		3.9	4.7	3.7	4.3	3.0	4.0	
16 金	斎藤 AKAZAWA	1) Next Generation energy source -Biofuel-	9:00-11:00	Engineering Campus	18		9	5			4	3.9		4.0	3.8			
	斎藤 AKAZAWA	2) How to Make biofuel ? From the view of genetic engineering	14:30-16:30	Engineering Campus	16		9	3		1	5	4.2		4.3	4.0		4.0	
17 土	Semester Break : 1/16-2/21																	
18 日																		
19 月																		
20 火	水戸 MITO	1) Electronics and Automobiles	9:00-11:00	Main Campus(IPS)	11			9	2			4.0			4.0			
21 水	小林 KOBAYASHI	1) ITS (Intelligent Transport System)	9:00-11:00	Main Campus(IPS)	16			12	2		2	4.2			4.3	4.5	3.5	
22 木	斎藤 AKAZAWA	1) Next Generation energy source -Biofuel-	9:00-11:00	Main Campus(IPS)	21			15	3		1	4.2			4.2	4.0	4.0	
23 金																		
24 土																		
25 日																		
26 月																		
27 火																		
28 水																		
29 木																		
30 金																		
31 土																		
2月 1 日																		
2 月																		
3 火																		
4 水	坂本 SAKAMOTO	1) Traffic safety measurement	9:00-11:00	Engineering Campus	11	1		9	1			3.7	4.0	7.6	4.0			
	坂本 SAKAMOTO	2) Urban public transport	14:30-16:30	Engineering Campus	7			5	1		1	4.1			4.2	4.0	4.0	
5 木	藤原 FUJWARA	1) Mechanical engineering relevant to the automobile	9:00-11:00	Engineering Campus	10			5		4	1	3.9			4.0		3.8	
	藤原 FUJWARA	2) Engine system of automobile	14:30-16:30	Engineering Campus	4			2		1	1	4.3			4.0		5.0	
6 金																		
7 土																		
8 日																		
9 月																		
10 火	坂本 SAKAMOTO	1) Traffic safety measurement	9:00-11:00	Main Campus(IPS)	15			9	3	1	1	4.0			3.8	4.3	4.0	
11 水	松本 MATSUMOTO	1) The environmental impacts by automobile	9:00-11:00	Engineering Campus	7	1		4	1		1	4.6	4.0	4.8	4.0		5.0	
	松本 MATSUMOTO	2) Water environment problems	14:30-16:30	Engineering Campus	7	1		5			1	4.7	4.0	4.8			5.0	
12 木	藤原 FUJWARA	1) Mechanical engineering relevant to the automobile	9:00-11:00	Main Campus(IPS)	3			1	1	1		4.3			4.0	5.0	4.0	
13 金	松本 MATSUMOTO	1) The environmental impacts by automobile	9:00-11:00	Main Campus(IPS)	7			6	1			4.7			4.7	5.0		
14 土																		
15 日																		
16 月																		
17 火																		
18 水																		
19 木	Chinese new year																	
20 金	Chinese new year																	
21 土																		
22 日																		
23 月																		
24 火																		
25 水	岩下 IWASHITA	1)Earthquake damages of structures regarding cars	9:00-11:00	Engineering Campus	30	15	12			2	1	4.4	4.4	4.4			4.5	
	岩下 IWASHITA	2) The structure of Tokyo Sky Tree	14:30-16:30	Engineering Campus	35	14	10	1	2			4.5	4.3	4.6	5.0	5.0		
26 木	岩下 IWASHITA	1) Earthquake damages of structures regarding cars	9:00-11:00	Main Campus(IPS)	7	1		6				4.9	5.0	4.8				
27 金																		
28 土																		
3月 1 日																		
2 月																		
3 火	大川原 OKAWARA	1) Chemistry of cars	9:00-11:00	Engineering Campus	3	1			2				4			4.5		
	大川原 OKAWARA	2) Inorganic catalysts for degradation of exhaust	14:30-16:30	Engineering Campus	0													
4 水	木村 KIMURA	1) An indoor environmental quality in an automobile-oriented society	9:00-11:00	Engineering Campus	3						3							
	木村 KIMURA	2) Realization of sustainable city in Malaysia	14:30-16:30	Engineering Campus	6			5			1	4.8			4.8			
	木村 KIMURA	1) An indoor enviro) An indoor environmental quality in an	9:00-11:00	Main Campus (IPS)	12			7	2		3	4.6			4.7	4.5		
5 木	吉山 FURUYAMA	1) Computer engineering and automobile	9:00-11:00	Engineering Campus	28	1	25				2	4.4	5.0	4.3				
	吉山 FURUYAMA	2) Numerical simulation techniques	14:30-16:30	Engineering Campus														
6 金	大川原 OKAWARA	1) Chemistry of cars	9:00-11:00	Main Campus(IPS)	8	1		6	1			4.3	4.0	4.5	4.0			
	吉山 FURUYAMA	1) Computer engineering and automobile	15:00-17:00	Main Campus (IPS)	10			9	1			4.3			4.3	4.0		
7 土																		
8 日	21(15M1353), except Dr. Furuyama (M1351-16:05)																	

表3 PSP / DISTED College / PSDC での授業評価結果 (その2)

Date	PSP / PSDC / DISTED				Number of participants in each course							Evaluation results on participants' course satisfaction (Agree:5 - Disagree:1)					
	Name	Lecture Title	Time	Institute	Total	Undergraduate	Graduate	Faculty	Company	Others	N/A	Average	Undergraduate	Graduate	Faculty	Company	Others
1月	注	26-29 (月354)															
11	日	Examinations : 12/28-1/15															
12	月																
13	火																
14	水																
15	木																
16	金																
17	土	Semester Break : 1/16-2/21															
18	日																
19	月																
20	火																
21	水																
22	木																
23	金																
24	土																
25	日																
26	月	小林 KOBAYASHI	1) ITS 2) Wireless sensor network	10:00-12:00 13:00-15:00	PSDC	63	15		3	42	3	4.0	3.5		4.3	4.2	4.0
		水戸 MITO	1) Electronics and automobiles	15:00-17:00	PSDC	42	3		2	34	3	3.7	3.0		4.0	3.7	3.7
27	火																
28	水																
29	木																
30	金	大川原 OKAWARA	-	10:00-12:00	DISTED College	68	68					4.0	4.0				
31	土																
2月	1	日															
	2	月															
	3	火															
	4	水	木村 KIMURA	1) An indoor environmental quality in an automobile-oriented society	9:00-12:00	PSP	67	67				4.3	4.3				
			岩下 IWASHITA	1) Earthquake damages of structures regarding cars	14:15-17:15	PSP	71	68		3		4.4	4.3		4.5		
			坂本 SAKAMOTO	1) Traffic Safety measurement 2) Urban public transport	9:00-12:00	PSP	37	20	0		2	4.5	4.8	4.0	3.8	5.0	5.0
			松本 MATSUMOTO	1) The environmental impacts by automobile	14:15-17:15	PSP	38	25	4	7	1	4.5	4.6	4.8	4.0	4.0	5.0
			小林 KOBAYASHI	1) ITS (Intelligent Transport System) 2) Wireless sensor network	8:00-11:00	PSP	104	53	14	5		4.2	4.2	4.1	4.4		4.0
			赤澤 AKAZAWA	1) Next Generation energy source -Bifala 2) How to Make biofuel ? - From the view of Genetic Engineering	11:30-12:30 15:00-17:00	PSP	84	61	12	10		4.2	4.2	4.2	4.2		4.5
	7	土															
	8	日															
			藤原 FUJIMURA	1) Mechanical engineering relevant to the automobile 2) Engine system of automobile	9:00-12:00	PSP	121	113		8		3.9	3.9		4.0		
			大川原 OKAWARA	1) Chemistry of cars 2) Inorganic catalysts for degradation of exhaust	14:15-17:15	PSP	79	56	9	14		3.9	4.0	3.7	3.7		
			水戸 MITO	1) Electronics and Automobiles 2) Magnetism and Automobiles	9:00-12:00	PSP	137	132		4	1	3.9	3.9		4.3		4.0
			西山 FURUYAMA	1) Computer engineering and automobile	14:15-17:15	PSP	73	66	3	2	2	3.9	3.9	4.3	4.0		4.0
	11	水															
	12	木															
	13	金															
	14	土															
	15	日															
	16	月															
	17	火															
	18	水															
	19	木															
	20	金															
	21	土															
	22	日															
	23	月															
	24	火															
	25	水															
	26	木															
	27	金															
	28	土															
3月	1	日															
	2	月															
	3	火															
	4	水															
	5	木															
	6	金															
	7	土															
	8	日															

表4 平成26年度グローバルFD研修アンケート（総括）

1. TUT研修					
1-1) 英語研修（アルク）	満足	ほぼ満足	どちらとも いえない	やや不満足	不満足
	3	6	1	0	0
1-2) 研究活動	出来た	ほぼ出来た	どちらとも いえない	あまり出来 なかった	出来なかつ た
	4	0	4	2	0
1-3) 生活環境	満足	ほぼ満足	どちらとも いえない	やや不満	不満足
	7	3	0	0	0
2. QC研修					
2-1) 英語研修（@ELI）	満足	ほぼ満足	どちらとも いえない	やや不満足	不満足
	8	1	0	1	0
2-2) 英語研修（Teaching in English@CTL）	満足	ほぼ満足	どちらとも いえない	やや不満足	不満足
	2	5	0	3	0
2-3) 専門科目の受講	満足	ほぼ満足	どちらとも いえない	やや不満足	不満足
	4	4	1	1	0
2-4) 研究活動（共同研究など）	出来た	ほぼ出来た	どちらとも いえない	あまり出来 なかった	出来なかつ た
	2	3	1	1	3
2-5) 生活環境	満足	ほぼ満足	どちらとも いえない	やや不満足	不満足
	1	7	1	1	0
3. ペナン研修					
3-1) 英語授業の実践	満足	ほぼ満足	どちらとも いえない	やや不満足	不満足
	3	3	2	1	1
3-2) 英語授業以外の活動	出来た	ほぼ出来た	どちらとも いえない	あまり出来 なかった	出来なかつ た
	0	6	1	3	0
3-3) 生活環境	満足	ほぼ満足	どちらとも いえない	やや不満足	不満足
	0	1	4	4	2
4. グローバルFD研修（全般）					
4-1) 研修全体を通じた印象は？	満足	ほぼ満足	どちらとも いえない	やや不満足	不満足
	3	6	0	1	0
4-2) 研修に参加してスキルアップ を図れたか？	出来た	ほぼ出来た	どちらとも いえない	あまり出来 なかった	出来なかつ た
	7	1	1	1	0

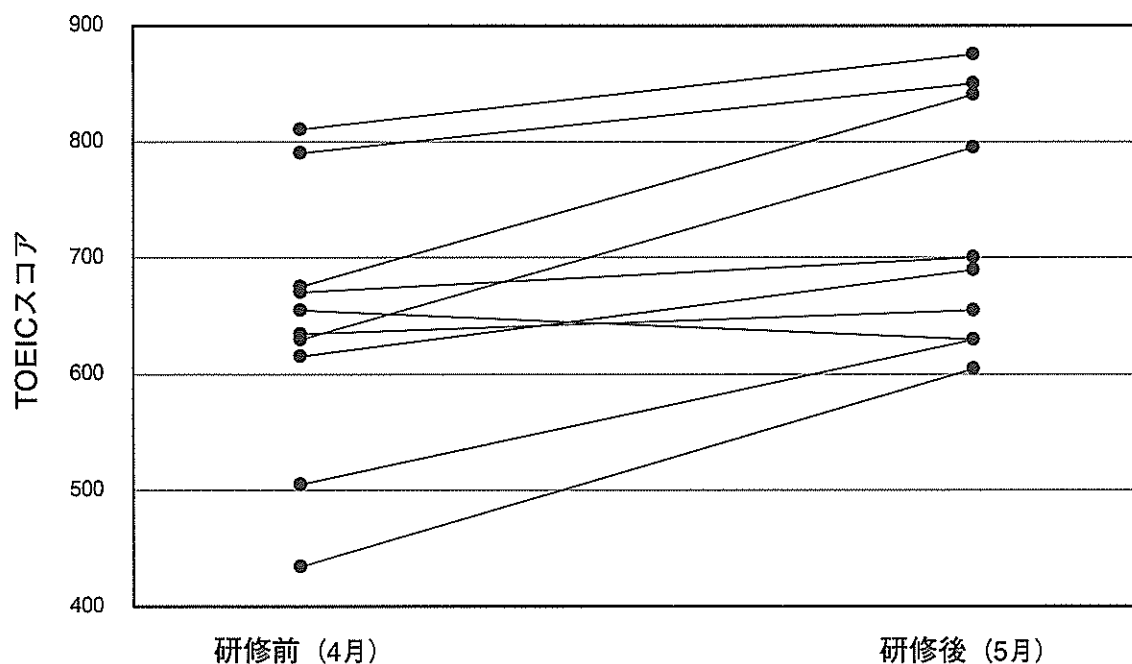
表5 グローバルFD研修でスキルアップできた事項

受講者	英語で授業を行うためのスキルアップ	その他(研究、グローバルマインド、人間力等)
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヒアリング能力のアップ(テレビで観られました)</li> <li>・質問に対して確認を訂正する方法、質問を受け入れる方法</li> <li>・授業を録音して聴く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究の発表を行うことが出来た</li> <li>・日本が一番だということを認識出来た</li> <li>・アメリカも大したこと無いことがわかった</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リスニング、スピーキングの機会を多く持てたことで、英語の運用能力が向上した。</li> <li>・日常生活や英語でのミーティングとは違う、授業に必要な英語のボキャブラリーを学んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバル化や、人種、宗教、文化等について調べ、考える機会となった。</li> <li>・Queens collegeのIgor Kuskovsky教授、Alexander Khanikaev助教と研究上の関係を持った。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に授業を行なったことで、英語で授業を行う経験、及び自信を得られた。</li> <li>・フック、サインポスト等、効果的に授業を行う上で役立つ知識を得られた。</li> <li>・実際にアメリカで授業を受講したことで、シラバスの使い方、ITを活用した授業について学べた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新規テクニックについては取得できたが研究が一番困難であった。しかし、これまで貴学(豊橋技術大)には訪れたことがなかったので多くの方と知り合えたことは個人的に良かったと感じている。</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・TUTでの英語講義法(主にプレゼン)のトレーニング、QCでのELIサマーセミナーは上記と同様に講義制作に大いに役立つ。制作の難易度は大幅に下がった。</li> <li>・内容や教え方など英語以外の次元で講義制作について考える事が出来るようになった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・QCでの研究は、あまりにも専門が異なっていた事と、担当の先生が不在であったこともあり残念ながらも進める事が出来なかったが、研究室には米国人と中国人の学生やボスドクの方がおり、研究のみでは無くさまざまな文化交流をすることができた。今になって考えると語学をあまり気にすることなく話をしていくのがいいので、英語力は上がっていたのかなとは感じる。</li> <li>・米園に対する印象はちょっと変わった。もっと冷たく、本当に実力のある人間だけが認められるような場所のイメージがあったが、普段はそんなことは無く、大変親切な方が多かった。米園は初めてではなかったが、前回までの印象とは大分異なっており、これはかなり意外だった。</li> <li>・QCで受講していた講義は、先生も含め学生もユダヤ系の方が多く(ほとんど?)、またQC近辺にはユダヤ系のコミュニティが多くあるらしく、日本に居るとあまり接したことが無い民族の方々や交流を持つことができた。祝日や宗教に関する部分でも独特な所があったので、異文化交流としてかなり新鮮であった。</li> <li>・得た高専の事や、自分がどのように高専や社会に貢献していくかという事を、研究部分だけでは無く色々考えたり、それを他の先生方と議論する機会が比較的多くあり、そういうところで変わった意見は私の宝物です。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>・QCでは単位取得用講義として微分方程式に関するものを受講していたが、これは普段、日本で私自身が担当している講義内容とかなり近いものであったため、英語での言い回しや、講義の進め方、学生とのコミュニケーションの取り方が大変勉強になった。この辺の事は実際にマレーシアでの講義中に実践できた。</li> <li>・QCで見たIT技術そのものには目新しいことがあったわけではないが、それらを効果的に教育に使うという部分でQCでの講義は進んでいたと感じた。特に私の場合は情報工学が専門であるため、こういう技術を教育研究の枠だけで納めず、実際に講義に利用する事を検討できたのは非常に大きい。</li> <li>・QCで受講していた講義の先生方の英語がいわゆるネイティブ英語では無かったため、耳が慣れるまで少々苦労したが、後半は特に問題はなかった。そういう部分も含めてリスニング力は上がったと感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏季のELIの授業で、若い韓国人の学生のアクティビティに感銘を受け(インターンシップ先などすべて自分で探し連絡を取っている)、自分もまけていられないということ、研究面ではアメリカ、マレーシアの教員と積極的にコンタクトをとった。</li> <li>・いずれもすべてうまくいったわけではない(もちろんメールをしても無視されることもある)、ある程度形になった。</li> <li>・このように、貴学からコーディネートされたプログラムに対してただ不平 不満をいうのではなく、足りないと思ったところは自分で見つけ、実行することができたことは大きな成長であった。</li> <li>・もちろん運や相性もあろうかと思うが、例えばメンターの教員が自分と分野が異なるからとか、忙しくて打ち合わせできないとか、そういう環境の中で、自分にとってプラスになるためには何をすべきかを 探ることが大事ではないだろうか。</li> <li>・来年度から私は一部の講義を英語で授業することになりますが(高専3年生に対して)、今後は英語に対してバリエーションをもつ学生のマインドの変化は可能か、可能であればどのように変化させていけるのかを案議していくことになりまし</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語で的確なく説明、議論ができるようになったこと、英語に対するバリアはなくなった。もちろんボキャブラリー不足や表現の不自自さはあるが、それを補うテクニックを習得することができた。これは日々の英語訓練(ドラマ鑑賞、英会話)によるものが大きい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異なるバックグラウンド(文化、言語、習慣など)を持つ人々との仕事を通じ、その難しさとおもしろさを感じた。</li> <li>・日本人もしくはアジア人が海外で仕事を始める際の心得を身につけられたこと(人間力の育成)</li> <li>・グローバル社会で仕事をすると、自分のバックグラウンド(日本文化)の重要性を感じた(グローバルマインドの育成)</li> </ul>
G	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講師に必要な、サインポスト、アイコンタクト、トランジションの効果的な使い方に関する技術を習得することができた。ただ単に英語の勉強をするだけではこの技術の習得は不可能で、アメリカで講義を受講しなければわからないことであった。</li> <li>・講義に関連する海外の事例の収集が容易になった。これは、マレーシアで講義する際に、世界の大学のシラバスや講義資料を収集した経験から修得できた技術である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊橋技術科学大学では自分の専門に関する研究室へ入ることができ、今後の共同研究への可能性が広がった。</li> <li>・アメリカやマレーシアで長期滞在し、種々のプレゼン等を行うことで、国外出張や国際会議等への参加に関する障壁がなくなった。</li> <li>・ELIに学びにきている留学生を見て、世界中の人間のタフさを学んだ。</li> </ul>
H	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の進行の仕方</li> <li>・聴講生の授業への巻き込み方(アクティブコミュニケーション)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人前で英語で突然話す勇気</li> <li>・英語による会話の聞き方</li> </ul>
I	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンテンツを精選すること、わかりやすい内容にすることで英語での授業も内容を伝えることができることを確認した。</li> <li>・英語でもできる限り学生に向かって話すことができるようになってきた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者と仕事をする際、その人たちがどのような考えを持っているのか(文化の違い等)を踏まえ、お互いの共通の利益を認識し、目的の達成のために取り組むことの重要性などを再認識した。</li> <li>・英語はあくまでコミュニケーションのツール(一方で重要なグローバルランゲージ)であり、それを活用しながら、目的達成のため、自分のいる学校、日本の技術等を発信していくことが重要であることを再認識した。</li> </ul>
J	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で用いる決まった表現ある程度抑えることができた。</li> <li>・英語発音が向上した</li> <li>・アクティブラーニングについて学習し、その一部を授業の中で展開(ディスカッションやグループワーク等)することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニューヨーク市立大学との間で人脈を作ることに成功し、今年度から共同研究を始めた。また、学生1名を今夏、QCへ送るための予算を申請した(第3期トビタテ！留学JAPAN)</li> <li>・若い学生から学部長クラスの教授、マレーシアでは学長クラスの教員らと接する機会が多かったことで、様々な場面に合わせた立ち振る舞いを経験し、人間力の面で大きくスキルアップできた。</li> </ul>
K	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語の発音について一から学び直したことで、スピーキング時の発音技術だけでなく、リスニング能力が倍増に向上した。</li> <li>・サインポスト(話題の転換時などに用いる決まり文句)を意識して用いることにより、効果的なプレゼンテーションの組み立てができるようになった。</li> <li>・プレゼンテーションにおけるアイコンタクトや聴衆とのインタラクションなどの重要性を理解し、意識して活用できるようになった。</li> <li>・アクティブラーニングの有効性を学んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身の英語運用能力は明らかに向上したと思われるが、自信はそれほどついていない。その理由は、アメリカで本場の英語を体験することで、自分が目標とするところがさらに高くなってしまったためと思われる。</li> <li>・ローコンテキスト文化の下で、意見を言葉にすることの重要性を身につけて理解した。</li> </ul>

表 6 グローバルFD研修前後での英語スキルアップの定量的評価

FD研修者	TSST事前テスト (3月)	TOEIC (4月)	TSST事後テスト (6月)	QCクラス分けテスト (7月)	TSST事後テスト (3月)	TOEIC (5月)
	レベル	点数	レベル	レベル	レベル	点数
A	3	415	4	4	4	(9/13受験予定)
B	5	630	5	6	6	795
C	3	435	4	4	4	605
D	5	635	5	5	5	655
E	4	615	4	5	5	690
F	6	670	6	6	6	700
G	5	505	5	5	5	630
H	6	655	6	5	6	630
I	4	790	5	7	5	850
J	5	675	5	6	5	840
K	5	810	5	7	5	875

研修前後でのTOEICのスコア推移



### (3) 職員グローバル人材育成力強化プログラム (短期SD)

平成25年度から、職員対象の短期SD (スタッフ・ディベロップメント) プログラムを開始したが、平成26年度よりその一環として、本学、長岡技術科学大学及び国立高等専門学校機構各高専の事務職員を対象とした「三機関連携マレーシア教育拠点職員研修 (SD)」を開始した。

平成26年度に実施したSD研修は以下のとおり。

#### < SD研修 (英語初級レベル) >

英語初級レベルの事務職員7名を対象に、英会話トレーニングを中心とした週2回の渡航前英語研修を3ヶ月間実施し、その後、マレーシア教育拠点 (ペナン校) に1週間程度派遣した。期間中は国際会議 (IGNITE2014) 及び三機関合同の海外同窓生交流会 (マレーシア) にて、実際に英語を用いた案内や受付等の実務対応を行うことで、英語によるコミュニケーション能力の向上を図ることができた。

## < SD 研修（英語中級レベル）：三機関連携マレーシア教育拠点職員研修 >

国立大学改革強化推進事業「三機関が連携・協働した教育改革」の一環として、本学、長岡技術科学大学及び国立高等専門学校機構各高専の事務職員を対象とした海外研修の取組を開始した。平成26年度は、英語中級レベルの事務職員計8名を12月と3月に、10日～2週間程度、マレーシア教育拠点（ペナン校）に派遣した。



各研修職員は自らマレーシア科学大学（USM）の国際、学生、研究支援等の担当課の事務職員と連絡調整を行って現地での意見交換の機会を取りまとめ、それぞれの業務内容について海外との業務の違いを学び、国際業務の課題解決能力等の向上を図ることができた。

また、12月派遣の研修職員は上記英語初級レベルの研修職員と共に国際会議及び海外同窓生交流会の中心的な実務支援を、3月派遣の研修職員はペナンでの海外実務訓練やグローバルFD実践研修等のフォローアップを行い、より実践的な英語実務を経験することで、更なる英語能力のスキルアップと国際業務における対応能力の向上を図ることができた。



【参考：SD研修参加者所属係】本学 教務課 教務総括係、本学 国際課 留学生係、長岡技術科学大学 財務課 主計係、明石工業高等専門学校 総務課 調達係、富山高等専門学校 総務課 総務担当、宇部工業高等専門学校 企画連携事務室 連携係、大島商船高等専門学校 総務課 総務事務グループ、茨城工業高等専門学校 総務課 研究協力・地域連携係

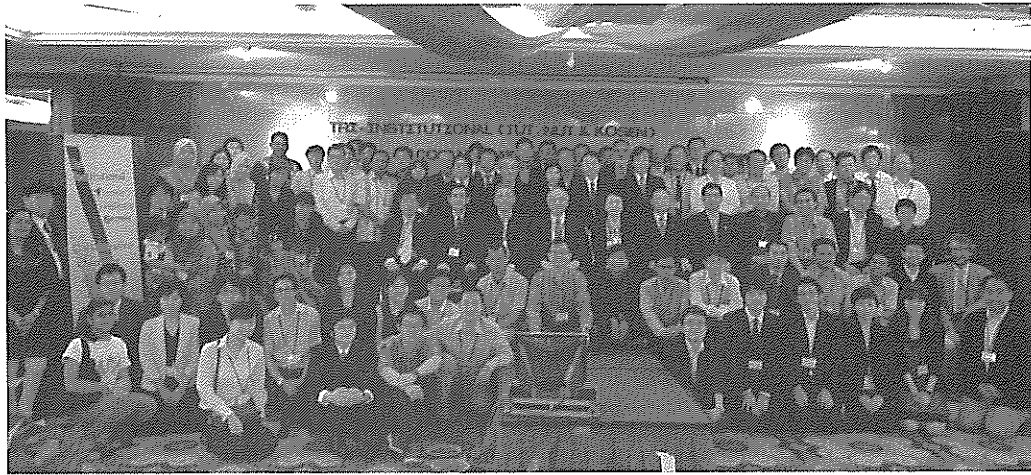
## (4) 海外同窓生交流会

### ① TUT 海外同窓会設立準備会及び三機関合同海外同窓生交流会 in マレーシア

海外における本学の同窓生ネットワークを組織化し、交流活動を活発にすることを目的として、TUT 同窓会・海外支部設立準備会議を、12月13日（土）に本学のマレーシア教育拠点（ペナン校）にて開催した。

現地マレーシアをはじめ、インドネシア、ベトナム、タイ、ラオス、パキスタンから総計40名の留学生同窓生が参加、日本からのTUT教職員、TUT同窓会役員他と合わせて70名以上が参加し、各国の代表同窓生の選出、海外支部との連携窓口となる国内担当候補者の選出、海外同窓生の名簿データ管理等について議論した。

その後、会場をホテル（Northam All Suite Penang）に移し、長岡技術科学大学、国立高等専門学校機構及び本学で進めている三機関連携事業の支援の下、三機関合同海外同窓生交流会が開催された。本学海外同窓生の他、長岡技術科学大学及び国立高等専門学校機構各高専の海外同窓生、三機関の代表、本学教員も参加し、各機関同窓生からの挨拶、今後の交流会の開催、三機関同窓生ネットワークの構築等に関する意見交換を行った。引き続き、同会場にて懇親会を行い、同窓生の家族、本学の教職員・学生も含め110名近くで盛大に盛り上がり、国内・海外同窓生間の親睦を深めることができた。



三機関の同窓生、教職員の集合写真



交流会の様子



交流会の様子

## ②三機関合同交流会 in ベトナム

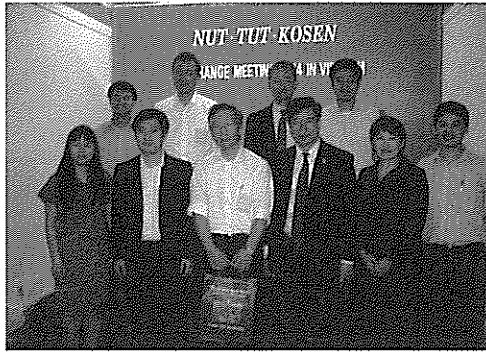
長岡技術科学大学の協力のもと、国立高等専門学校機構及び本学の三機関合同による交流会を、11月27日（木）にベトナム・ハノイにて開催した。

本交流会は、三機関の卒業生並びに各機関に在籍する教職員及び学生の一層の連携強化を図る目的で行われ、ハノイで活躍している本学出身者6名の同窓生が出席したのに加え、日本からは、本学の岩佐精二教授、柳田秀記教授、内山直樹准教授、Lim Pang Boey 准教授の4名が出席した。なお、国立高等専門学校機構を代表して、秋田工業高等専門学校から西野智路准教授、長岡技術科学大学から福田雅夫教授をはじめ、ハノイ工科大学（HUST）とのジョイント・シンポジウムへの参加者を中心に28名が出席した。総計39名で和やかな雰囲気の中、同窓生同士の久しぶりの再会を懐かしみ、また三機関教職員同士の親睦を深め、有意義な意見交換を行うことができた。

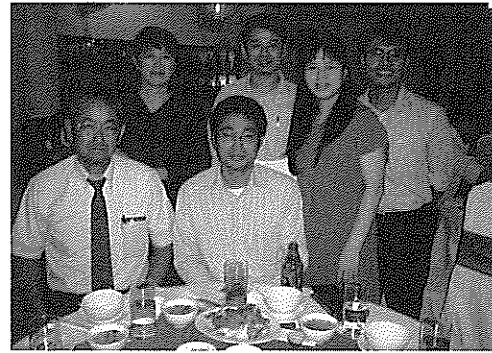


三機関の同窓生、教職員の集合写真





本学の同窓生と教員



交流会の様子

## (5) 海外教育拠点を活用した教育プログラムの検討

### 【活動記録】

平成26年

- 7月24日 ペナン教育プログラム検討会
- 7月28日 検討状況報告（→井上理事・副学長）
- 8月19日 コアメンバー検討会議  
→ペナン教育プログラム Global Technology Management 専攻（仮称）の概要作成
- 9月1日 井上理事・副学長との面談（松田、澁谷、Lim、梅本）  
→日本人社会人を対象とした独立専攻 Global Technology Management を説明
- 9月3日 研究支援課の協力の下、本学と包括協定を結んでいる金融機関との意見交換会を企画
- 9月19日 日本政策金融公庫、豊橋信用金庫、蒲郡信用金庫と意見交換
- 12月3日 豊川信用金庫、十六銀行と意見交換
- 12月3日 浜松信用金庫、愛知銀行と意見交換
- 12月24日 ペナン校の活用に関するCIEブレインストーミング実施

平成27年

- 1月15日 東三河地域研究センター・高橋様、豊橋商工会議所・白井様来学  
→豊橋の企業の海外展開の状況、グローバル人材育成に対する企業の考え方、ペナン校の活用に関する意見交換

### 【平成26年度活動概要】

1. マレーシア教育拠点（ペナン校）を活用した大学院修士課程の教育プログラム検討
  - ペナン校設置の趣旨を最大限に生かし、他の系への影響も考え、本学の教育をグローバル化に対応させる上で効果的な教育カリキュラムとして、「独立専攻」の形態で「グローバルMOT専攻（仮称）」を設置することを念頭に検討を行った（新たな「組織」を作るが、ペナンにそれを設置することは行わない方向で検討）。
  - この検討のために、「ペナン教育プログラム検討会」を立ち上げ、うちコアメンバー（CIE教員中心）により、「ペナン教育プログラム」のフレームワーク（次葉参照）として検討結果を取り纏めた。
  - 一方、当該独立専攻を立ち上げる妥当性、社会人学生受入れに対する産業界のニーズ、立ち上げた場合の具体的なカリキュラム内容や実施条件を把握・検討するため、本学との間で包括協定を締結している地域金融機関（地銀、信金等）を中心にヒアリングを実施した。

## 2. 金融機関との意見交換結果（まとめ）

- 金融機関との協議から見えることとして、地元の中小企業はゆとりが無く、大学に人を派遣するようなことはとてもできない。在ペナンの駐在員の話によると、派遣は直前に伝えられ、教週間の語学教室や文化セミナーには出る場合があるが、現地の現場で鍛えられるしかないとのこと。JETRO や銀行が主催するセミナー以上に大学で何ができるのか疑問が残る。
- 企業の生の声を聞くためにも、普段からセミナー等を開催してアンケートを採り、企業のニーズを把握する必要がある。
- 大学が技術相談と同様に、グローバル相談を受け付けることも一案。企業のニーズを聞く機会になる。地道に積み上げていかないと、いきなりグローバル化と言っても思惑が大学と企業で食い違う。
- 豊橋の企業は2極化が進んでおり、大企業はグローバル化を進めているが、中小企業の関心は国内に限られているところが多いと推察される。
- ペナン校の利用に関して意見聴取した結果、見本市や商談会のようなものを開催することが良いとの提案があった。

参考：ペナン教育プログラム Global Technology Management 専攻フレームワーク（当初案）

平成26年9月1日 Ver.1

### ペナン教育プログラム

#### Global Technology Management 専攻（仮称）のフレームワークについて（案）

ペナン教育カリキュラム検討コアメンバー

#### 1. はじめに（本ペーパーの位置付け）

前回7月28日に実施した、井上理事・副学長への「グローバルMOT 専攻（仮）」新設案の検討状況報告の結果を踏まえて、コアメンバー間であらためて検討を行い、その結果として先般提案内容を大幅に見直した別提案として、「Global Technology Management 専攻（以下、GTM 専攻）」のフレームワークを策定したもの。

#### 2. 基本的な考え方（新専攻設置の必要性）

本学では現在、「グローバル技術科学アーキテクト養成キャンパス」の創成に向けた取り組みを進めており（スーパーグローバル大学創成事業申請中）、今後、ボーダーレス化が進む産業界が必要とする要件\*を備えた、世界的に活躍できる上級技術者を輩出していくことが期待されている。

\*人材要件：グローバルコミュニケーション能力、多様な価値観の下での課題解決能力、世界に通用する人間力

一方、企業では、高度な技術的素養を備えた研究・開発能力の高い人材を活用しながら、海外市場／世界市場において訴求力・競争力を持つ製品開発を持続的に行っていくことが多くの業種において、企業規模を問わず最重要課題の一つとなっている。

その実現のためには、上級技術者が技術的側面において高度で優秀であるのみならず、グローバルな市場をリードするような新たな価値を発見し、創造し、またそれを高めることが出来なければならないが、そのような人材の能力開発には、一定期間、企業での実務経験を経て企業の行動原理を実際に理解した上でなければ着手することは難しい。

そこで、本学としては、学部～大学院レベルの教育システムとは別に\*\*、企業の中核的、もしくは将来的に中核を担う（主として日本人の）技術者・開発者（＝産業人材）のための能力強化を目的としたプログラム（専攻）を新たに設置する。

\*\* 但し、本学の技術科学教育体系の一部を構成するもの

### 3. プログラムの概要

「これからの産業界、製造業企業は、上級技術者が技術をマネジメントすることでリードする」

本プログラムは、産業界と連携して運営・実施することで企業の人材育成を共通して担うプラットフォームの役割を持つ。入学する社会人学生は高度技術者にターゲットを絞り、OFF-JT的な環境下で、グローバルな事業環境の変化に適応出来、価値創造（グローバル・イノベーション創出⇨海外でも売れる製品開発）をリードする人材となるよう、また、将来的に企業のマネジメントレベル（CTO、CEO など）を担えるよう、高度な技術戦略理論に裏打ちされた実践力養成を目的とし、本学ペナン海外教育拠点も活用したカリキュラムを国内外の大学・産業双方の第一人者を登用して実施する。また、本学の「技術科学」の伝統に則り、社会人学生は原則として専門性の近い系のいずれかの研究室に所属し、大学院工学研究科の輪講や専門科目を選択的に履修出来るものとする。

なお、このプログラムは、従来の本学 MOT とは対象者（社会経験がない学生を対象）が異なるとともに、一般的な MOT 専門職大学院ともターゲット（技術系人材に限らない）、アプローチ（海外を教育拠点として活用しない）が異なる、全く新しい高等教育プログラムである。なお、分野については特定の技術専門性を要求するものではなく、本学の 5 系全領域からの参加が可能である。入学者には、本学博士前後期課程修了生の修了一定期間後の参加も強く期待される。

### 4. 新専攻のフレームワーク

#### (1) 対象とする学生（人材像）

原則として以下の日本人を対象とする。なお、外国人学生が参加する場合は日本語レベルが N1 であることを必須とする（国内での授業はパイリಂಗアル授業として実施されるため、受講に必要）。

①学部卒業以上、3年（5年）以上の実務経験を有する、企業においてグローバルなビジネス環境で価値創造をリードする技術系社員（中核技術者）

\* 同等の経験・能力を有する非正規社員も対象とする。

②学部卒業以上、3年（5年）以上の実務経験を有する、近い将来、海外においてビジネス展開する可能性がある起業家（中核技術者）

#### (2) 基本情報

##### ①設置方法

本学大学院工学研究科の下に新たに「Global Technology Management 専攻」を置く。

\* 専門職大学院ではない。

##### ②期間

2年制、4月入学とする。1年目についてはうち6ヶ月をペナン教育拠点で実施する。

但し、1年目は主として平日の昼間開講とし社会人の参加は休職を前提とするが、2年目については初年度の研究成果を課題研究としてレポートにまとめることを中心とし、夏期／冬期集中講座及び指導教員のスクリーニングのみで修了要件を満たすことが出来る（休職を必要としない）ものとする。

\* 2年目のカリキュラムをフルの学費に見合ったものとする必要性有

##### ③学位

修士（グローバル技術マネジメント）（仮称）

##### ④修了要件

40単位以上修得

##### ⑤定員

当初20名（ペナン校教室及び宿泊キャパシティに依存、現地企業参加者人数も勘案）

##### ⑥履修期間中の居住環境

・豊橋に於いては本学学生宿舎を利用出来ることとする。

（グローバル寄宿舎「技術究創舎」新設後は同寄宿舎利用可能）

・ペナンにおいてはペナン校周辺の宿舎を利用。

## 5. カリキュラムの特徴

### (1) 豊橋本校開講部分の概要

#### (1年目)

- ・課題発見・解決、価値創造等のグローバル・イノベーションの実践について様々な技法、理論、事例を学ぶ（技術英語を活用した討論、英語を使用した企画立案・ディベート等の授業を通じて専門能力を養う。以下、同様）。
- ・ミニリサーチ（研究開発シミュレーション）を軸に、技術専門性とマネジメントの相関・融合について学ぶ。
- ・市場動向の把握・分析技法について学ぶ。
- ・戦略論とプロジェクト&プログラムマネジメントについて学ぶ。
- ・知財管理とライセンス、ニーズ×シーズマッチングによる技術活用について学ぶ。
- ・産学連携の課題と諸施策について学ぶ。
- ・特定研究領域の最新動向について学ぶ（輪講への参加）。
- ・欧米企業の技術経営と日本のものづくり企業の製品開発について学ぶ。
- ・企業におけるリーダーシップについて学ぶ。

#### (2年目)

- ・サマースクールとして本邦企業の技術マネージャーの集中講義を受講する。
- ・課題研究を行い、指導を受けレポートにまとめる。

### (2) ペナン開講部分の概要 \*基本的に英語による授業、実習とする

- ・ペナンに立地する欧米日企業の経営の特徴について学ぶ（現地企業視察、現地企業講師による講義、比較検討ワークショップ）。
- ・ペナン企業（各国資本）のマーケティング、価値創造の実情を調査分析し、テーマを決めて課題研究を行い、成果をプレゼンする。

### (3) 教員

- ・教育機関より上記教育内容毎に第一人者を招聘する。
- ・企業の経営者を厳選し招聘する。

### (4) 日本企業との関係性

- ①本専攻の考え方に賛同する企業を募り、コンソーシアムを形成する。  
それらの企業の社員を社会人学生として受け入れる。
- ②寄付講座を設置する。
- ③当該企業の有為なマネジメント経験を持つ幹部社員を講師として招聘する。

### (5) ペナン企業との関係性

アジアのビジネス環境下における技術経営、運営管理、製品開発の事例として活用させてもらう。代替としてペナンカリキュラムへ社員を一定数オブザーバ参加出来ることとする。

## 6. 既存教育プログラム（大学院課程）との接続性

### (1) 本学工学研究科 5 系の博士前後期課程学生

- ①ペナン開講部分を選択科目として履修可能とする。
- ②豊橋開講授業についても一定範囲内で履修可能とする。

\*就職活動が2015年度より4月より就職活動がスタートし8月解禁となる見込み、影響ない範囲で認める方向

以上

## 2. 国内会議

### (1) 国際教育センター（CIE）会議

平成26年4月～平成27年3月の間、隔週月曜日開催を原則とし、19回開催

### (2) 三機関連携・教育改革推進室会議

開催日	場 所 等
平成26年4月17日	国立高等専門学校機構 竹橋オフィス
平成26年5月22日	GI-net TV 会議（＊）
平成26年6月26日	GI-net TV 会議
平成26年9月4日	GI-net TV 会議
平成26年10月30日	国立高等専門学校機構 竹橋オフィス
平成26年11月27日	GI-net TV 会議
平成26年12月25日	GI-net TV 会議
平成27年1月22日	GI-net TV 会議
平成27年3月26日	GI-net TV 会議

＊ GI-net：三機関の全国59拠点を高速通信専用回線で結ぶ遠隔講義・会議システム

### (3) 三機関連携・海外キャンパス共同設置準備室・FD等検討部会・海外展開部会（グローバル部会）合同会議

開催日	場 所 等
平成26年4月17日	国立高等専門学校機構 竹橋オフィス
平成26年5月22日	GI-net TV 会議
平成26年6月26日	GI-net TV 会議
平成26年7月24日	GI-net TV 会議
平成26年10月2日	GI-net TV 会議
平成26年10月23日	GI-net TV 会議
平成26年12月25日	GI-net TV 会議
平成27年3月26日	GI-net TV 会議

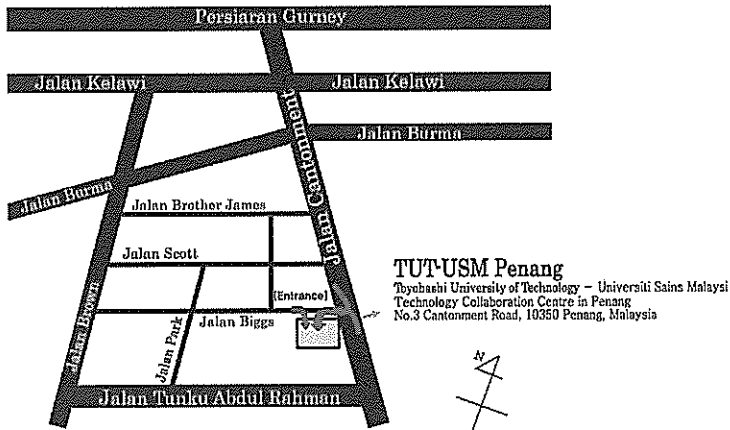
### (4) 国際教育センター運営協議会

開催日	場 所 等
平成27年2月24日	KKR ホテル東京

### 3. マレーシア教育拠点（ペナン校）の活動

#### (1) 所在地等

- ・所在地 3 Cantonment Road, 10350 Penang, Malaysia
- ・電話番号 +60-4-226-6242、6252
- ・FAX +60-4-226-5755
- ・ホームページ <http://ignite.tut.ac.jp/cie/penang/>



ペナン校外観

#### (2) TUT-USM 協議会

##### < 第 4 回協議会 >

開催日：平成26年7月21日

場所：ペナン校

- 議事次第：
1. Introduction of the members
  2. Review of the previous meeting
  3. Collaborative Programs
    - A. Student Internship with Industry
    - B. Joint Research Collaboration updates
    - C. Academic Collaboration including Exchange and Joint Programs
    - D. Joint Talks/Seminars/Conferences and Other Activities
      - i) IGNITE2014
      - ii) Faculty Development Program
  4. Other Matters
    - i) Joint Degree Program

出席者：◆マレーシア科学大学 (USM)

Prof. Dato' Dr. See Ching Mey (Deputy Vice-Chancellor [Industry and Community Network])、Prof. Dr. Mohd. Zaid Abdullah (Dean, School of Electrical and Electronics Engineering)、Prof. Othman Sulaiman (Dean, Institute of Postgraduate Studies)、Prof. Zalina Ismail (School of Health Sciences)、Associate Prof. Dr. Lee Keat Teong (Director, Research Creativity and Management Office)、Associate Prof. Dr. Anees Jane Ali (Director, USM International Office)、Dr. Lim Hwee San (School of Physics)、Dr. Yeoh Fei Yee (School of Materials and Mineral Resources Engineering)、

Dr. Asrulnizam Abd Manaf (School of Electrical and Electronics Engineering)、  
Ms. Ajindar Kaur (Deputy Registrar, Division of Academic and International Affairs)、  
Mr. Fong Sew Khuan (Industry Liaison Officer, Division of Industry and Community  
Network)、Ms. Farah Man (Assistant Registrar, USM International Office)

◆豊橋技術科学大学 (TUT)

松田厚範 学長補佐／国際教育センター長、若原昭浩 電気・電子情報工学系長、  
大門裕之 国際交流センター長、Lim Pang Boey 国際教育センター准教授、稲田  
亮史 電気・電子情報工学系准教授、黒田清彦 国際教育支援室長

#### <第5回協議会>

開催日：平成26年10月16日

場所：ペナン校

- 議事次第： 1. Review of the previous minutes of meeting  
2. Collaborative Programs  
    2.1 Student Internship with Industry  
3. Joint Research Collaboration updates  
    3.1 Microelectronics  
    3.2 Waste Management  
    3.3 Materials Science  
    3.4 Brain Science  
4. Academic Collaboration including Exchange and Joint Programs  
    4.1 Collaboration in Summer School Program  
    4.2 Joint Education Programs  
5. Joint Talks/ Seminars/ Conferences and Other Activities  
    5.1 IGNITE 2014  
    5.2 Prestige Lectures  
    5.3 Collaboration in Faculty/Staff Development Program  
6. Other Matters  
    6.1 Recent news from TUT  
    6.2 Next meeting

出席者： ◆マレーシア科学大学 (USM)

Prof. Dato' Dr. Ahmad Shukri Mustapa Kamal (Deputy Vice-Chancellor [Academic &  
International Affairs])、Ms. Ajindar Kaur (Deputy Registrar, Division of Academic and  
International Affairs)、Mr. Fong Sew Khuan (Industry Liaison Officer, Division of  
Industry and Community Network)、Ms. Farah Man (Assistant Registrar, International  
Office)、Dr. Asrulnizam Abd Manaf (Representative for Director of USM Engineering  
Campus & Dean, School of Electrical and Electronics Engineering)、Ms. Sabrina Nasser  
Khan (Representative for Dean Institute of Postgraduate Studies)

◆豊橋技術科学大学 (TUT)

井上光輝 理事・副学長 (学務担当)、松田厚範 学長補佐／国際教育センター長、  
若原昭浩 電気・電子情報工学系長、中内茂樹 情報・知能工学系長、大門裕之 国

際交流センター長、柴田隆行 国際教育センター（機械工学系）教授、梅本実 国際教育センター特任教授、浜島昭二 国際交流センター特任教授、Lim Pang Boey 国際教育センター准教授、黒田清彦 国際教育支援室長

<第6回協議会>

開催日：平成27年2月2日

場所：ペナン校

- 議事次第：
1. Review of the previous minutes of meeting
  2. Collaborative Programs
    - 2.1 Student Internship with Industry
    - 2.2 International Attachment for USM postgraduate students at TUT
  3. Joint Research Collaboration updates
    - 3.1 Microelectronics
    - 3.2 Waste Management
    - 3.3 Materials Science
    - 3.4 Brain Science
    - 3.5 Disaster Research and Transportation Research
  4. Academic Collaboration including Exchange and Joint Programs
    - 4.1 TUT-USM Excellent Student Penang Program (ESPP)
    - 4.2 Joint Education Programs
    - 4.3 Summer Program 2015
  5. Joint Talks/ Seminars/ Conferences and Other Activities
    - 5.1 Conference
    - 5.2 Prestige Lectures
    - 5.3 Collaboration in Faculty/Staff Development Program
    - 5.4 Joint facility -SERC
  6. Other Matters
    - 6.1 Network link between TUT-USM Penang and USM
    - 6.2 Renewal of the Memorandum of Agreement
    - 6.3 Top Global University Project
    - 6.4 Next meeting

出席者： ◆マレーシア科学大学 (USM)

Prof. Dato' Dr. Ahmad Shukri Mustapa Kamal (Deputy Vice-Chancellor [Academic & International Affairs])、Prof. Zainal Ariffin Mohd Ishak (Director, Engineering Campus)、Prof. Othman Sulaiman (Dean, Institute of Postgraduate Studies)、Assoc. Prof. Dr. Lee Keat Teong (Director, Research Creativity and Management Office)、Mdm. Ajindar Kaur (Deputy Registrar, Division of Academic & International Affairs)、Mr. Fong Sew Khuan (Industry Liaison Officer, Division of Industry and Community Network)、Ms. Farah Man (Assistant Registrar, USM International Office)、Dr. Asrulnizam Abd Manaf (Representative for Dean School of Electrical and Electronics Engineering)



◆豊橋技術科学大学（TUT）

松田厚範 学長補佐／国際教育センター長、若原昭浩 電気・電子情報工学系長、大門裕之 国際交流センター長、柴田隆行 国際教育センター（機械工学系）教授、高嶋孝明 国際協力センター教授、梅本 実 国際教育センター特任教授、浜島昭二 国際交流センター特任教授、Tan Wai Kian 国際教育センター特任助教、黒田清彦 国際教育支援室長

(3) IGNITE2014 国際会議

平成26年（2014年）12月14日～12月16日に、以下のとおり、ペナンにおいて、IGNITE2014国際会議を開催した。

主催：豊橋技術科学大学（TUT）

共催：マレーシア科学大学（USM）、長岡技術科学大学（NUT）、国立高等専門学校機構（NIT）

後援企業：Mini Circuits、M&M、Silterra

会場：Jen Hotel 及びペナン校

プログラム：

< 12月14日（日） >

- ・ 16:00 ～ 16:40 オープニングセレモニー
- ・ 18:00 ～ 20:00 レセプション

< 12月15日（月） >

- ・ 8:50 開会
- ・ 9:00 ～ 10:00 基調講演
- ・ 10:15 ～ 17:45 口頭・ポスター発表

< 12月16日（火） >

- ・ 9:00 ～ 10:00 基調講演
- ・ 10:15 ～ 12:00 口頭・ポスター発表
- ・ 14:00 ～ 17:15 チュートリアル
- ・ 17:45 閉会

発表論文数：73件



#### (4) ペナンだより

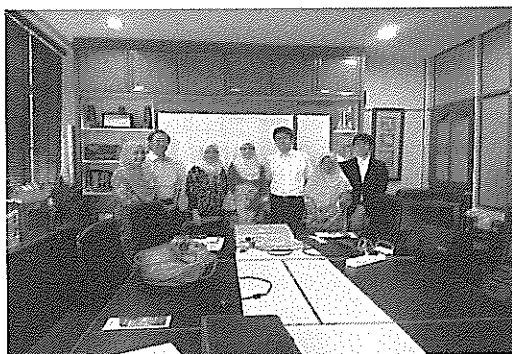
平成26年6月末より、黒田清彦国際課国際教育支援室長をペナン校へ派遣し、常駐職員としての現地での勤務を開始した。

ペナンでの在任中、ペナン校における活動等を学内に報告する「ペナンだより」を定期的に発行し、ペナン校に関する情報の周知を行った。

#### ○ペナンだより（第1号：平成26年7月28日発行）

##### <主要活動報告>

- ・ 6月28日（土）にペナンに到着し、現地で職員（黒田国際課国際教育支援室長）が業務を開始。7月1日（火）に野田総領事他、在ペナン日本国総領事館谷口首席領事、寺本副領事を訪問し、着任の挨拶及び当面の活動予定（9月に予定されている当地での学生サマースクール・研修、来年1月からの海外実務訓練他）を説明。日本人会関係者（東レ・川勝 Executive Director、S&O 清水 Senior General Manager、宗・ペナン日本人会事務局長）に着任を連絡。
- ・ 7月2日（水）～3日（木）：本学から若原教授（2系系長）、中内教授（3系系長）、稲田准教授（2系）、南 EIIRIS テニユアトラック准教授が当地に出張し、博士課程リーディングプログラム・グローバルサマースクール、脳研究・認知科学分野の研究協力可能性、及び今年12月に開催予定の第2回 IGNITE(International Conference of Global Network for Innovative Technology) 開催について、マレーシア科学大学 (USM) 関係者と協議 (USM 側メンバーは、IGNITE 関係では、工学部電気電子学科長 Prof. Zaid 氏他、グローバルサマースクール及び脳研究関係では、BRAIN Network Centre の Prof. Zalina 氏他が参加)。黒田もこれらの協議に参加。  
博士課程リーディングプログラム・グローバルサマースクールでは、USM 学生とともに、マレーシア東北部ケランタン州コタバルから Banding 島でのフィールド体験、ペナン校で、テーマ別グループ活動等を行うことを計画。



7月3日 USM メンバーとの協議 中央が USM Prof. Zalina

- ・ 7月11日（金）～12（土）：第21回日本磁気学会光機能磁性デバイス・材料専門研究会「光機能磁性材料・デバイスの技術動向」がペナン校で開催される。本学関係者（井上理事・副学長、高木電気・電子情報工学系講師、後藤同助教）及び長岡技術科学大学・石橋准教授、豊田工業大学・栗野教授をはじめとする他大学関係者8名及びUSM博士課程学生3名が本研究会に参加。今回の調査をベースとして、来年12月に学振主催の国際会議をペナン校で開催する検討に入った。

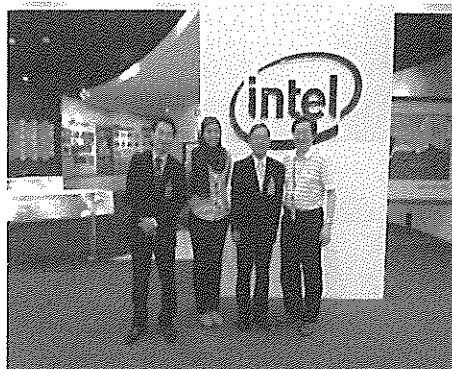


日本磁気学会光機能磁性デバイス・材料専門研究会参加者  
中央左：豊田工業大学栗野教授、中央右：TUT 井上理事

- ・ 7月13日（月）～17日（木）：本学梅本教授、Tan 特任助教が、海外実務訓練受入れ先開拓等のため、現地多国籍企業（Agilent Technologies、Intel Technology Malaysia、Philips Lumiledes Malaysia、Robert Bosch Malaysia、OSRAM Optosemiconductor Malaysia、SAM Engineering & Equipment Malaysia、Sony EMCS Malaysia、Continental Automotive Components Malaysia）及び協力団体（Invest Penang、USM International Office）を訪問。黒田は一部の訪問に随行。



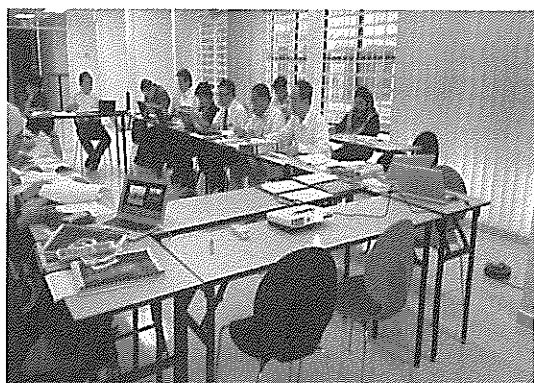
Agilent Technologies：右端 Ms. Cheah Kar-In (Employee Management Manager)、右から2番目 Ms. Ma Sandy (Staffing Manager)



Intel Technology Malays: 右端 Mr. Tan Eng Guan (Design Engineering Manager)、左から2番目 Ms. Mazlina Abu Bakar (Strategic Recruiter Human Resources)

(写真は一部の訪問先)

- ・ 7月21日（月）：第4回 TUT-USM 協議会を開催。ペナンにおける協力・連携活動のレビュー及び計画されている協力活動（海外実務訓練、サマープログラム、グローバルFD、研究協力）の協議を行った。TUT側は、松田教授（国際教育センター長）、若原教授（2系系長）、大門教授（国際交流センター長）、Lim 准教授（国際教育センター）、稲田准教授（2系）が参加、USM側は、Prof. Dato' See Ching Mey 副学長（Industry and Community Network 担当）、Prof. Dr. Mohad. Zaid Abdullah（工学部電気電子工学科長）他、10名が参加。



4<sup>th</sup> TUT-USM Consultative Meeting:  
左上奥左 USM See Ching Mey 副学長  
左上右奥 TUT 松田国際教育センター長

## ○ペナンだより（第2号：平成26年9月7日発行）

### <主要活動報告>

- ・ 7月31日（木）：ペナン日本人学校を訪問し、浦江辰美校長、加藤和弘教頭先生に表敬訪問し、黒田着任の挨拶とともに、当面のTUTの事業活動予定を説明。ペナン日本人学校は、昭和49年10月5日に開校しており、今年が40周年に当たることから、本年、10月5日（日）に記念式典を開催予定であり招待を受ける（参加者は要検討の旨応対）。  
※ペナン日本人学校は、ペナン日本人会が設置母体となっており、小学生113名、中学生26名、派遣教員・現地採用教職員27名が勤務している。マレーシアでは本校の他に3校の日本人学校が設置されている（KL、コタキナバル、ジョホール）。
- ・ 8月7日（木）：井上理事・副学長及びLim 国際教育センター准教授とともに、マレーシア科学大学前副学長であり、現在同大学の名誉教授である Lim Koon Ong 氏を訪問し、マレーシアでの外国大学

の活動展開の現状と方策、TUTの今後の教育プログラムの現地展開などについて意見交換を行った。

- ・ 8月8日(金)、井上理事・副学長及びLim国際教育センター准教授とともに、Wawasan Open Universityを訪問し、同大学Pro-ChancellorであるTan Sri Dr. Koh Tsu Koon氏(現マレーシア上院議員、前ペナン州知事、元首相府大臣)、学長Prof. Dato' Dr. Ho Sinh Chye氏他7名の同大学関係者と意見交換を行った。本訪問は、ペナン地元財界有力者であるDato' Seri Kelvin Kiew, Mini-Circuits Technologies (Malaysia) 会長・社長のアレンジにより、ペナンにおける本学の教育活動への協力として、訪問に至ったものである。今回の訪問では、本学としては初めての訪問ということもあり、双方大学概要のプレゼン、Wawasan Open Universityの学務関係事項の確認等を中心とした意交換となった。今後、遠隔・IT手段を活用したペナンでの教育プログラム実施における協力の可能性について担当を決めて意見交換を継続していくこととなった。



前列左端から Dato' Seri Kelvin 氏、Dato' Seri Stephen Yeap (創立者 Yeap Chong Ee 氏の孫)、Tan Sri Dr. Koh (Pro-Chancellor・上院議員、井上理事、Prof. Dato' Dr. Ho 学長、後列 WOU 大学関係者及び Lim 准教授

※ Wawasan Open University は、ペナンの中華系富豪で、教育等の分野の慈善事業にも貢献した Yeap Chor Ee 氏親族の遺産寄附により設立された The Gerakan 教育財団(後に Wawasan 教育財団 (WEF) と改称) が母体となり設置された大学(2006年に大学レベルの私学として認可)。公開 (Open) 入学、遠隔教育 (Open Distance Learning) とキャンパスでの教育 (On-Campus Learning) を同時に行っている大学で、準学士 (Sub-Degree)、学士、Post-Graduate Diploma、修士 (Master)、博士 (Ph.D) のレベルで、社会人向け、中等教育修了者対象の教育プログラムを提供している。学生数は、学生登録時期により上下するが約4,500名で、フルタイムアカデミックスタッフは約40名、その他パートタイム tutor 約400名を擁する。なお、「Wawasan」とは、vision、insight を意味するマレー語。

- ・ 8月18日(月)：Mini-Circuits Technologies Malaysia 社を訪問し、UMAP International Conference (9月4日、大阪商業大学) で使用する本学発表用プレゼン素材ビデオ撮りを行った。内容は、本年1～2月にペナンで実施した海外実務訓練受入れに関する企業側意見を伺うことを目的としたインタビュー形式で、先方は、Dr. Yee-Ping Teoh・R&D Section Manager (Test & Characterization) に対応していただいた。同じ目的で9月2日(火)、Ambu 社を訪問し、先方は、Mr. Joshua Chong・Senior HR Manager に対応していただいた。インタビューでは、受け入れた本学学生は、勤勉で、技術知識も高く、当初は語学面で苦労していたが、職場での適応能力は高かった等のコメントがなされた。また、インターンシップの期間は2か月より長期が望ましいが、次回以降の受入れも可能である旨の意見も出された。
- ・ 8月31日(日)～9月5日(金)：TUT 特別推薦入学者等海外研修が当地で開催され、TUT 学生14名(学部4年生)が当地で研修を行い、大門国際交流センター長・教授、蒲原同センター特任助教、福村国際課主任、萩原同主任の4名の教職員が研修指導・実施支援に当たった。研修初日に、ペナン校と本校をGIネットで接続して、井上理事・副学長との遠隔セッション等の開講・オリエンテーションを行った後、ジョージタウン市内の異文化遺産・歴史学習、マレーシア科学大学工学部・物理学部ラボ訪問、マレーシア科学大学 (USM 学生) との「Environmental Issues Surrounding our Societies」をテーマにしたグループワーク・プレゼン、企業視察 (National Instruments、Panasonic)、そして、地元マレーシア人家族宅でのホームステイ等、様々な一連の研修活動を行った。今回の研修は、マレーシア科学大学工学部、同物理学部、International Office 他との協力を得て行われ、学生のグループワーク活動では、同大学物理学部大学院学生14名と教職員が参加して行われた。



ペナン校での開講式(TUT井上理事との遠隔セッション (9月1日))



グループワーク後のUSM、TUTの学生・教職員 (9月3日)

○ペナンだより (第3号:平成26年10月23日発行)

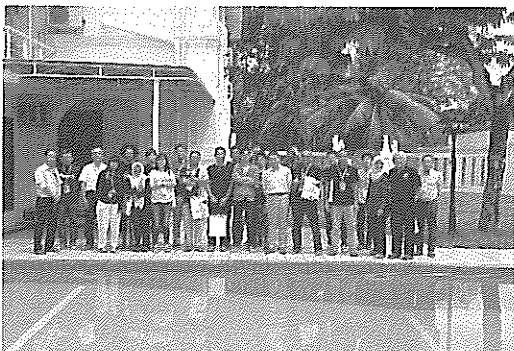
<主要活動報告>

- ・9月7日(日)～12日(金):梅本特任教授(国際教育センター)、Tan特任助教(同センター)が、海外実務訓練事業の学生受入れ予定企業、企業団体、マレーシア科学大学等との打合せ、意見交換のため来訪。一行は、今回初めての訪問先として、地元企業の連合団体である、The Free Industrial Zone Penang Companies' Association (FREPENCA)、Federation of Malaysian Manufacturers (FMM)を訪問し、今後の海外実務訓練等における協力について意見交換を行った他、東レ、Continental Automotive Components Malaysia、Ambu、Keysight Technologies Malaysia、Advantest Engineering他6社、3団体を訪問した。

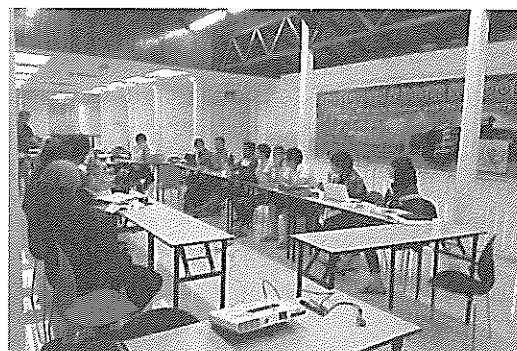
黒田は、FREPENCA、FMM、東レ、Continental Automotive Componentsの訪問に同行。なお、平成26年度の海外実務訓練は、平成27年1月～2月に実施予定で、本学12名の学部学生が(うちマレーシア人留学生2名)が参加予定。

- ・9月12日(金)～21日(日):本学博士課程教育リーディングプログラム「超大規模脳情報を高度に技術するブレイン情報アーキテクトの育成」事業の一環としてグローバルサマースクールが9月6日(土)～21日まで、ケラントラン州コタバル、ペラ州バンディン島、ペナン島で実施された。本サマースクールは、マレーシア科学大学 School of Health Sciences Brain Network Centre for Neurocognitive Scienceと連携して実施されたもので、コタバルでの導入活動、バンディン島での現地少数民族先住民が居住するコミュニティでのフィールドワークの後、ペナンに移動した。

ペナン校では、フィールドワークで見出した先住民が直面する課題に対し、7名の本学大学院学生及び9名のUSM School of Health Sciencesから参加した保健、生命科学等専攻の大学院生が討論・共同作業を通じて、具体的な解決策を提案することを目的とした活動が行われた。9月21日(木)には、TUT及びUSMの学生による企画・運営により、井上理事・副学長、Shukri USM副学長の参画の下、活動成果のプレゼン・閉講式が行われた。期間中、中内教授(3系系長)・本プログラムコーディネーター、松田教授・国際教育センター長、若原教授(2系系長)、浜島特任教授(国際交流センター)、北崎准教授(3系)、稲田准教授(2系)、森田教務課教育企画支援室長、USM側からは、Prof. Zalina Ismail、Prof. Wan Raihana Wan Assimが参画し、サマースクール指導・助言・事業実施支援にあたった。なお、当サマースクールの報告は、<http://brain.tut.ac.jp/>の「News」でご覧になれます。



ペナン校到着時の学生・教職員



ペナン校での討論の様子

- ・ 9月19日（金）：若原教授（2系系長）、黒田は、Zaid USM 電気・電子工学科長他と IGNITE2014 に関する打合せ及び Intel Microelectronics Malaysia を訪問し、長期海外実務訓練、共同研究の協力等について意見交換を行った。
- ・ 9月21日（日）～30日（火）：本学事務職員実務英語研修（マレーシア・ペナンスタッフトレーニング）のうち、第二ステップであるペナン実務コース参加のため、川邊教務課教育支援係長が当地にて研修活動に従事した。本実務コースは、昨年ペナン経験コースに参加した事務職員が更に国際実務・英語スキル向上のために、今年度から実施されているプログラムで、今回の派遣では、ペナン校での英語を使用した初歩的国際実務、USM 主催の国際会議参加等の活動を行った。今年度は、本学から本研修に更に2名、また三機関連携活動の一環として、長岡技術科学大学、国立高等専門学校機構からも事務職員が派遣される予定。
- ・ 9月24日（水）～25日（木）：Lim 准教授（国際教育センター）、黒田は、今年12月13日にペナンで開催を予定している留学生交流会に関する打合せのため本学卒業生が在籍する Universiti Tun Hussein Onn Malaysia（2000年設置の国立大学）を訪問した。また、ジョホール州にあるイスカンダール開発地区を訪問し、Iskandar Regional Development Authority の Mr. Yeap Kok Penag・Vice-President、Economic & Investment から同地区の施策・現状について説明を受けた。同地区は2,217km<sup>2</sup>の広大な地区（シンガポールの3倍、香港の2倍の広さ）に観光、医療、教育、物流等の分野における投資を進めている地区で、教育地区では、New Castle Medicine University 他英国大学を始めとする外国大学分校及びマレーシアの私・国立大学・カレッジが開校・開校予定である。
- ・ マレーシアは、欧米等への留学生送り出し国（2010年、約80,000人）であるが、同時に現在はアジア地域の Education-Hub として、2020年までに留学生受数200,000人の受入れを目指す（2010年で約86,000人の受入れ）こととしている。イスカンダール地区をはじめとした教育インフラを整備し、留学生受入れ国としての基盤整備を進めている状況がうかがわれた。欧米諸国のみならず、シンガポール以外でも、マレーシアまたタイでも留学生受入れを進めており、日本の留学生獲得のライバルが増えていると言える。
- ・ 10月5日（土）：ペナン日本人学校開校40周年記念式典が同校で開催され、松田教授・国際教育センター長の代理として黒田が出席した。式典では、野田在ペナン日本国総領事、吉村ペナン日本人会会長（東レマレーシア社長）の挨拶の他、ペナン日本人学校の歩み、児童・生徒によるソーラン節、太鼓演奏等のアトラクションも披露され、規律正しいながらも華やかな式典が行われていた。式典には、児童・生徒約150名、教職員約30名の他地元企業、支援団体等約20名の来賓が招待された。

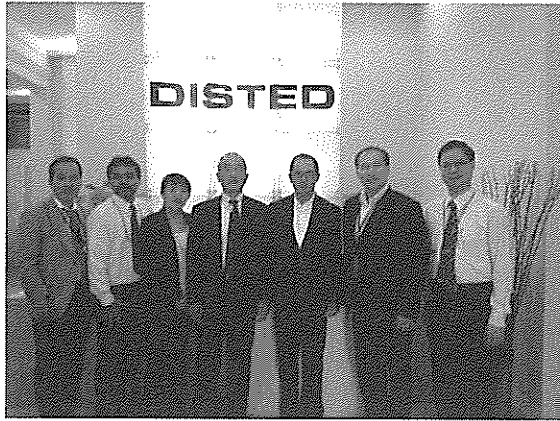


児童・生徒による太鼓パフォーマンス



児童・生徒による合唱

- ・ 10月9日（木）、17日（金）：浜島特任教授（国際交流センター）及びLim 准教授（国際教育センター）、黒田が、Wawasan Open University と同じグループ（Wawasan Education Foundation）の傘下にある DISTED College を訪問し、Dato' Seri Stephen Yeap DISTED Sdn, Bhd. 会長（Yeap 氏は、Wawasan Education Foundation 設置に貢献した地元財界重鎮の親族で Wawasan Open University Sdn, Bhd. の会長も務めている）、Dr. Seah Soo Aun 学長他と教育プログラム等、今後の協力の可能性について意見交換を行った。10月17日（金）には、松田教授・国際教育センター長、浜島特任教授他5名の職員が再度訪問し、連携教育事業他についての意見交換が続けられた。



10月9日、DISTED college 訪問  
右から2番目がDISTED College Seah 学長、  
その左 Dato' Seri Stephen Yeap 氏

- ・10月15日（水）、17日（金）：若原教授（2系系長）、柴田1系教授が、Sebang Perai Polytechnic を訪問し、三機関連携事業として実施しているグローバルFD事業のペナンでの高専教員の講義実施について協議を行い、協力の内諾を得、今後スケジュール等を検討していくこととなった。また、同日、USM関係者とも同じく、高専教員の講義実施について打合せを行い、USMメインキャンパス及び工学部での講義実施を行うことで、USM学内関係学部で調整することとなった。更に、17日（金）には、Penang Skills Development Centre (PSDC) にも講義実施の協力を求め、PSDCがもつ企業のエンジニア向けの講義実施の方向で引き続き検討していくこととされた。
- ・10月16日（木）：第5回TUT-USM協議会がペナン校で開催され、TUT側からは、井上理事・副学長をChairとして、若原教授（2系系長）、中内教授（3系系長）、松田教授・国際教育センター長、柴田教授（1系）、大門教授・国際交流センター長、浜島特任教授（国際交流センター）、梅本特任教授（国際教育センター）、Lim准教授（国際教育センター）、USM側からはShukri副学長他4名が参加した。協議会では、海外実務訓練、研究協力（マクロエレクトロニクス、Waste Management、Material Science、Brain Science）、学生交流、連携教育プログラム、共同セミナー、IGNITE2014、グローバルFD/SD等、種々の協力・連携事業のレビューと今後の協力内容・活動の確認、意見交換が行われた。

#### ○ペナンだより（第4号：平成27年1月26日発行）

##### <主要活動報告>

##### 10月

- ・10月31日（金）：浜島特任教授（国際交流センター）及びLim准教授（国際教育センター）、黒田が、Wawasan Open University、DISTED Collegeを訪問し、Dato' Seri Stephen Yeap DISTED Sdn. Bhd. 会長、Dr. Seah Soo Aun DISTED カレッジ学長他とツイニング等教育プログラムでの協力可能性等につき協議。翌日には、DISTED カレッジ学生寮開所式に出席。

##### 11月

- ・IGNITE2014 への日本側賓客への会議案内・出席依頼先として、S&O 清水管理統括（S&O 社長は阿部社長から谷郷社長に交代。S&O 社長は、ペナン日本人会商工部会会長及びその分科会である三水会の会長、マレーシア日本人商工会議所（JACTIM）ペナン部会会長を務めている。）及び東レマレーシア社川勝部長を11月10日（月）に訪問し、同社吉村社長の会議オープニングでの挨拶を依頼。11月7日（金）に日本人会事務局宗事務局長、11月11日（火）に総領事館及び日本人学校を訪問し、IGNITE2014 オープニング参加を依頼。
- ・11月12日（水）：浜島特任教授（国際交流センター）及びLim准教授（国際教育センター）、黒田が、Wawasan Open University、DISTED Collegeを訪問しDr. Seah Soo Aun DISTED カレッジ学長他とMOU等の協議を行った。
- ・11月18日（火）：井佐原・情報メディア基盤センター長と共に、USMのネットワーク関係者、ペナン校ネットワーク整備業者とUSMが加盟しているマレーシア学術ネットワークMYRENネットワークへの接続への可能性につき打合せを行った。日本からの遠隔教育等コンテンツを配信するためには、現在のペナン校のLAN容量を増やす必要があり、マレーシア学術ネットワークMYRENネットワーク等の活用を打診した。

- ・11月19日（水）：三水会定例会に出席し、IGNITE2014 の案内を行った。
- ・11月28日（土）：野田総領事主催会食に参加。東レマレーシア川勝部長、クラリオン斎藤部長、Panasonic Automobile Systems Malaysia 南部社長、USM 言語学部・招へい講師の副田氏が同席。

## 12月

- ・12月1日（月）：東三河広域経済連合会マレーシア訪問団のペナン校訪問及び企業訪問（モトローラ、Panasonic Automobile Systems Malaysia）等に随行。



東三河広域経済連合会一行ペナン校訪問  
前列中央神野吾郎(株)サーラコーポレーション  
社長・豊橋商工会議所副会頭（団長）

- ・12月5日（金）：浜島特任教授（国際交流センター）及びLim准教授（国際教育センター）及び黒田が、Dato' Seri Stephen Yeap、Wawasan Open University Sdn. Bhd. 会長・DISTED Sdn. Bhd. 会長、Prof. Dato' Dr. Ho Sinn Chye Wawasan 大学学長、Dr. Seah Soo Aun DISTEDカレッジ学長とともに、これまでの学内での議論を踏まえ、MOU 内容についての一部見直し等について協議を行った。
- ・12月8日（月）～12月20日（土）：三機関連携ペナン校 SD 事業・TUT 実務英語研修ペナン実務コース（ステージ2）参加研修生8名がペナンに滞在し、USMの各担当（会計、学生、研究、国際）へのインタビュー、USM 学生との懇談、三機関海外同窓会会議・IGNITE 会議準備を通じた国際実務経験等を行った。また、12月11日（木）～17日（水）は、TUT 実務英語ペナン経験コース（ステージ1）7名が滞在。



SD 研修生（TUT、高専、NUT）

- ・12月13日（土）：TUT 同窓会・海外支部設立準備会議、三機関合同海外同窓生会議及び交流会がペナン校及びNortham All Suite ホテルで開催された。三機関合同海外同窓生会議・交流会には、長岡技術科学大学から佐藤一則国際連携センター長等をはじめ教職員8名、卒業生2名、卒業生家族等3名、高専機構からは黒田孝春理事をはじめ教職員7名、卒業生4名及び豊橋技術科学大学からは、大西学長、井上理事・副学長はじめ教職員30名、卒業生42名、その他10名が参加し、三機関合同海外同窓会の今後の開催頻度、ネットワーク構築等について検討が行われた。
- ・12月14日（日）～16日（火）：14日（日）、TUT 及びUSM の主催、長岡技術科学大学及び高専機構が共催して開催された International Conference of Global Technology (IGNITE) 2014 オープニング及びDato' Seri Kelvin Kiew Kwon Sen・Mini-Circuits Technologies Malaysia 会長・社長への TUT 名誉博士号授与式が行われた。オープニング、名誉博士号授与式には、野田龍二・在ペナン日本国総領事、吉村裕司・ペナン日本人会会長・Toray Industries (Malaysia) Sdn. Bhd. 社長の他、長岡技術科学大学・佐藤一則国際連携センター長、高専機構・黒田孝春理事、USM から、Shukri 副学長夫妻、See Ching Mey 副学長、TUT からは、大西学長夫妻、井上理事・Lim 准教授夫妻、その他賓客・主催者関係者等約150名が参加して行われた。15日（月）・16日（火）には、IGNITE 会議が開催され、口頭発表（4セッション）・ポスター（2セッション）の他、柴崎一郎・本学特命教授による基調講演、高木康夫・大同大学教授、本田晋也・名古屋大学准教授を講師としたチュートリアルセッションが行われた。





IGNITE オープニングセレモニー /  
名誉博士号授与式参加者



IGNITE 論文賞発表

- ・12月15日(月)：本学と Wawasan Open University、DISTED College との間で今後協力の検討をしていることを趣旨とする覚書 (MOU) の締結が行われた。Wawasan Open University、DISTED College の両校は、ペナン校の近隣に位置しており Wawasan Education Foundation が設置した高等教育機関。



MOU 署名に際しての大西学長の挨拶  
(右端演台)、左から3人目井上理事・  
副学長 (於：Wawasan Open University)



MOU 署名後大西学長と Wawasan Open 大学  
Ho 学長と握手 (中央)

- ・12月15日(月)：大西学長が USM を訪問し、Omar 学長、Shukri 副学長、See Ching Mey 副学長、Zainal 工学部長、Lee 研究管理課長・准教授とともに懇談を行い、今後の両大学間での教育プログラム等、具体的な連携・協力について意見交換した。本学からは、大西学長の外、井上理事・副学長、松田国際教育センター長、浜島国際交流センター特任教授、Lim 国際教育センター准教授他が参加した。
- ・12月16日(火)～17日(水)：ペナン州政府(首席大臣室、計画課等)を Lim 国際教育センター准教授及び現地建築士 Tan 氏とともに訪問し、ペナン校用途変更等手続き関係打合せを行った。
- ・平成27年1月5日(月)～：平成26年度グローバル人材育成プログラムによる海外実務訓練がペナンにて開始された(～2/25日)。豊橋技術科学大学の学生12名(日本人学生10名及び留学生2名)が、梅本 CIE 特任教授とともに1月4日にペナンに到着後、5日から USM にて初歩マレー語、工学英語等の講義を含む1週間のオリエンテーションを経て、1月12日から日系企業を含む10社(SAM Engineering & Equipment (M) Sdn. Bhd.、Continental Automotive Components Malaysia Sdn. Bhd.、Altera Corporation Sdn. Bhd.、Keysight Technologies Sdn. Bhd.、Mini-Circuits Technologies Malaysia Sdn. Bhd.、Advantest Engineering Sdn. Bhd.、Ambu Sdn. Bhd.、Toray Industries Malaysia Sdn. Bhd.、Cerca Insights Sdn. Bhd.、ISO Technologies Sdn. Bhd.)において実務訓練を開始した。USM でのオリエンテーションでは、本学教員(梅本 CIE 特任教授、Lim・CIE 准教授、Tan・CIE 特任助教)とともに、本学卒業生であり USM 教員である Dr. Yeoh Fei Yee 先生、Dr. Asrulnizam Bin Abd Manaf 先生他が講師を務めた。

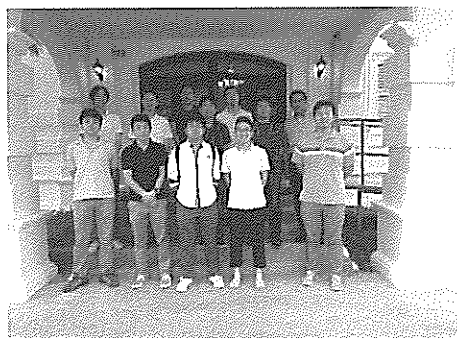


USM International Office でのオリエンテーション開始（1月5日）

・平成27年1月10日（土）～：平成26年度教員グローバル人材育成力強化プログラム（長期グローバルFD研修）に参加している高専教員10名は、12月末にニューヨーク市立大学クイーンズ校での研修を終えた後、年末年始の日本への一時帰国を経てペナンでの研修を開始した。ペナンでは、マレーシア科学大学（USM）、Seberang Perai Polytechnic（PSP）、Penang Skills Development Centre（PSDC）、DISTED College にて、これまでの研修の成果を取り入れた英語での講義を行うこととしている。

1月14日（水）、USM 工学部での水戸・東京工業高等専門学校講師による2つの講義“Electronics and Automobiles”及び“Magnetism and Automobiles”を始めとして、翌15日（木）には、USM 工学部で、小林・仙台高等専門学校助教による“ITS（Intelligent Transport System）”及び“Wireless Sensor Network”、16日（金）には、赤澤・長岡工業高等専門学校准教授による“Next-Generation Energy Source -Biofuel-”及び“How to make biofuel? -From the view of genetic engineering”の講義が行われた。USM 工学部での講義には、USM 教員・学生（大学院生主体）が参加し、14日（水）：25名/15名（1回目の講義（午前）/2回目の講義（午後））、15日（木）34名/21名、16日：18名/18名の聴講があり、講義後にも講師に質問を投げかける姿も多く見られた。

翌週の1月20日（火）～22日（木）には、USM メインキャンパスにて、水戸講師、小林助教、赤澤准教授による講義（第1講義のみ）が行われ、各日それぞれ10名・21名・16名のUSM 教員・学生が聴講した。今後、USM 工学部キャンパス、メインキャンパスでの講義が続けられる他、Seberang Perai Polytechnic（PSP）、PSDC、DISTEDでの講義が行われる予定。USMの講義は、USM・IPS（Institute of Postgraduate Studies）の講義スケジュールアレンジ等、事業実施の協力を得て実施された。今般のペナン研修開始にあたっては、本学から柴田教授（1系）、Lim 准教授（CIE）、Tan 特任助教（CIE）が参加した。



グローバルFD教員、柴田TUT教授、TanTUT助教とともにペナン校で撮影（1月11日）



グローバルFD教員、エンジニアリング・キャンパスSERC（Science & Engineering Research Centre）でLimTUT准教授及びUSM博士課程留学生（シブ）Mr Tariq氏（右端）とともに撮影（1月14日）

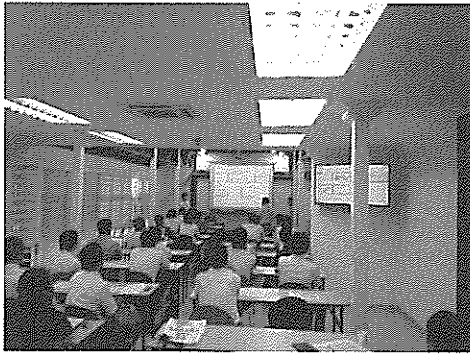
○ペナンだより（第5号：平成27年4月7日発行）

<主要活動報告>

2月

・2月1日（日）：平成26年度海外実務訓練中間報告会がペナン校で実施され、TUTから松田教授（国際

教育センター長、2系)、梅本特任教授(国際教育センター)、Lim准教授(同)、Tan特任助教(同)他、若原教授(2系系長)、柴田教授(1系)、高嶋教授(国際協力センター)、大門教授(国際交流センター長)、浜島特任教授(国際交流センター)及びペナンで長期グローバルFD研修中の高専教員10名が参加して行われた。学生による報告プレゼン、質疑・応答は全て英語で行われた。海外実務訓練報告会の後、高嶋教授(国際協力センター)からのスーパーグローバル創成大学事業及び柴田教授からのTUT入試改革構想についての説明を基に教員と高専教員との間で意見交換が行われた。夕刻、松田教授、浜島特任教授、Lim准教授、黒田は、Wawasan Education Foundation Vice-Chairman、Wawasan Open University Chairman、DISTED College Chairman Dato' Seri Stephen Yeap氏、Wawasan Open University Ho 学長、DISTED カレッジ Sheah 学長と共同教育プログラム等について意見交換を行った。



中間報告発表の様子



参加学生及び高専/TUT教員

- ・ 2月2日(月): 第6回TUT-USM協議会がペナン校で開催された。USM側からは、Shukri副学長、Zainal工学部長、Othman・Institute of Postgraduate Studies学部長他3名が参加、TUT側は松田教授(国際教育センター長、2系)、若原教授(2系系長)、柴田教授(1系)、大門教授(国際交流センター長)、高嶋教授(国際協力センター)、浜島特任教授(国際交流センター)、梅本特任教授(国際教育センター)、Tan特任助教(国際教育センター)、黒田が参加した。協議会では、海外実務訓練、TUT-USM Excellent Student Penang Programの計画(3月実施)等の学生交流事業、共同研究、共同教育プログラム、IGNITE2015、Prestige Lecture、FD/SD、MOA延長等につき、実施・検討状況確認・意見交換が行われた。



TUT-USM協議会での議論



TUT-USM協議会参加メンバー

- ・ 2月2日(月): 本学若原教授(2系系長)、柴田教授(1系)及び黒田がSeberang Perai Polytechnic (PSP)を訪問し、Hj Zulkifli bin Affin校長、Ainiza binti Amin副校長他とグローバルFD事業の実施の詳細について合意し、同事業実施のための書簡交換を行った。また、その他の協力活動の可能性について意見交換が行われた。
- ・ 2月4日(水)～5日(木)、10日(火)～13日(金)、25日(水)～26日(木): 平成26年度教員グローバル人材育成強化プログラム(長期グローバルFD研修)参加高専教員がUSM Institute of Postgraduate Studies (IPS)のアレンジにより、USMメインキャンパス及び工学部キャンパスで英語による講義を行った(坂本岐阜高専講師、藤原明石高専准教授、松本豊田高専准教授、岩下有明高専准教授)。また、2月4日(水)～6日(金)及び9日(月)～10日(火)は、Seberang Perai Polytechnic (PSP)で英語講義を行った(10名の高専教員全員)。

USM の講義では、2 月上・中旬は試験期間、セメスター休暇と重なり、講義受講者数も数名～十数名とやや少なかったが、25日の工学部 SERC の岩下有明高専准教授の講義では午前・午後それぞれ30名・35名の受講者があった。講義の実施キャンパス・日時により受講者数にばらつきがあり、次回実施スケジュール上の課題である。PSP では、10名の高専教員が5日間の午前・午後それぞれ1名、各3時間の講義を行い、32名～235名まで多くの学生が受講した。また、高専教員は、PSP のアレンジにより、2月14日（土）～15日（日）にペナン州マレーシア本島側にある Mengkuang Titi 地区でホームステイ体験をする機会を得た。

※マレーシアのポリテクニクは、教育省傘下であり、全国で32校（2013年10月）ある。一番古いポリテクニクは、Politeknik Ungku Omar, Perak (PUO) でユネスコ支援により1969年に設置されている。PUO 他、Politeknik Sultan Abdul Aziz Shah, Selangor (PSA, 1997年世銀支援により設置)、Politeknik Ibrahim Sultan, Johor (PIS, 1998年世銀支援により設置) は、Diploma (通常3年) の他、学士コース (3年～4年)、Advanced-Diploma コースを開設しており、この3校は、Premier politeknik とされている。ポリテクニク全32校の学生数総計は、89,503人で、男子生徒48,114人 (54%)、女子生徒41,389人 (46%)。教職員数は9,994名で、そのうち教員は7,616人である。長期グローバルFD研修で高専教員が英語講義を行った Politeknik Seberang Prai (PSP) は、1998年設置で、学生数は4228名、教員数356名、非教員職員108名。商業、電子工学、情報通信工学、機械工学分野の diploma コースを提供している。

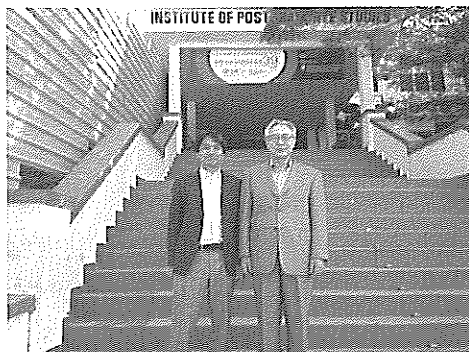


木村先生の講義（於 PSP、2月4日）



岩下先生の講義（於 USM 工学部）

- ・ 2月7日（土）、2月11日（水）：平成26年度ペナン海外実務訓練に参加している学生指導のためにペナンを訪問中の中野教授（研究基盤センター）が2月7日（土）に、また、高橋講師（2系）が2月11日（水）にペナン校を視察した。
- ・ 2月11日（水）～13日（金）：京兼明石高専校長、藤田奈良高専教授が、ペナンを訪問し、ペナン校を訪問した他、グローバルFD研修参加中の高専教員のUSMでの講義を視察した他、地元高校（チュンリンハイスクール）の視察・同校関係者と意見交換を行った。13日（金）には、本学井上理事・副学長が加わり、Penang Science Cluster (PSC) を視察するとともに、長期グローバルFD研修参加中の高専教員10名とともに、ペナン校の有効活用、高専生の海外インターンシップの可能性等につき意見交換を行った。

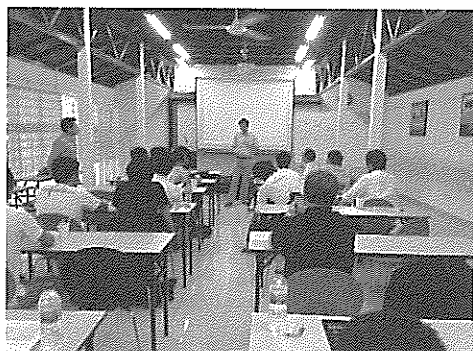


京兼明石高専校長、藤田奈良高専教授（USM 本部、グローバルFD教員による講義視察後）



Penang Science Cluster (PSC) 視察 左端は、PSC director の Dato' Yoon Chong Leong 氏

- ・ 2月20日（金）：ライアン准教授（国際交流センター）が長期グローバルFD研修参加高専教員と英語による講義・教材作成等についての意見交換を行った。
- ・ 2月22日（日）：平成26年度海外実務訓練報告会リハーサルがペナン校で実施され、TUTから、井上理事・副学長、梅本特任教授（国際教育センター）、Lim准教授（同）、ライアン准教授（国際交流センター）、Tan 特任助教（国際教育センター）及びペナンで長期グローバルFD研修中の高専教員10名が参加した。なお、海外実務訓練参加日本人学生は2月26日（木）に全日程を終え無事帰国の途についた。



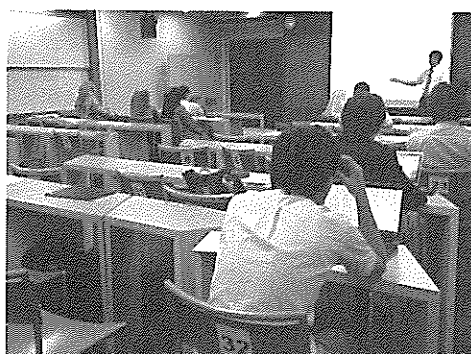
ライアン先生による英語プレゼンに関する講評



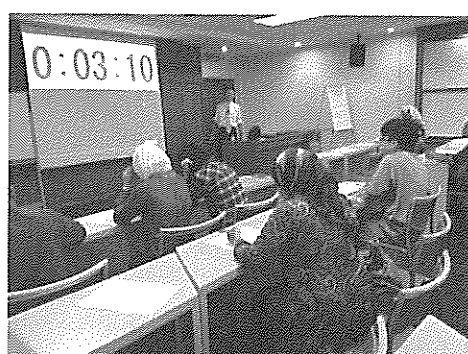
海外実務訓練学生帰国  
（梅本教授他と空港で）

### 3月

- ・ 3月2日（月）：長期グローバルFD研修参加中の藤原明石高専准教授、赤澤長岡高専准教授、小林仙台高専助教、水戸東京高専助教とともに、Penang Science Cluster (PSC) を訪問し、CEOの Mr. Ooi Peng Ee 氏から PSC の活動の説明を受け、協力の可能性につき意見交換を行った。
- ・ 3月3日（火）～6日（金）：平成26年度教員グローバル人材育成力強化プログラム（長期グローバルFD研修）参加高専教員が先月に引き続き、USM Institute of Postgraduate Studies (IPS) のアレンジにより、USM メインキャンパス及び工学部キャンパス Science and Engineering Research Centre (SERC) で英語による講義を行った（大川原北九州高専助教、木村高知専助教、古山富山高専准教授）。講義参加人数は、数名から十数名であった。3月6日（金）の午前・午後とUSMからGIネットを利用した講義ライブ中継をTUT/NUT/高専機構・高専に対して行った。



大川原先生の講義（於 USMメインキャンパス3/6）  
遠隔配信



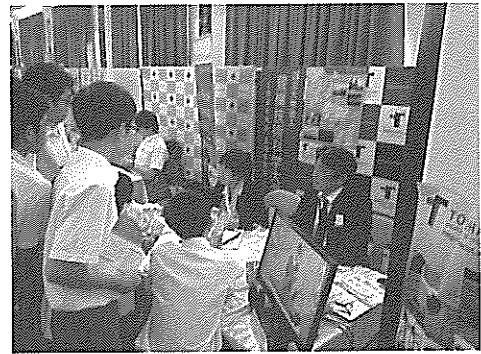
古山先生の講義（於 USMメインキャンパス3/6）  
遠隔配信

- ・ 3月7日（土）：長期グローバルFD研修参加の高専教員10名及びTUTから柴田教授（1系）、高木講師（2系）、笹野助教（1系）が参加して、平成26年度長期グローバルFD研修の実施上課題、来年度の実施に向けた改善点等について意見交換が行われ、その後、同研修の閉会式が行われた。閉会式では、柴田教授から高専教員全員及び高木講師、笹野助教に研修修了証書が手渡された。
- ・ 3月12日（木）～13日（金）：本学スーパーグローバル大学創成事業におけるマレーシアからの優秀な1年次留学生獲得活動の一環として、ペナンで卓越した中等学校として知られる中華系国民型中等学校のチュンリン中等学校（鐘靈中學）が開催する教育展に本学が参加した。同教育展は、マレーシア及び海外の高等教育機関が参加し、学生の進路相談を主目的とする教育フェア。本学からは、高嶋教授SGU推進室室長（国際協力センター）、Lim准教授（国際教育センター）、渋谷施設課長、阿部入試課課員及び黒田が参加した。12日（木）は、バターワース校（8:00～13:30）、13日（金）は、同中等

学校ペナン校（9:00～15:00）での教育展に参加し、200名以上の生徒が本学ブースに立ち寄った（参加高等教育等は12日が40校、13日は75校程度がブースを設置しており、地元新聞報道によると13日は、5000人の参加があったとされている）。

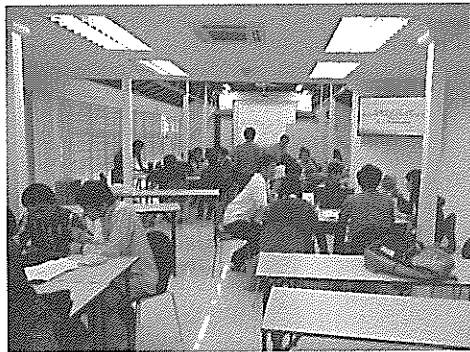


鐘霊中學バターワース校での本学ブース



鐘霊中學ペナン校での本学ブース

- ・ 3月15（日）～23日（日）：平成26年度特別推薦入学者等の海外研修がペナンで実施され、本学学生18名が参加した。今回の研修では、USM メインキャンパスの視察、企業訪問（Mini-Circuits Technologies Malaysia、Panasonic Automotive Systems Malaysia）、19日（木）にはUSM 学生（理学部、コンピューター科学、電気・電子工学科、機械工学科他所属）との学生ワークショップ、市内視察及びホームステイの諸活動が行われた。本学からは、ライアン准教授（国際交流センター）、蒲原特任助教（同）及び萩原国際課留学生係主任が参加した。



ペナン校での USM 学生との協働活動



ペナン校での USM 学生との協働活動

- ・ 3月19（木）～26日（木）：三機関 SD 研修として、北野茨城高专総務課課員及び萩原本学国際課留学生係主任が、ペナン校を拠点として、USM 関係部署（入試課、研究支援課、International Office）スタッフとの意見交換、施設視察を中心とした研修活動を行った。
- ・ 3月25日（水）：井村文部科学省科学技術・学術政策局国際研究専門官、田才同国際交流助成係長、矢野 JST シンガポール事務所 Senior Program Coordinator 及び谷口在ペナン総領事館首席領事が、ペナン校を訪問し、ペナン校での活動、文部科学省の科学技術国際事業等について意見交換を行った。
- ・ 3月29日（日）～30日（月）：本学井上理事・副学長、松田教授（国際教育センター長、2系）、Lim 准教授（国際教育センター）は、ペナンにおける本学への地元有力者であり本学活動への支援・協力者である Wawasan Education Foundation Vice-Chairman・Wawasan Open 大学 Chairman Dato' Seri Stephen Yeap 氏、Minicircuits Technologies Malaysia 会長・社長 Dato' Seri Kelvin 氏と地元高等教育機関・財界との協力について懇談し（29日）、30日には野田・在ペナン日本国総領事、吉村・東レマレーシア社長、川勝同 Executive Director、南部・Panasonic Automotive Systems Malaysia 社長、浦江・ペナン日本人学校長とともに、地元日系企業等との連携、ペナンでの本学の今後の諸活動への協力等について懇談を行った。

## 4. その他

### (1) マレーシア研究大学フェア (RU Carnival @USM)

本学の大学間交流協定校の一つであるマレーシア科学大学 (USM) が主催する Research University Carnival に本学が招待され、松田厚範国際教育センター長 / 教授及び同センター教員の Lim Pang Boey 准教授及び Tan Wai Kian 特任助教、国際課国際教育支援室山田敏也主任の計 4 名が 6 月 13 日、14 日の両日に出席した。

本イベントは、マレーシア政府が選出した 5 つの研究大学が一堂に会し、産学連携を中心とした研究成果を発表するイベントで、マレーシア全国から高校生及び現地企業関係者等が参加した。

イベント 2 日目である 6 月 14 日には、マレーシア教育大臣の Dato' Seri Haji Idris Bin Jusoh 氏もご出席された。松田センター長は、本学の概要及び USM との共同研究に関する説明を行い、続く Industrial Forum では、パネリストとして、Dato' Seri Haji Idris Bin Jusoh 教育大臣、現地企業関係者らとともに産学連携に関する意見を交わした。



マレーシア教育大臣 YB Dato' Seri Haji Idris Bin Jusoh 氏 (右から 3 人目) との交流の様子 (USM 学長 Dato' Prof. Dr. Omar Osman 氏 (右から 2 人目)、マレーシア教育大臣事務局長官 Asma 氏 (右から 1 人目)、本学関係者: 松田 CIE センター長 / 教授 (左から 3 人目)、Lim CIE 准教授 (左から 2 人目)、Tan CIE 特任助教 (後列左から 1 人目)、山田国際課主任 (左から 1 人目))



Industrial Forum の様子 (松田 CIE センター長 (右から 2 番目))

## 5. CIE スタッフ一覧

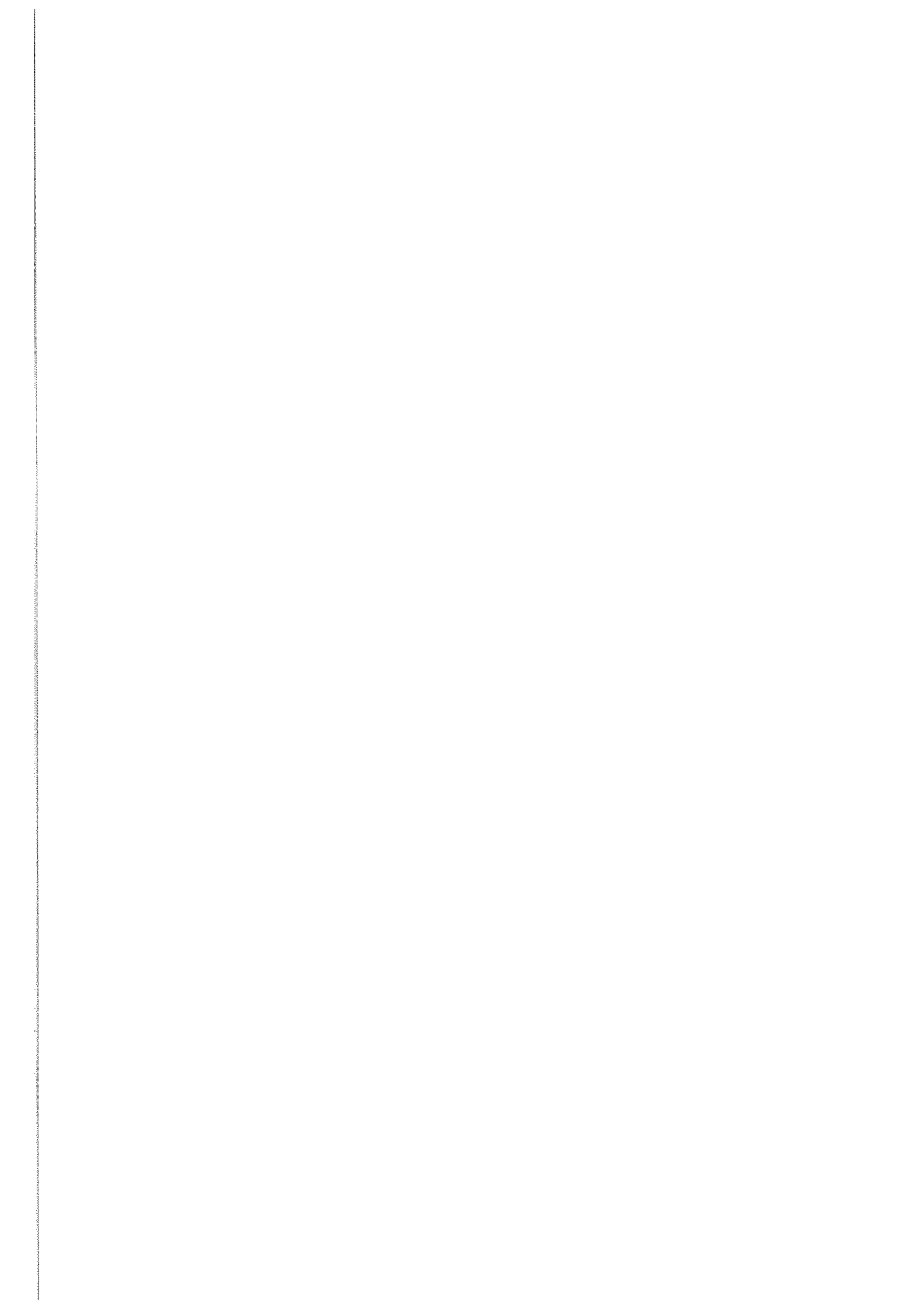
氏 名	所 属 等
松 田 厚 範	CIE センター長（兼務）、（電気・電子情報工学系）
Lim Pang Boey	CIE 准教授（電気・電子情報工学系兼務）
梅 本 実	CIE 特任教授
Tan Wai Kian	CIE 特任助教
柴 田 隆 行	CIE 教授（兼務）、（機械工学系）
福 本 昌 宏	CIE 教授（兼務）、（機械工学系）
若 原 昭 浩	CIE 教授（兼務）、（電気・電子情報工学系）
岩 佐 精 二	CIE 教授（兼務）、（環境・生命工学系）
小 島 俊 男	CIE 教授（兼務）、（健康支援センター）
浜 島 昭 二	CIE 特任教授（兼務）、（国際交流センター）
北 崎 充 晃	CIE 准教授（兼務）、（情報・知能工学系）
柴 富 一 孝	CIE 准教授（兼務）、（環境・生命工学系）
澁 谷 晃	CIE 准教授（兼務）、（国際協力センター）
高 木 宏 幸	CIE 講師（兼務）、（電気・電子情報工学系）

### <事務担当>

氏 名	所 属 等
中 田 尚 樹	国際課長
黒 田 清 彦	国際課国際教育支援室長
坂 口 等	国際課専門員兼国際教育係長
山 田 敏 也	国際課国際教育支援室主任
仲 根 玲 子	国際課国際教育支援室事務補佐員



# IGNITEの取り組み



## IGNITE の取り組み

---

### (1) IGNITE セミナー

【継続案件／対象：学内／内容：大学の国際化（グローバル人材育成、国際理解促進等）をテーマとしたセミナー開催】

平成26年度より、従来の「ICCEED セミナー」を改称し、「IGNITE セミナー」として実施。昨年度は1回のみ開催に留まったことから、本年度は3回の開催目標を立てて取り組んだ（内2回は国際協力センター、内1回は国際交流センターにより実施）。

#### 【概要】

● IGNITE セミナー（旧 ICCEED セミナー）は、従来より本学及び工学教育の分野で途上国協力を携わる大学等を対象に途上国協際に際し必要となる知識の向上を目的として実施している。併せて、グローバル化の進展に対応した国際競争力のある教育・研究体制を整えるために必要な関連知識の提供等を目的として開催している。

#### 【平成26年度の活動】

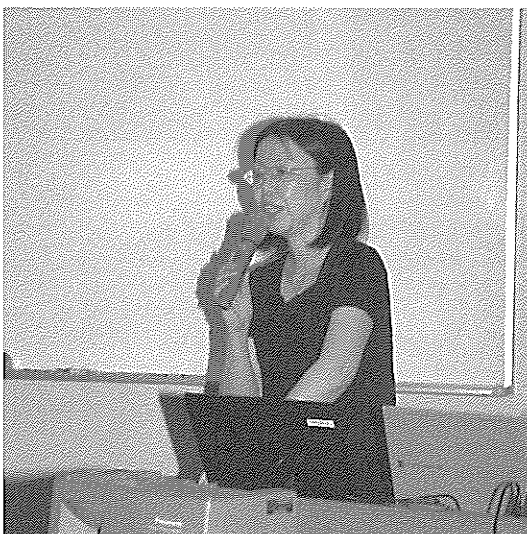
##### ■第1回 IGNITE セミナー 「大学による国際協力とは一課題と展望」(国際協力センター担当)

セミナー概要：平成26年7月18日（金）開催。国際社会への貢献・国際協力の中で、大学の教育と研究活動がどのような役割を持つべきか、国際社会・世界の高等教育の状況、JICA と本邦大学との相互補完・協力関係、大学との連携に対する期待などについて取り上げた。

講師：佐野 景子氏（JICA 人間開発部 次長兼高等教育・社会保障グループ長）

講演に先立ち、澁谷晃 国際協力センター准教授が、国際協力の意味と本学の国際協力活動・体制について概説。

合計44名（教員13名、職員6名、日本人学生17名、留学生7名、その他1名）の参加者があり、JICA の協力事業の在り方、事業による研究機材等の活用の在り方、奨学金支援による留学生の帰国後の継続的な支援への期待、学生生活で学んでいることの将来的な活用方法などについて、活発な議論が行われた。



〈JICA 人間開発部 佐野景子氏〉



〈講演の様子〉

■第2回 IGNITE セミナー「世界の国の産業 ―現状と課題― (11ヶ国の研修員が語る各国事情)」(国際協力センター担当)

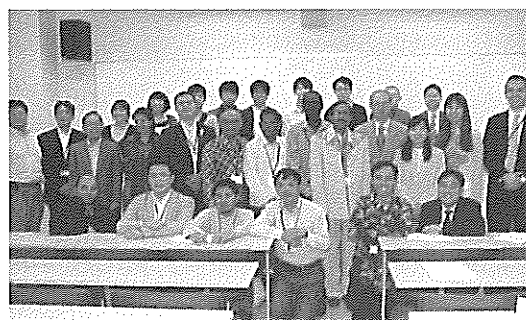
平成26年10月20日(月)開催。主に学生の多文化理解力向上を促進するため、アジア、中南米、中近東、アフリカの11ヶ国14名の JICA 課題別研修「産学官連携による知的クラスター振興」参加者(行政官、大学関係者など)が自国の産業の現状、各国文化、歴史、社会、観光などの幅広い事項について説明を行い、参加者との間で質疑応答を行った。

講師：JICA 課題別研修 研修員(インド、インドネシア、エジプト、カザフスタン、ケニア、中国、マレーシア、ミャンマー、メキシコ、ブラジル、ベトナム)

研修員達は、母国のそれぞれの民族衣装で、各国毎に特徴ある英語で学生に向けて自国の産業の現状や、文化、歴史、社会、観光などの幅広い話題について熱く語り、参加者は、各国の知見を得たのみならず英語によるプレゼンや質疑応答などが決して難しいものではなく、むしろ楽しいということを感じられた様子だった。終始、アットホームな雰囲気の中、学生からも積極的に質問があり、双方向に活発なやり取りが行われた。



〈研修員によるプレゼンテーション〉



〈セミナー終了後〉



〈会場の様子〉

### ■第3回 IGNITE セミナー 「モンゴルにおけるフィールドスタディーを通じた学びの創造・支援―「現場の知」と「机上の知」の統合―」（国際交流センター担当）

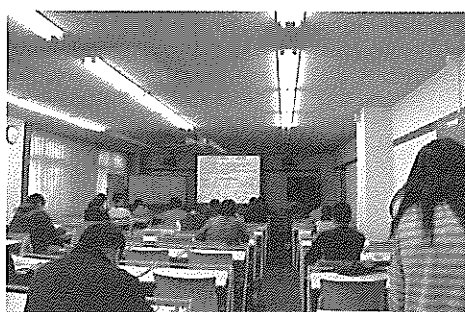
1月28日（水）15:00～16:10 講演「モンゴルにおけるフィールドスタディーを通じた学びの創造・支援 ―「現場の知」と「机上の知」の統合―」（東京国際大学国際関係学部教授 岡本能里子氏）を行った。

本学にはモンゴルに関連した研究を行う教員も在職し、高専への留学を経て学部3年次に編入学したモンゴル人留学生も5名在籍している。また、文科省「スーパーグローバル大学創成支援」の採択による留学生枠設置や、JICA有償資金協力事業「モンゴル工学系高等教育支援」の参加など、モンゴルと本学との結びつきは今後ますます強くなることが期待されます。モンゴルに関する知見を深めるため、今回のセミナーでは10年来モンゴルへ日本人学生を引率しておられる岡本氏からお話を伺った。



〈大門裕之 国際交流センター長と岡本能里子氏〉

モンゴルフィールドスタディーは、東京国際大学国際関係学部の現場学習プログラムの一つで、「机上の知」（国際関係科目と日本語教育科目）を踏まえた「現場の知」（日本語教育実習）として導入され、両者を統合する事前学習と事後学習を含めて初めて完結するものと位置づけられています。たとえば、事前学習として、動詞「～することができます」の練習と環境問題をリンクさせ、1) 「ペットボトルはTシャツにリサイクルすることができます」「新聞紙は再生紙にリサイクルできます」などの文練習、2) 世界各国のリサイクル状況に関する作文、3) モンゴルのゴミ減量に関するディスカッション、という教案を作成、模擬授業を行った。ところが、実際に現地で教えてみて、モンゴルではリサイクル技術がなく、ゴミの分別収集もなく、ゴミをゴミ箱に捨てるという習慣もあまりないことが判明したのである。帰国後の事後学習ではこれらを振り返り、報告書執筆や国内外での発表会を実施している。

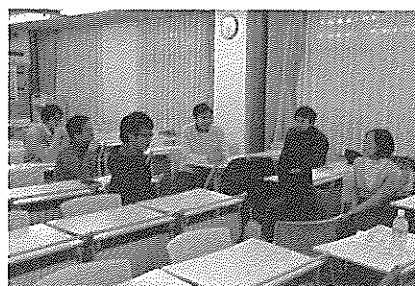


〈講演会場の様子〉

カウンターパートである新モンゴル高校は、平成12年にモンゴル初の日本式高校として設立した学校で、部活動、掃除、上履き、制服、給食、始業・終業時の起立・礼などを取り入れている。卒業後は日本へ留学する生徒が多いが、決して私利私欲に走らずモンゴルの発展のために役立つ人間になるよう、高校創設者である校長先生（現学園長）の薫陶を受けているそうだ。将来きっと卒業生の中から大統領が出るだろうと、学校の前には銅像を建てる台がすでに置いてあるということである。

モンゴルの若い力に感銘を受けるとともに、国際協力の意義を改めて考える良い機会となった。ご多用中ご来豊くださった岡本氏と参加者27名の皆様（教員13名、職員4名、日本人学生6名、留学生4名）に感謝する。

〈新モンゴル高校出身者を交えた懇談会→〉



## (2) IGNITE オープンフォーラム

【継続案件／対象：国内／内容：大学の国際化（グローバル人材育成、国際理解促進等）に関する学外フォーラム開催】

平成26年度より「IGNITE オープンフォーラム」と改称。「グローバル化時代の産業競争力強化と高度技術者育成」をテーマとして、新しい産業人材育成の在り方について産学官関係者で考察した。

### 【概要】

●本学オープンフォーラムは、平成14年度以降、国内外から多彩な講師を招いて毎年開催しており、主に工学教育国際協力に関する政策的・実践的側面に関する講演や議論を行ってきた。平成26年度は「ICCEED オープンフォーラム」から「IGNITE ～」へと改称、主催も変更した。これに伴い、従来の国際協力を軸としたテーマ設定から、「大学の国際化」や「グローバル人材育成」など大学を取り巻く昨今の広範な課題に関連するテーマを取り上げて実施することとなった。本学、大学関係者のみならず、地域の産業・企業関係者、中央政府、地方自治体等の多様な関係者の参加を得て開催し、昨今の有意な取り組みや潮流について紹介する機会にするとともに、講師・参加者間の議論を通じて相互に理解を深めることを目的とした。

### 【平成26年度の活動】

第13回目となる平成26年度はテーマを「グローバル化時代の産業競争力強化と高度技術者育成」とし、特にアジアを中心とした産業構造、ビジネス環境の変化の潮流を俯瞰し、最前線で活躍する企業が求める人材像について考察するとともに、グローバルな高度技術者を育成する上で大学に期待される役割について産学双方の参加者間で議論を深め、これからの新しい産業人材育成の在り方について考察した。具体的な本フォーラム開催の狙い、及び進め方については以下の通り。

#### ■開催日時

平成27年3月19日（木）於：JICA 中部国際センター（名古屋市）13：30～17：30

#### ■開催の狙い、進め方

- ①産業のグローバル化進展とわが国産業界（企業）の対応にかかる現状の把握。
- ②かかる状況・環境の中で、企業競争力を高めるためには「ものづくり」の中核となる技術者の高度化（高い技術力を有するだけでなく市場をリードする新たな製品・サービス等の価値を創出出来る、分析力・企画力とそれを実現出来る技術を持ち得る）が重要であることを再確認。
- ③そのような高度技術者の育成、能力強化の実現にとって、各講演を踏まえ、企業と大学各々に求められる機能・役割と今後の連携のあり方について考え、重要なポイントを抽出し、以後の取り組みに活かす。

#### ■開催場所：独立行政法人国際協力機構 中部国際センター（名古屋市）

■出席者数：産業界・企業、大学、国際協力関係機関・団体等より約50名

■本テーマによる開催に当たっての基本的な問題認識は以下の通り。

- a. 産業構造の変化：昨今、グローバルな規模で産業構造が変化。産業界、ものづくり企業の「求める人材像」も変化。特にアジアをはじめとする海外に展開する企業に顕著。
- b. 高度技術者に求められる要件の変化：産業人材、特にものづくりの中核を担う高度技術者に要求される技術レベル、素養、育成のスピードなども変化。
- c. わが国の産業界・企業が国際競争力を確保する上で人材に求める要件について理解を深めたい。

併せて、海外展開する上で養成すべき各国人材の要件、有効な方法論についても産業界、大学が共に考えて行くことが重要。

d. アジアを中心とした産業構造、ビジネス環境の変化の潮流を俯瞰、求められる人材、大学に期待される役割、これからの新しい産業人材育成のあり方を考察。

■以下、全体：5人のスピーカーより講演、質疑応答＋ディスカッション。

(1) 湯本 潤司氏 (東京大学大学院理学系研究科教授 / 前 NEL America, Inc. President & COO)

①企業経験をお持ちで現在は大学にて研究・教育活動。

②企業人／大学人という立場を超えて、グローバル化の進展に伴う、「ビジネス環境の変化」と「企業の対応」、「技術系人材 (特にものづくりの中核を担う高度技術者) に求められる要件」等が変容してきている現状について俯瞰。

③ご自身はアメリカにおける企業立ち上げの経験有、それを踏まえ技術系人材のあるべき姿や育成方法について知見を披露頂いた。

(2) 小島 史夫氏 (株式会社デンソー ダントツ工場推進部 テクニカル・エキスパート)

①グローバル企業における「ものづくり」と人材育成の実際についてお話し頂いた。

②デンソーのこれまでの取り組みと「内側」から見た現状、海外 (開発途上国 / ドイツ等) の現状、インドネシアにおける産業人材育成にかかる取り組み等についてもご紹介頂いた。

③基調講演の理解に具体的なイメージを与え、参加者の議論を誘発するものになった。

(3) 中山 良一氏 (工学院大学グローバルエンジニアリング学部教授 / (公財) 日本工学教育協会理事)

①産業界の求める人材像を念頭に、企業 (東芝)・大学 (工学院) での経験を踏まえ、実際に企業が求めるリーダー／高度技術者 (イノベーションを牽引する) の要件と、企業と大学における人材育成の仕組み、役割等についてお話し頂いた。

②日本工学教育協会理事の立場から教育の質的担保としての「教育士」の制度等についても併せてご紹介頂いた。

(4) 大学の取り組み

東海地域における大学2校 (名古屋大、本学) より、大学の国際化、グローバル人材育成に向けた最新の取り組みについて紹介。両校はいずれも本年度、文科省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」に採択、その取り組みにも触れた。高等教育現場での議論・実際について産業界関係者の理解・関心を促進した。

(4-1) 渡辺 芳人氏 (名古屋大学理事・副総長)

①「名古屋大学における国際化の基本的な考え方」と題して講演頂いた。

②わが国における国際化のリーディング大学である名古屋大学の多面的な取り組み、戦略等についてご紹介頂いた。大学の最新の取り組みを理解する上で貴重な機会になった。

(4-2) 本学教授・高嶋 孝明 (本学グローバル工学教育推進機構国際協力センター教授兼スーパーグローバル大学創成事業推進本部副本部長)

本学創設以来の高度技術者を育成する教育システム、取り組みや、グローバル化対応に向けた「スーパーグローバル大学創成支援事業」に関する取り組みについて紹介頂き、参加者の本学に対する理解を促進した。

(5) 全体への質疑応答とディスカッション (30分)

産業人材育成にかかる産業界と大学の役割についてフロアと共にディスカッションを実施。本フォーラムのテーマに関する理解を深める好機となった。

## ■プログラム

テーマ：グローバル化時代の産業競争力強化と高度技術者育成

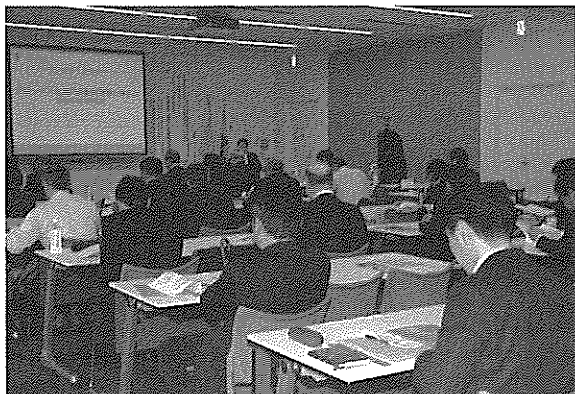
日 時：平成27年3月19日（木）13：30～17：00

開催場所：独立行政法人国際協力機構中部国際センター

主 催：国立大学法人豊橋技術科学大学グローバル工学教育推進機構

後 援：文部科学省、愛知県、独立行政法人国際協力機構

時 間	プログラム
13:30	開 会 司会：澁谷 晃 豊橋技術科学大学国際協力センター 准教授
13:35-13:45	挨拶 穂積 直裕 豊橋技術科学大学国際協力センター長
13:45-14:15	基調講演 グローバル化時代の産業力強化と高度技術者の育成 湯本 潤司 氏 東京大学大学院理学系研究科 教授 / 前 NEL America, Inc. President & COO
14:15-14:45	講 演 デンソーのモノづくり人材育成 小島 史夫 氏 株式会社デンソー ダントツ工場推進部 テクニカル エキスパート
14:45-15:00	休 憩
15:00-15:30	講 演 産学によるグローバル人材育成にかかる取り組み ー企業、大学および日本工学教育協会の視点からー 中山 良一 氏 工学院大学グローバルエンジニアリング学部 教授 / 公益社団法人日本工学教育協会 理事
15:30-16:00	講 演 名古屋大学における国際化の基本的な考え方 渡辺 芳人 氏 名古屋大学 理事・副総長
16:00-16:20	報 告 豊橋技術科学大学のグローバル人材育成に向けた取り組み 高嶋 孝明 豊橋技術科学大学国際協力センター 教授 スーパーグローバル大学推進室長
16:20-16:30	休 憩
16:30-17:00	質疑&ディスカッション 司会：穂積 直裕 豊橋技術科学大学国際協力センター長
16:50-17:00	閉 会



〈会場の様子〉



〈質疑応答〉



(3) グローバル工学教育推進機構委員会委員・グローバル工学教育推進機構構成員・国際課職員

■グローバル工学教育推進機構委員会委員

委員長	理事・副学長	井上 光輝
副委員長	教授	松本 明彦
国際協力センター長	教授	穂積 直裕
国際交流センター長	教授	大門 裕之
国際教育センター長	教授	松田 厚範
機械工学系	准教授	安井 利明
電気・電子情報工学系	教授	長尾 雅行
情報・知能工学系	教授	関野 秀男
環境・生命工学系	准教授	田中 照通
建築・都市システム学系	准教授	渋澤 博幸
総合教育院	准教授	中森 康之
国際交流会館主事	准教授	桂田 浩一
国際協力センター	教授	高嶋 孝明
国際協力センター	准教授	澁谷 晃
国際教育センター	准教授	Lim Pang Boey
国際課	課長	中田 尚樹

■グローバル工学教育推進機構構成員

機構長	井上 光輝
副機構長、国際協力センター長・教授（電気・電子情報工学系兼務）	穂積 直裕
副機構長、国際教育センター長・教授（兼務）（電気・電子情報工学系）	松田 厚範
国際交流センター長・教授（環境・生命工学系兼務）	大門 裕之
国際協力センター・教授	高嶋 孝明
教授（兼務）（建築・都市システム学系）	井上 隆信
教授（兼務）（情報メディア基盤センター）	井佐原 均
教授（兼務）（知能・情報工学系）	中内 茂樹
准教授（国際教育センター兼務 H26/7/1～）	澁谷 晃
准教授（兼務）（機械工学系）	関下 信正
特任助教	余語 豊彦
国際交流センター・特任教授（国際教育センター兼務 H26/11/1～）	浜島 昭二
准教授（知能・情報工学系兼務）	桂田 浩一
准教授	村松 由起子
准教授	吉村 弓子

准教授（講師～H26/9/30 准教授 H26/10/1～）（総合教育院兼務）

Ryan Eugene

特任助教

蒲原 弘継

助手

鈴木 聖子

国際教育センター・特任教授

梅本 実

教授（兼務）（機械工学系）

柴田 隆行

教授（兼務）（機械工学系）

福本 昌宏

教授（兼務）（電気・電子情報工学系）

若原 昭浩

教授（兼務）（環境・生命工学系）

岩佐 精二

教授（兼務）（健康支援センター）

小島 俊男

准教授（電気・電子情報工学系兼務）

Lim Pang Boey

准教授（兼務）（知能・情報工学系）

北崎 充晃

准教授（兼務）（環境・生命工学系）

柴富 一孝

講師（兼務）（電気・電子情報工学系）

高木 宏幸

特任助教

Tan Wai Kian

■国際課職員（平成26年4月～平成27年3月）

課長

中田 尚樹（H25/4/1 着任）

国際企画係

係長

丸山 憲洋（H24/9/1 着任）

係員

市川 麻衣子（H25/10/1 着任）

事務補佐員

鹿子嶋 味佐子（H25/4/1 着任）

事務補佐員

河村 修見（H25/4/1 着任）

事務補佐員

城本 美乃里（H21/1/1 着任）

事務補佐員

浦本 咲（H26/8/18 着任）

留学生係

係長

與語 貴生（H23/7/1 着任）

主任

福村 静（H24/9/1 着任）

主任

栗田 多映子（H25/9/1 着任）

主任

萩原 孝明（H26/9/1 着任）

係員

梁瀬 美紀（H24/9/1 着任）

係員

浦川 辰也（H22/1/1 着任～H26.8.31）

特命事務職員

村田 もえ（H20/4/1 着任）

特命事務職員

河合 智子（H26/1/1 着任）

特命事務職員

松本 智枝（H27/3/19 着任）

事務補佐員

村越 朱美（H25/10/1 着任）

事務補佐員

田口 悠里（H25/12/1 着任）

国際交流会館

技能補佐員

高橋 佳子（H25/4/15 着任）

国際教育支援室

国際教育係

特命事務職員 (PO)	黒田 清彦	(H25/7/1 着任)
専門員兼係長	坂口 等	(H26/9/1 着任)
主任 (係員～ H26/8/31 主任 H26/9/1 ～)	山田 敏也	(H25/10/1 着任)
事務補佐員	仲根 玲子	(H25/7/1 着任)
事務補佐員	行成 美佐	(H26/11/1 着任)
事務補佐員	平松 千明	(H26/12/1 着任)
事務補佐員	平松 明子	(H27/3/1 着任)

国立大学法人豊橋技術科学大学  
グローバル工学教育推進機構 (IGNITE)  
国際協力センター (ICCEED)  
国際交流センター (CIR)  
国際教育センター (CIE)

2014年度（平成26年度）活動報告書

.....  
2015年 7 月

編集・発行 豊橋技術科学大学 グローバル工学教育推進機構

〒441-8580 愛知県豊橋市天伯町雲雀ヶ丘 1-1  
TEL (0532)44-6938  
FAX (0532)44-6935  
E-Mail [master@icceed.ignite.tut.ac.jp](mailto:master@icceed.ignite.tut.ac.jp)  
.....